幕末、明治期の日露関係史の諸問題に関する実証的研究

НОВЫЕ МАТЕРИАЛЫ К ИСТОРИИ
РОССИЙСКО-ЯПОНСКИХ ОТНОШЕНИЙ
(СЕРЕДИНА XIX - НАЧАЛО XX ВЕКОВ)

(研究課題番号 06801063)

平成6年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書

平成9年3月

研究代表者 澤田 和彦

(埼玉大学教養学部教授)

Кадзухико САВАДА - Университет Сайтама

55

目　　次

研究の概要 3
まえがき 7

第1章　I・A・ゴンチャローフと日本
ゴンチャローフ『日本渡航記』再読--内外の史料との比較で-- 10
日本におけるゴンチャローフ(1853-1854年)(露文) 21
日本におけるゴンチャローフ文学の受容(露文) 28
第2章　二葉亭四迷
＜翻訳＞ジャネット・A・ウォーカー著　二葉亭四迷の日本最初の
小説『浮雲』におけるロシアの役割 41
日本におけるツルゲーネフの受容(露文) 60
＜書評＞佐藤清郎著『二葉亭四迷研究』(有精堂出版、1995年) 69
第3章　B・ピウスツキと日本
ブロニスワフ・ピウスツキと日本 73
ブロニスワフ・ピウスツキと20世紀初頭の日本(露文) 81
ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本
--東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に-- 97
ブロニスワフ・ピウスツキと東京音楽学校の
女流音楽家の交際について(露文) 118
第4章　環日本海交流
近代日露関係史のなかの越後人 129
＜史料紹介＞新潟港に関するロシア軍艦の調査報告書について 140
新潟とロシア(1900-1945年) 147
第5章　来日白系ロシア人
女優スラーヴィナ母娘の旅路--来日白系ロシア人研究-- 157

埼玉大学附属図書館
319.1
Sa
埼大コーナー
978025500
蔵書

СОДЕРЖАНИЕ

Постановка проблем 3

Предисловие 7

Глава I И. А. ГОНЧАРОВ И ЯПОНИЯ

Перечитывая *Фрегат "Паллада"* И. А. Гончарова. --Сравнение с японскими и иностранными историческими источниками-- 10

И. А. Гончаров в Японии (1853 – 1854 г.) 21

Творчество И. А. Гончарова в Японии 28

Глава II ФТАБАТЭЙ СИМЭЙ

Перевод статьи: Janet Walker. The Russian Role in Futabatei Shimei's Creation of the First Japanese Novel: *Ukigumo* (The Floating Cloud), 1886-89 41

И. С. Тургенев в Японии 60

Рецензия на книгу: САТО Сэйро. *Фтабатэй Симэй Кэнкю (Изучение жизни и творчества Фтабатэя Симэя).* "Юсэйдо", 1995. 69

Глава III Б. ПИЛСУДСКИЙ И ЯПОНИЯ

Бронислав Пилсудский и Япония 73

Бронислав Пилсудский и Япония начала XX века 81

Япония глазами Бронислава Пилсудского --Его знакомство с музыкантками Токийской музыкальной школы-- 97

Знакомство Бронислава Пилсудского с музыкантками Токийского музыкального училища 118

Глава IV СВЯЗИ МЕЖДУ РОССИЕЙ И ЯПОНИЕЙ ЧЕРЕЗ ЯПОНСКОЕ МОРЕ

Выходцы из префектуры Нийгата в истории российско-японских отношений нового времени 129

Перевод "Отчета лейтенанта Назимова по осмотру порта Нийгата" Комментарии 140

Префектура Нийгата и Россия (1900 – 1945 г.) 147

Глава V РУССКИЕ БЕЛОЭМИГРАНТЫ В ЯПОНИИ

Жизненный путь актрис Славиных --Изучение жизни русских белоэмигрантов в Японии-- 157

研究の概要

平成6年度～平成8年度　科学研究費補助金(基盤研究C)

研究課題番号　06801063

研究課題　　幕末、明治期の日露関係史の諸問題に関する実証的研究

研究組織　　研究代表者　：　澤田　和彦　(埼玉大学教養学部教授)

研究経費

平成6年度	900千円
平成7年度	600千円
平成8年度	200千円
計	1,700千円

研究発表

I.　学会誌等

1.　"Помощь айнам он считал важнейшей обязанностью". *Владивостокское время*, № 42, 14 сентября 1994 г.

2.　「G・D・イワノワ女史の手紙」(翻訳)　『ケーベル会誌』2　1994年12月25日

3.　"Бронислав Пилсудский в Японии". *Japanese Slavic and East European Studies.* vol.15, 28 February 1995.

4.　I・A・ゴンチャローフ著「大学にて　50年前に我々はいかなる教育を受けたか」(翻訳)　『埼玉大学紀要　外国語学文学篇』28　1995年2月28日

*5.　「ゴンチャローフ『日本渡航記』再読--内外の史料との比較で--」　『一橋

論叢』114-3(659)　1995年9月1日

6.　"Пребывание Бронислава Пилсудского в Японии". *Краеведческий бюллетень,* 1995 №3. Южно-Сахалинск.

7.　"Влияние романов И. А. Гончарова на японских писателей в конце XIX века". *Studia Rossica Poznaniensia,* zeszyt XXVI, Poznań, 1995.

*8.　"И. А. Гончаров в Японии (1853-1854 г.)". *Русский язык за рубежом,* 1995 № 2-3. Москва.

9.　「橘糸重のB・ピウスツキ宛書簡二通［翻刻・解説］」　『ケーベル会誌』3 1995年12月25日

*10.　「ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本--東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に--」　『スラヴ研究』43　1996年3月25日

*11.　「<史料紹介>新潟港に関するロシア軍艦の調査報告書について」　『地域史研究　はこだて』23　1996年3月31日

*12.　「佐藤清郎著『二葉亭四迷研究』(有精堂出版、一九九五年)」　『比較文学』38　1996年3月31日

13.　「極東諸民族歴史・考古・民族学研究所(ウラジオストク)の国際会議に参加して」　『スラブ研究センターニュース』66　1996年7月23日

14.　「極東諸民族歴史・考古・民族学研究所の国際会議に参加して」　『函館日ロ交流史研究会会報』1　1996年8月21日

*15.　「女優スラーヴィナ母娘の旅路--来日白系ロシア人研究--」　『埼玉大学紀要』32-1　1996年10月15日

16.　「極東諸民族・歴史・考古・民族学研究所(ウラヂヴォストーク)の国際会議に参加して」　『日本ロシア文学会国際交流委員会　国際交流ニューズレター』8 1996年12月7日

17.　「白系ロシア人女優スラーヴィナ母娘」　『スラブ研究センター研究報告シリーズ№60　ロシア文化と日本：人の交流を中心として』　1996年12月10日

18.　「特集--思い出の三冊、私の書棚から」　『窓』100　1997年3月(発表予定)

*19.　"Бронислав Пилсудский и Япония начала XX века". *Исторические чтения,*

№ 2. Сахалинское областное книжное издательство, 1997. (発表予定)

II. 口頭発表

1. "Бронислав Пилсудский в Японии". 第2回函館・ウラヂヴォストーク・日露交流史シンポジウム　ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所　ウラヂヴォストーク　1994年9月6日

2. 「ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本--東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に--」　ロシア史研究会例会　1996年1月20日

3. 「女優スラーヴィナ母娘について」　亡命ロシア人研究会　1996年4月6日

4. "Знакомство Бронислава Пилсудского с музыкантками Токийской музыкальной школы". 国際学術会議「世界史のコンテキストにおけるロシア極東：過去から未来へ」　ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所　ウラヂヴォストーク　1996年6月19日

5. 「亡命ロシア人に関する最近の研究動向」　亡命ロシア人研究会　1996年7月13日

6. 「白系ロシア人女優スラーヴィナ母娘」　北海道大学スラブ研究センター文化史セミナー「ロシア文化と日本：人の交流を中心として」　1996年10月4日

III. 出版物

*1. 「近代日露関係史のなかの越後人」　古厩忠夫編『環日本海叢書3　東北アジア史の再発見　歴史像の共有を求めて』所収　有信堂　1994年5月15日

2. "Гончаров глазами японцев". 《Ivan A. Gončarov: Leben, werk und Wirkung; Beiträge der I. Internationalen Gončarov-Konferenz, Bamberg, 8.-10. Oktober 1991》, Böhlau Verlag, Köln, Weimar, Wien, 1994.

*3. "Творчество И. А. Гончарова в Японии". 《И. А. Гончаров (Материалы международной конференции, посвященной 180-летию со дня рождения И. А. Гончарова)》, Ульяновск, "Стрежень", 1994.

*4. ジャネット・A・ウォーカー著「二葉亭四迷の日本最初の小説『浮雲』におけるロシアの役割」(翻訳) 中村喜和、トマス・ライマー編『国際討論 ロシア文化と日本 明治・大正期の文化交流』所収 彩流社 1995年1月20日

*5. "Бронислав Пилсудский в Японии", 「ブロニスワフ・ピウスツキと日本」『'94 函館・ロシア極東交流史シンポジウム「函館・ロシアの交流を探る」--日露関係史・その過去と現在-- 報告書』所収 函館日ロ交流史研究会 1995年3月15日

6. 「モスクワの青春--ゴンチャローフの学生時代」 坂内徳明・栗生沢猛夫・長縄光男・安井亮平編『ロシア 聖とカオス 文化・歴史論叢』所収 彩流社 1995年3月30日

*7. "И. С. Тургенев в Японии". 《Ivan S. Turgenev; Leben, Werk und Wirkung; Beiträge der Internationalen Fachkonferenz aus Anlass des 175. Geburtstages an der Otto-Friedrich-Universität Bamberg, 15.-18. September 1993》, Verlag Otto Sagner, München, 1995.

*8. 「女優スラーヴィナ母娘の旅路」、「新潟とロシア(1900-1945年)」 奥村剋三・左近毅編『日本文化とロシア--異文化の出会い--』(仮題)所収 世界思想社 1997年4月(発表予定)

*9. "Знакомство Бронислава Пилсудского с музыкантками Токийского музыкального училища". 《Материалы международной научной конференции》, Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН, Владивосток, 1997. (発表予定)

10. "Комментарий к "Фрегату Паллада"". 《Полное собрание сочинений И. А. Гончарова》, т. IV, ИРЛИ РАН, 1997. (発表予定)

*は本報告書所収のもの。

まえがき

19世紀中葉から20世紀初頭にかけての日本は、諸外国との交流の途が開かれ、西洋の文物が急激に流入した。ロシアも日本にとっては西洋の先進国であり、事実わが国に及ぼした文化的影響は決して小さくないが、それは他の欧米諸国の影響に比べて顧みられることは少なかった。

本研究は、まず第一にロシアの第3回遣日使節E・V・プチャーチン提督の長崎来航(1853年)から日露戦争(1904-1905年)直後の時代までの日本とロシアの、主として文化上の諸問題に関わる事実を、関係資料を渉猟しつつ、できる限り多く発掘し、第二にそれを既成の日露関係史上に位置づけ、かつなぜそれが従来等閑に付されてきたかを考察することを、その目的としている。これを国際政治や国際関係論の視点から問うのではなく、過去のロシア人の日本観と日本人のロシア観を検討し、日本に与えたロシアの文化的影響の個々の事象をおさえた上で、日露両国人の抱く相手国のイメージの根源に迫り、そこから問題を捉え直そうとするところに本研究の特色がある。

本研究は以下に挙げる具体的な論点に沿って、精密な書誌を作成しつつ行われた。

(平成6年度)

これまでの研究の続きとして、以下の諸点に取り組んだ。

1. プチャーチン提督の秘書として長崎に来航したゴンチャローフの『日本渡航記』にうかがわれる、ロシア人の観た幕末の日本及び日本人観
2. 日本最初のプロのロシア語通辞・志賀親朋の生涯と活動
3. 二葉亭四迷、嵯峨の屋お室など、東京外国語学校魯語科出身者によるロシア文化紹介の仕事
4. 日本の環日本海地域と極東ロシア、サハリンとの関わり
5. 日本の北洋漁業の盛衰

(平成7年度)

前年度の研究を踏まえつつ、以下の諸点に取り組んだ。

1. コレンコ、グレー、ケーベルといった東京外国語学校や東京帝国大学のロシア人教師や、マトヴェーエフ、B・ピウスツキのような亡命ロシア人、ポーランド人の日本での事跡と日本観

2. 以上6点に直接もしくは間接に必然的に関わってくる、千島樺太交換条約(1875年)と日露戦争の有する文化史的意義

(平成8年度)

これまでの研究を整理、総括し、明らかにしえた点と今後の課題を列挙、検討した。

第1章　Ｉ・Ａ・ゴンチャローフと日本

ゴンチャローフ『日本渡航記』再読
――内外の史料との比較で――

はじめに

1853年８月10日①、ロシアの作家イワン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャローフ（1812－1891）はプチャーチン提督付きの秘書官として、フリゲート艦パルラダ号で長崎に来航した。プチャーチン来航の目的は、日本との通商交渉とサハリンでの国境画定である。この一月前、アメリカのペリー提督率いる４隻の黒船が浦賀に来航して開国を迫り、200年以上の鎖国状態にあった日本の人心を驚愕せしめたが、ロシア船の出現はこれに次いで日本にとっての衝撃的事件となった。ロシア使節に対して日本側がとった態度は、ひたすら延引策にこれ努めることだった。ロシア側は辛うじて国書を受領させたものの、最初の３カ月は日本側から何ら返答を得られず、江戸から４人の全権員が到着して本格的な交渉が始まったのは、翌年１月７日のことだった。しかし交渉は不首尾に終わり、ロシア側が得たものは最恵国待遇の約束のみである。

日本の役人たちの幾人かは長崎旅行時に日記をつけていた。またゴンチャローフと共に来日したロシア人の記録や長崎オランダ商館長の覚え書が公刊されている。本論文では『日本渡航記』②とこれら内外の史料の記述を対比しつつ、気づいたことを述べてみたい。

I

まず日本側の三つの史料に登場するゴンチャローフ像を紹介しよう。

川路左衛門尉聖謨（としあきら、1801－1868）はこの時勘定奉行兼海防掛を務めていた。川路は４人の全権員の中では首席全権の筒井肥前守政憲に次いで第二の地位を占めていたが、筒井は76歳と高齢のため、事実上川路が日本を代表してプチャーチンとの交渉に当たった。1854年、下田で日露和親条約に調印。1868年、徳川幕府の崩壊とともに川路は将軍への忠誠を貫いてピストル自殺で果てた。中風を患って、切腹ができなかったのである。彼は『日本渡航記』に一度ならず登場する。ゴンチャローフはこの日本の高官に概して好意を寄せていたようだ。「川路は非常に聡明であった。彼は私たち自身を反駁する巧妙な弁論をもって知性を閃かせたものの、なおこの人物を尊敬しないわけにはいかなかった。彼の一言一句、一瞥、それに物腰までが――すべて良識と、機知と、炯眼と、練達を顕していた。」③

川路は長崎行の出発から江戸帰着まで日記をつけていた。このユーモアに富む『長崎日

記』は川路にとって、江戸に残してきた妻子、家来に数日分ずつ道中や出張先での様子を知らせる手紙の役割をも果たしていた。この日記中に都合７箇所ゴンチャローフに関する言及がある。例えば、「今般参り候魯人名前、使節プーチャーチン（布恬廷としるす。この人、第一の人にて、眼ざしただならず、よほどの者也）、船将ウンコースキ（これは至て穏当なる人にて、いつも笑い居る也。懸合事に少も拘らず）、船将次官ポスシェット（これは蘭語に通じて、今般の通弁みないたし、諸懸合引受け也。一通りの極才子也）、ゴンチャロフ（此人、無官なれど、セキレターリスのことをなす。公用方取扱というがごとし。常に使節の脇に居て、口出しをするもの也。謀主という躰にみゆ）。」④川路はゴンチャローフのことを「謀主」あるいは「軍師」⑤と呼んでおり、この引用からして、ゴンチャローフがプチャーチン提督の「知恵袋」として交渉に積極的に参加していたことが分かる。これはゴンチャローフの旅行記からはうかがい知れぬ事実である。プチャーチンも後に海軍大臣宛の上申書で次のように述べている。「ゴンチャロフは私の任命により日本との総ての交渉の場に出席しているので、恐らく彼をおいては我々の会談について細大もらさず説明することが出来、閣下の深い配慮に充分に応えられる者はないと思うからです。」⑥

1854年１月20日の日本側全権員によるフリゲート艦答礼訪問の折りのエピソードを、ゴンチャローフはこう書き留めている。「食事の途中で、私は川路の手からちょっと扇子を借りて見せてもらった。それは、棕櫚の木でつくって紙を貼った質素なものであった。私が扇子を返そうとすると、彼はお納め下さいと身振りで示した。『記念のために』と栄之助［通詞ー沢田］が彼の言葉を通訳した。私は謝辞を述べた。しかし、もらい放しにしたくなかったので、自分の時計についている金鎖をはずして川路に贈った。彼はちょっとためらったが、私のあいさつが通訳されるのを聞き終ると、お礼を述べて私の贈物を納めるのであった。それから彼は、席をはずして何やら栄之助に耳打ちをした。それは、つまり川路と筒井が、私とポシェートに煙草の箱と煙管を二組贈物として用意しておくという意味であった。私から金の鎖をもらったので、川路は、多分自分の贈物があまりにもお粗末だと気づいたらしい。」（377 ）これは川路の日記に該当箇所を見出すことができる。「軍師わが扇子をみて称める故に、汝に与えんといいたるに、通詞を以て、常に御手にふれられ候品を下され、忝なく候由を申し、頓て懐をかかぐりて、トケイを出し、其くさりを取りてわれにくれたり。いかに断りても聞かず。よりて、もらいたる［に］わがトケイをみせよという故に、麁物（そぶつ）赤面なれどみせたるに、其くさりをわがトケイにつけくれたり。」⑦

『長崎日記』からの引用を続けよう。「いずれも今一度、飯にても酒にてもと申したるに、魯人程よく食うものはなしと云いて、御笑いあるべしと通弁官いい、軍師はよほどシャレものというがごとき風なる男なるが、いささか酒きげん体にて、夥しく頂戴、とい

う手まねをなしたり。其さま、喉の所へ手やり、又頭へ手やり、やがて頭上へ高く手をさし上げて、うなずきたり（これ、のどまでつまりたるにあらず。頭までもつまりたり。かしらまでもつまりたるにあらず。頭の上へつみあげたるがごとくになれり、ということ也）。おもわず、其体にみなドッと笑を催したり。」⑧この引用は1月23日、即ち露艦出港前日に日本側全権員の設けた送別の午餐会の折りのことである。これはゴンチャローフ酩酊の場面である。当然のことながら、『日本渡航記』には対応箇所は見出されない。日本との退屈な交渉からまもなく解放され、またクリミア戦争の勃発とともにいつなんどきイギリス、フランスの軍艦と戦闘状態に入るかもしれないという危険な航海からも解放されて、故国へ帰れるという喜びに浸っていたのであろう。

古賀謹一郎（1816－1884）は幕府の儒者の長男に生まれ、当代随一の儒学者だったが、同時に西洋学術の進歩合理性に注目し、洋学研究に強い関心を抱いていた。古賀は全権員のなかでは一番末席で、顧問あるいは専門委員の地位にあり、プチャーチンが提出した露国首相兼外相ネッセルローデの老中宛公文に対する幕府の回答公文の起草に当たった。古賀もゴンチャローフの旅行記に登場する。「四番目は中年男で、まるでシャベルのように無表情な平々凡々とした顔の持主であった。こうした顔を見ていると、彼が、日常茶飯事以外にはあまり物を考えないことが、すぐさま読みとれる。＜中略＞四人目は［名前は－沢田］．．．忘れた。後で話そう。＜中略＞彼ら［日本人－沢田］は満足そうに羊肉を平らげた。わけても四人目の全権がそうであった。一皿食べ終わると、彼は自分の手で皿を給仕に渡した。つまり、お替り所望の合図なのだ。＜中略＞彼ら［日本人－沢田］は旺盛な好奇心をもって少しずつワインを飲んでみたが、しかし、シャンパンのグラスは飲み干さなかった。だが、背の高い肥えた四人目の全権は別であった。彼はシャンパン・グラスを四杯も飲み干した。」（353，359，366，367）

古賀が長崎出張時につけていた『西使日記』にも、3箇所ゴンチャローフに関する言及がある。例えば、「大腹夷名艮茶呂、謀主也、腹大以呼、」。⑨「大腹夷」という呼称はおもしろい。⑩また「ゴンチャローフ＝謀主」観が日本側全権員共通のものだったことが分かる。

千住（せんじゅ）大之助（1815－1878）は佐賀藩士で、藩主の側近として重きをなした人物である。そして1853年12月に彼が藩主とともに長崎へ出張した時の記録が『西亭私記』である。⑪千住自身は日露会談の席に連なってはいないが、儒学者仲間である古賀たちの宿を訪ねて仕入れた裏情報が『西亭私記』には記されており、交渉の矢面に立っている人々の本音が披瀝され、公式の文書類には見られない事実が検証される点で貴重な記録といえる。

本記録にも古賀から聞いた話としてゴンチャローフが登場する。「公用方甚悪者にて此奴巧計黠智、頻に使節にち恵をつくるやふす也」。⑫これは川路の記述と符合するが、作

家が手ごわい交渉相手だったことをより如実に示している。また「正月四日乗舶(ママ)之図」にはゴンチャローフは「大腹」、「公方用（ママ）大姦物」⑬と記されている。こちらは古賀の記述と一致する。

II

以下、交渉の経過の大略を日本、ロシア、オランダの史料から追ってみよう。

1853年９月初旬に長崎オランダ商館長ドンケル＝クルチウスの助手がパルラダ号を訪問したが、日本人の監視のもとで自由に話し合えなかったこと、商館長自身は結局姿を見せなかったこと、そして「商館長は短い書翰で深い謝意を表明してきたので、提督は彼の表面的な非礼の真意を悟った。」（264 －265 ）ことが『日本渡航記』に手短かに語られている。一方クルチウスの覚え書によると、この一等官補バッスレー⑭の訪問の折りに、オランダ商館がロシア艦隊に食料を供給すること、その費用はロシア国庫が為替手形で支払うことが決まった（最終的には領収書で決済された）。翌年１月23日までの総額は蘭貨で8759・41フルデンに上った。だがその後プチャーチンは食料以外の持ち出し禁制の品物、例えば漆器類を要求し始め、その搬出願いが奉行に拒否されて、クルチウスは多大の迷惑を被ることとなった。クルチウスがパルラダ号を訪問しなかったのは、長崎奉行がこれを許可しなかったからで、それがプチャーチンの答礼訪問の誘因になるのを恐れたためらしい。クルチウスの方は、提督が自分の訪問中止を他の理由からだと誤解したと考えて残念がっている。⑮

1853年11月にロシア使節団が薪炭、食料の補給並びにクリミア戦争の情報収集のため一旦日本を去って上海に行くにあたって、「奉行にもまた、どこへ、どれほどの期間行って来るか、ということは表明しなかった。」（306 ）とゴンチャローフは書いているが、スクーナー船ヴォストーク号の船長リムスキイ＝コルサコフは両親宛の手紙でまったく逆のことを書き残している。「３カ月の間に彼ら［日本の下級役人－沢田］が提督の性格を非常によくのみこんだことは明らかです。様々な質問や提案をこの上なく巧みに行うことによって、彼らは自分の目的を達しました。提督は我々は上海に行き、６週間後に戻る予定であると知らせました。その時に長崎で全権員たちと会見したい、さもなくば直接江戸に向かうだろうと。短気な提督がうっかりこの情報を漏らすやいなや、役人たちの顔は輝きわたり、マソンかなにかのような合図で奉行に遣わされたと思しき小船は、全権員たちのありかは定かでないという知らせをもって戻ってきました。」⑯「短気な提督がうっかりこの情報を漏らすやいなや」というくだりにリムスキイ＝コルサコフのプチャーチン評価が込められているが、これら二つの相反する証言はどうも後者の方が信憑性が高そうだ。即ち、ゴンチャローフはできる限りプチャーチンを擁護し、場合によっては事実を若干歪

曲してもその立場を貫き通そうとしたのである。

12月31日、長崎西役所で日本側全権員と最初の対面が行われた日の朝、ロシア人のボートがフリゲート艦を離れる瞬間祝砲が放たれた。これは日本の国禁を犯すものであり、古賀の随員で当時江戸の古賀塾で学んでいた米沢藩士・窪田茂遂（もすい）の『長崎日記』によると、鍋島、黒田、大村藩の警護人が激昂してロシア船を焼き打ちにしようとしたが、長崎奉行が止めたという。⑰「露国使節応接手続覚書」にも同様の記述の後、「直様異人へ及欠合候處、全く下輩之者へ申付方不行届、右様手違ニ相成恐入候、以後一切砲発致ましく趣申出、先穏便ニ相済候」⑱とある。他方、ゴンチャローフの記述を見ると、プチャーチンが奉行から礼砲を発射せぬよう依頼してくるのを見越して、わざと予告せずに発射したこと、そして日本人の周章狼狽ぶりを楽しんでいる感さえあることがうかがえる。「彼ら［日本の役人－沢田］は今後はもう発射して下さるな、と懇願し始めた。」（361 ）という作家の証言は、「露国使節応接手続覚書」とはニュアンスを異にしているが、恐らくこちらの方が本当のところだろう。

1854年１月４日⑲、全権員がパルラダ号を訪問した。これはゴンチャローフの言うとおり、日本人による最初の外国船訪問である。露艦乗組員は歓迎の準備に没頭した。だが全権員の方は、ことによればそのまま外国に連れ去られるのではないかという危惧を抱いて、また艦上で何か異変が起これば日本人もろとも大砲で打ち砕くという打合せのもとに、決死の覚悟で乗り込んだことが、川路、古賀、窪田、千住それぞれの日記から分かる。千住の日記によれば、古賀は鈍刀をあらためて研磨したという。⑳「彼ら［全権員－沢田］は私のフリゲート艦への招待を、異議を唱えぬばかりか、明らかに満足の念をもって受け入れた。」㉑とプチャーチンが書いているのは、勝手な解釈というものだろう。

当日の宴会は上下ともに大いに盛り上がったようだ。全権員らには提督室の応接間に、他の随員たちには食堂と士官室に食卓がしつらえられた。『日本渡航記』には、「日本人たちはヨーロッパ風の正餐を望んでいたが、彼らにフォークやナイフを使わせて食事をさせるのは無理だったから、箸を添えておいた。」（366 ）とあるが、箸の長さが違ったので、例えば荒尾と古賀は箸を一本ずつ交換しなければならなかった。㉒全権員の饗応には主としてゴンチャローフとポシェートがあたったが、川路はロシア人のもてなしのうまさに感心し、「詞通ぜねど、三十日も一所に居るならば、大抵には参るべし。人情、少しも変らず候。」㉓と上機嫌のていである。窪田も、「双方共ニ酔を帯候得ハ無隔意酔飽。手を取又ハ背を打て戯候人も御座候。矢立を差出、書を乞候人も御座候。早速書候。但一切読不申。＜中略＞布恬庭（ママ）も甚喜悦。本国を出帆以来如此の盛事御取扱なしとて落涙ニ至る。」㉔と書いている。もっとも千住の日記の記述からして、プチャーチンは眼疾の「流涙」だったようだ。㉕

Ⅲ

次に『日本渡航記』と日本側の史料を比較対照することによって、ゴンチャローフの慧眼さと逆に誤解をも指摘してみたい。まずは誤解の方から。

前述のようにロシア船は３カ月長崎港に逗留した後一旦上海へ出向いたが、日本側の史料を読むと、これが全権員の旅に大きな影響を及ぼしたことが分かる。即ち、ロシア船長崎出帆の知らせが一行に届いて、旅を続けるや否や幕閣の指示を仰ぐため日程が２日遅れになり、次いで12月24日ロシア船帰帆の知らせを受け取ったため、以後３日間は宿泊せず日夜兼程で長崎に到着するという大変な旅になった。川路の日記も窪田の日記も、身分の上下を問わず、片道1500キロ、40日間にわたる旅の苦労と疲労を訴えている。この点について長崎奉行はありのままをロシア側に説明したにもかかわらず、後者はその説明を信用せず、全権員が速やかに到着しなければ直接江戸に向かうと威嚇を加えた。『日本渡航記』とプチャーチンの『上奏報告書』を読めば、ロシア側にも誤解があったことが分かる。

12月31日、長崎西役所で全権員と最初の対面が行われ、ロシア人に食事が供されたが、その場面でゴンチャローフはこう書いている。「食事の後で、一種の独特な香気のあるお茶が出された。見ると、底の方に丁子の頭ほどの茶殻がある――茶の国ともあろうものが何というまあ野暮なことか！」（359 ）これは作家の誤解で、茶柱は吉事の兆とされ、故意に入れたのである。ちなみに日本側もロシアの茶は気に入らなかった。古賀はフリゲート艦上でのレセプションの後で、「葉粗煮深、如薬汁」と感想をもらしているが、それに添えた砂糖は絶賛している。㉖

パルラダ号上での宴の折りのエピソードとして、ゴンチャローフは次のようなことを書き残している。「何やらクリームのような軟らかい生菓子が、ビスケットといっしょに出された。彼［川路－沢田］はそれを食べてみて、定めしお気に召したのであろう、袂から紙を一枚取り出してⅢに残ったものを全部それに移し、一捻りして懐中にしまい込むのであった。『手前がこれをどこかの美人に持参すると思し召さるな』と彼はいい添えた。『いや、これは家来どもに取らせるのでござる』これをきっかけに、話は自然に女性談義に移った。日本人たちは軽い破廉恥（シニシズム）に陥りそうなところまでいった。彼らはあらゆるアジア民族と同様に官能に耽って、その弱点を隠そうともせず、また責め立てようともしないのである。」（367 ）この日本民族論が作家の誤解であるかどうかはさておき、この点に関する川路の記述はニュアンスを異にしている。「もてなしぶりの上手なること、実に驚きたり（異国人、妻のことを云えば泣いて喜ぶという故に、左衛門尉妻は江戸にて一、二を争う美人也、夫を置きて来りたる故か、おり〳〵おもい出し候。忘るる法はあるまじきやといいたるに、大に喜び笑いて、使節も遠く来り、久しく妻に逢わざる

こと、左衛門尉が如きにあらず、左衛門尉のこころを以て考えくれ候え、と申したり。筒井より、われを老人也とおもうべからず、此上出生あらば［筒井はこの前年に女子をもうけた－沢田］再会の時の物語にすべしと申したるに、魯西亜の諺に、五十は出生少し、六十はなし、七十は猶更なし、八十は若やぎて出生殊更多しと申せば、筒井も其諺のごとくなるべきを願い奉ると申したり。」㉗女性談義に関しては、双方互いに責任転嫁を計っているようだ。『日本渡航記』の引用を続ける。「あるとき、提督は［次回の会見を－沢田］２日後に指定したが、驚いたことには、日本側では、もう少し早く、つまり翌日にしてほしいと頼んだ。これは、川路が江戸の夫人の許へ帰りたくなって、会談を急いだためであった。『身は当地にいるが、心は江戸にござりまする』と彼はしばしば語っていた。」（372 ）川路の名誉のために一言すると、これは彼の私的な事情に由来するものではなく、ロシア側に熟考の暇を与えず一気に交渉打切りへ持っていこうとする日本側の戦略であった。古賀の日記に、「我之促期、不欲其［畫策－沢田］成也」㉘とある。

次にゴンチャローフの慧眼を物語る記述を挙げてみよう。

彼はこう書いている。「彼ら［日本人－沢田］の言葉によれば、将軍は８月14日に亡くなったことになるが、私たちが到着したのは10日である。将軍が亡くなったのは去年かもしれないが、彼らが今さらこんなことをいい出すのは、私たちが立ち去るかもしれぬ、という望みを抱いてのことであろう。彼らを信用することはむずかしい。彼らはこうした場合に、少なくとも相当に長い期間、自国の国民に隠し立てをするかもしれないのである。」（296 ）

第12代将軍・徳川家慶（いえよし）は1853年７月15日に没した。プチャーチンの長崎到着は８月10日である。長崎奉行がロシア使節に訃報を伝えたのは10月10日だから、パルラダ号の長崎入港２カ月後のことになる。ゴンチャローフのリアルな目はさすがに日本人の本質を見抜いていた。幕府は将軍の薨去を諸外国に知られて足許を見すかされることを恐れ、また国内の人心の動揺を来すことを懸念したのである。従って国民への公表は１カ月後の８月16日に行われた。

ゴンチャローフの日本に関する知識についても指摘しておかなければならない。フェートン号事件やオランダ最初の日本関係の書物であるカロンの『強き王国日本の記述』についての言及は、不正確な点が見受けられるものの、明らかに作家の日本に関する予備知識の蓄えを物語っている。

Ⅳ

最後に『日本渡航記』の文学作品としての側面、手法に触れておきたい。

パルラダ号が初めて長崎港に入港した時に、盂蘭盆の精霊流しに遭遇する場面がある。

フリゲート艦の長崎入港が８月10日、陰暦では７月18日にあたり、長崎ではこの３日前、７月15日夜から16日未明にかけて供え物を持たせて先祖の霊を送っていた。この不可思議な出迎えによって、パルラダ号乗組員のみならず『日本渡航記』の読者もまた一挙に「鍵をなくしたまま閉ざされた玉手箱」（246 ）の国の神秘的な世界に招じ入れられることとなる。ゴンチャローフはドイツ人博物学者ケンペルの『日本誌』によって明らかに盆の行事を知っていた。㉙にもかかわらず、「ケンペルの本によれば．．．」（246 ）とその説明をカットすることによって、ゴンチャローフは鎖国状態にある東洋の島国の神秘性を保持しようとしたのである。

『日本渡航記』では日本国と日本人が「眠っている」様子が繰り返し描き出される。「夢」、「眠ったような」、「眠る」という語句が反復して用いられていることは注目に値する。と同時にゴンチャローフは、わずかとはいえ日本の新しい萌芽、「覚醒」の要素をも慧眼に捉えている。川路がまさにそうであり、何人かの若い通詞たちがそうである。この「眠り」と「覚醒」の原理の対比はゴンチャローフの創作の核をなすものである。

「jeune Japon ［若き日本－沢田］」（294 ）の最たるものは大通詞の森山栄之助（1820－1871）だろう。阿蘭陀通詞は17世紀初頭から存在し、通詞家は世襲で三十数家あった。幕末には140 名ほどいたという。大通詞と小通詞それぞれ４名が通詞の中心的存在だった。栄之助はオランダ語のみならず英語にもすぐれ、幕末外交の中心的通訳官だった。会議の席では筒井の通訳を吉兵衛が担当し、川路の通訳は栄之助が担当した。川路は自分の通訳の有能さを高く評価していた。「栄之助別段なる差働これ有り候ものにて、通弁殊の外達者にて、蘭書を訳すること、手紙をかくがごとし。」㉚

ゴンチャローフは繰り返し栄之助に言及しているが、その評価は川路とは異なる。作家は彼の才能を認めつつも、厳しいコメントを述べている。「一番いやらしい態度を取っていたのは栄之助である。彼は川路付の通詞だったから、交渉の中でも、もっとも大事な部分を通訳していた。彼は思い上がっていて、他の通詞たちの話には馬耳東風であった。川路がいないときには、椅子にもたれて長々と寝そべっていた。大体、自分が偉くなったのを鼻にかけていて、会談の終りごろには、最初よりもはるかに態度が悪くなった。彼は放蕩も嫌いな方ではなかった。再三シャンパンをねだり、一度は中村の前でシャンパンを四杯もあおって酔い過し、彼にいわれたことを通訳しないで、手前勝手に話を決めようとするので、他の通詞を呼ぶぞ、と脅かされたこともある。」（375 ）

これと好対照をなすのが、同じく大通詞の吉兵衛だろう。西吉兵衛（1812－1855）は阿蘭陀通詞・西家の第11代目。オランダ、フランス、アメリカ、ロシア船渡来に際し応接勤務した。川路の『長崎日記』に興味深い記述がある。「吉兵衛は、才気は栄之助ニ不及といへとも、通弁之事ハ近世希なるもの之よし、栄之助即吉兵衛之門弟なり、温厚にて不争、栄之助を引立、同人ニ事を譲るさて実に及ふへからず、吉兵衛ハ、栄之助難有御引立

大悦之由、幷同人と懇意也とハ申せとも、栄之助は門弟也とは少も不申、栄之助は、吉兵衛に八才之節より通弁之弟子に成候よし屢申之、かかる事小事ながら、甚出来兼る事なり」。㉛

吉兵衛も度々『日本渡航記』に登場する。ゴンチャローフの描写にあっては大通詞まで昇りつめた能吏としての側面は捨象され、この、作家と同年の通詞は、栄之助とは逆に「眠り」の原理を体現する人物となっている。吉兵衛は、「手前は何もせず臥せている［原文イタリック体ー沢田］のが好きでござる」（303 ）と言う。これぞ「日本のオブローモフ」である。だが彼の登場は常にユーモアに包まれていて、読者の心を和ませてくれる。「吉兵衛は身の程をわきまえていた。彼は歯をむき出して隅の方にかしこまり、四方八方に向って、ヘッ、ヘッ、といっていた。『吉兵衛！』と呼ばれるたびに、彼は素早くあちらこちらの日本人の方へ向き直り、『ヘッ！』と答えるのであった。『キチベエ！』と私は一度冗談に呼んでみた。すると、彼は『ヘッ！』と応えて、私の方へいざり寄って来た。だが、間違いだとわかると、人のよい笑いを浮かべて元の席へ這い戻って行った。」（375 ）この「人のよさ」は、川路の日記中の性格付けと見事に符合する。

即ち、栄之助と吉兵衛の両者において体現されているいま一つの対立原理は、「知」と「情」という、ゴンチャローフが既にデビュー作『平凡物語』において提示し、『日本渡航記』以後の作品でも提示し続けていくものなのである。

本稿は、高野明・島田陽共訳『ゴンチャローフ日本渡航記』（雄松堂書店、1969年）所収の高野氏による訳注、G.A.Lensen. Russia's Japan Expedition of 1852 to 1855 (University of Florida Press, Gainesville, 1955)、中村喜和「幕末期日露交流の一面ーーゴンチャロフが見た日本人と日本人の見たゴンチャロフーー」（『言語文化』第31巻、1994年、３－15頁）に負うところ大である。また長崎歴史文化協会の越中哲也氏、佐賀大学名誉教授の杉谷昭氏、下田市教育委員会の土橋一徳氏、同市郷土史家の平井繁氏にはご教示と貴重な資料を賜った。記して感謝の意を表する。

注

① 本稿の日付は旧ロシア暦で統一する。

② 正確には『フリゲート艦パルラダ号』の第２巻第１章「1853年末と1854年初頭の日本におけるロシア人」と第３章「日本におけるロシア人」のことであるが、本稿ではこれらの章の邦訳に与えられた表題を用いる。

③ И.А.Гончаров. Фрегат "Паллада". Очерк путешествия в двух томах. Л., "Наука", 1986, с.372.以下『日本渡航記』からの引用は、本文中の括弧内に頁数を記す。

④ 川路聖謨『長崎日記・下田日記』平凡社、1968年、93頁。

⑤ 川路、前掲書、93, 98, 99, 103, 104頁。

⑥ 1854年７月31日付。平井繁訳『ロシア使節プチャーチン提督関係文書』ディアナ号探査会、1989年、11頁。

⑦ 川路、前掲書、99頁。

⑧ 川路、前掲書、103 －104 頁。

⑨ 古賀謹一郎『西使日記』　『大日本古文書　幕末外国関係文書附録之一』東京帝国大学文科大学史料編纂掛、1913年、244 頁。

⑩ 1853年９月15／27日付のＮ・Ａ・マイコフ夫妻宛の手紙を参照のこと。И.А.Гончаров. Указ. соч., с.675-679.

⑪ 「西亭」は千住の筆名。この日記について詳しくは、杉谷昭『幕末維新史料捨遺』第一法規出版、1991年、１－64頁　を参照のこと。

⑫ 杉谷、前掲書、16頁。

⑬ 杉谷、前掲書、48頁。

⑭ J.A.G.A.L.Bassle.

⑮ フォス美弥子編訳『幕末出島未公開文書　ドンケル＝クルチウス覚え書』新人物往来社、1992年、46, 47, 58, 60, 67, 75, 77頁。

⑯ В.А.Римский-Корсаков. Балтика-Амур. Повествование в письмах о плаваниях, приключениях и размышлениях командира шхуны "Восток". Хабаровское книжное изд-во, 1980, с.237.
詳しくは、William W. Mcomie. Bakumatsu Japan through Russian Eyes :the letters of Kapitan-leitenant Voin Andreevich Rimsky-Korsakov; Bakumatsu Japan through Russian Eyes:the letters of Kapitan-leitenant Voin Andreevich Rimsky-Korsakov, Part II, 1854-1857. （『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第48号、1994年、35－51頁；第49号、1994年、21－39頁）を参照のこと。

⑰ 『米沢市史編集資料第十四号　窪田茂遂著　長崎日記』米沢市史編さん委員会、1984年、96頁。この日記について詳しくは、拙稿「窪田茂遂『長崎日記』について」（『共同研究　ロシアと日本』第二集、1990年、17－31頁）を参照のこと。

⑱ 「十二月十四日長崎西役所露国使節応接手続覚書」　『大日本古文書　幕末外国関係文書之三』1911年、326 頁。

⑲ 日本側の記録では１月３日になっている。

⑳ 杉谷、前掲書、15頁。

㉑ Всеподданнейший отчет генерал-адъютанта графа Путятина о плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай. 1852-1855. Морской сборник, СПб., 1856, № 10, отд.Ⅱ, с.58.

㉒ 古賀、前掲書、244 頁。

㉓ 川路、前掲書、72頁。

㉔ 窪田、前掲書、104，107頁。

㉕ 杉谷、前掲書、37－38頁。

㉖ 古賀、前掲書、243 頁。

㉗ 川路、前掲書、72頁。

㉘ 古賀、前掲書、252 頁。

㉙ そこには次のように記されている。「８月８日　この日は盆（ぼん Bon）祭で、夜には燈籠や提灯に灯を点し、祖先の墓詣りをする。盆祭の行事は、昨日から始まっており、明日まで続くのである。死者の精霊は、善人であろうが悪人であろうが、この盆の時期にはあの世からこの世へ彷徨に出て生前の住居を訪れるという信仰があるのである。」（エンゲルベルト・ケンペル著、今井正編訳『日本誌（改訂・増補）－日本の歴史と紀行－』下巻　霞ケ関出版、1989年、350 頁。

㉚ 川路、前掲書、50頁。

㉛ 『大日本古文書　幕末外国関係文書附録之一』、96－97頁。

Фрегат «Паллада».

Кадзухито Савада

Профессор университета Сайтама, Япония

И. А. Гончаров в Японии (1853—1854 г.)[1]

10-го августа 1853 года[2] И. А. Гончаров прибыл на фрегате «Паллада» в порт Нагасаки, самый западный город Японии, в качестве секретаря при адмирале Е. В. Путятине, который был послан для установления торговых отношений и определения границы между обеими странами на Сахалине. Месяцем ранее «черные корабли» Соединенных Штатов Америки во главе с коммодором М. К. Перри побывали в Японии с целью открытия страны, что вызвало переполох среди японцев, живших в изоляции более 200 лет. Появление русских кораблей тоже их испугало. Японское правительство с начала и до конца затягивало и осложняло переговоры с русским посольством. Правительство сёгуна приняло официальное послание русского канцлера и министра иностранных дел В. Нессельроде безо всякого энтузиазма и в течение трех месяцев не давало на него ответа. Только в конце 1853 года из Эдо (старое название Токио), столицы Японии, в Нагасаки прибыло четверо полномочных[3]. 7-го января 1854 года начались собственно переговоры, которые, однако, оказались по сути дела безрезультатными. Японская делегация обещала русскому посольству только предоставление в дальнейшем права наибольшего благоприятствования в торговле.

Двое японских полномочных и их свита в пути из Эдо и во время переговоров, длившихся почти месяц в Нагасаки, вели дневники, которые в настоящее время опубликованы. В предлагаемой статье я хочу рассмотреть, во-первых, какое впечатление произвел Гончаров на японских полномочных и как освещалась в японских источниках его роль в процессе переговоров. Во-вторых, мне хотелось бы сопоставить по ряду позиций книгу «Фрегат „Паллада“» с японскими источниками.

1

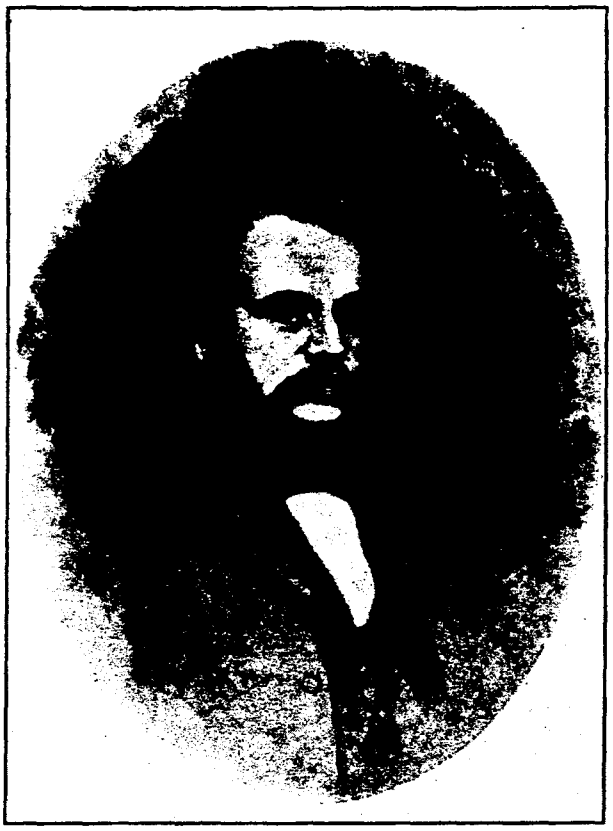
Кавадзи Тосиакира[4] (1801—1868) благодаря природному дарованию и необычному трудолюбию быстро поднимался по служебной лестнице и с 1852 года занимал самый высокий чиновничий пост — кандзё бугё, то есть главноуправляющего финансами. Эта должность, вопреки своему названию, включала в себя и юридические функции административного управления. Над ним было только несколько старейшин — знатных потомственных феодалов. Главой полномочных был назначен Цуцуи Масанори (1778—1859), а Кавадзи был вторым лицом, но поскольку Цуцую было более 75 лет, Кавадзи считался главным в японской делегации, состоявшей из четырех человек. В 1868 году он, будучи верным правительству сёгуна, застрелился одно-

[1] Настоящая статья основана на тексте доклада, с которым автор выступил на съезде Общества американских славистов (The Amerikan Association fon the Advencement ot Slavic Studies), проведенном на Гаваях в ноябре 1993 года.

[2] Все даты приводятся по старому стилю.

[3] В своем докладе я буду употреблять это слово в качестве существительного, как оно встречается у Гончарова.

[4] В настоящей статье принят японский порядок написания: на первом месте — фамилия, на втором — имя.



А. И. Гончаров.

временно с окончательным падением последнего: Кавадзи был парализован и потому не смог совершить «харакири», которое ему предписывал долг.

Кавадзи не раз упоминается во «Фрегате „Паллада“», и, я полагаю, что И. А. Гончаров относился к нему с явной симпатией.

«Он ‹Кавадзи — К. С.› был очень умен, а этого не уважать мудрено, несмотря на то, что ум свой он обнаруживал искусной диалектикой против нас же самих. Но каждое слово его, взгляд, даже манеры — все обличало здравый ум, остроумие, проницательность и опытность. Ум везде одинаков: у умных людей есть одни общие признаки, как и у всех дураков, несмотря на различие наций, одежд, языка, религий, даже взгляда на жизнь.

Мне нравилось, как Кавадзи, опершись на богатый веер, смотрел и слушал, когда речь обращена была к нему. До половины речи рот его был полуоткрыт, взгляд немного озабочен — признаки напряженного внимания. На лбу, в меняющихся узорах легких морщин, заметно отражалось, как собирались в голове у него, одно за другим, понятия и как формировался из них общий смысл того, что ему говорили. После половины речи, когда, по-видимому, он схватывал главный смысл ее, рот у него сжимался, складки исчезали на лбу, все лицо светлело: он знал уже, что отвечать. Если вопрос противной стороны заключал в себе, кроме сказанного, еще другой, скрытый смысл, у Кавадзи невольно появлялась легкая улыбка. Когда он сам начинал говорить и говорил долго, он весь был в своей мысли, и тогда в глазах прямо светился ум. Если говорил старик ‹Цуцуи — К. С.›, Кавадзи потуплял глаза и не смотрел на старика, как будто не его дело, но живая игра складок на лбу и содрогание век и ресниц показывали, что он слушал его еще больше, нежели нас. Переговоры все, по-видимому, были возложены на него, Кавадзи, а Тсутсуй был послан так, больше для значения и, может быть, тоже по своему приятному характеру» [1, с. 372—373].

Кавадзи вел «Нагасакский дневник» во время путешествия и переговоров. Это очень интересные, не чуждые юмора записи, которые украшают более чем 20 «танка» (японские пятистишия) и 10 «канси» (стихотворения на китайском языке). Для Кавадзи дневник — это письма, в которых он сообщает своим домашним и подданным новости и впечатления от дороги и пребывания в Нагасаки (они тоже писали ему).

В «Нагасакском дневнике» семь раз упоминается Гончаров. Например:

«Гончаров, хотя без официального чина, служит секретарем, всегда сидит возле посла и вмешивается в разговор. Выглядит главным советником. Посьет и Гончаров угощали нас на корабле, наливая вино и подавая еду»[5] [2, с. 93].

Обратим внимание на то, что Кавадзи называет Гончарова «главным советником», в других местах — «стратегом». Из приведенной цитаты узнаем, что И. А. Гончаров в качестве «правой руки» Путятина активно участвовал в переговорах, что никак не отражено в путевых очерках писателя.

В другом месте Кавадзи пишет:

«„Стратег“ ‹Гончаров — К. С.› увидел мой веер и похвалил его. Тогда я подал ему этот веер, и он через переводчика стал благодарить меня за столь драгоценный подарок, которого еще минуту назад касались мои руки. Затем, пошарив в кармане, он вытащил свои часы, снял с них цепочку и подарил ее мне. Я был вынужден принять,

[5] Здесь и далее перевод всех источников выполнен автором статьи — Кадзухико Савада.

поскольку, как я ни отказывался, он и слушать ничего не хотел. Потом он взял мои часы, бедности которых я очень стыдился, и оснастил их цепочкой» [2, с. 99].

Во «Фрегате „Паллада“» этот же эпизод, происшедший во время ответного визита японских полномочных на русское судно 20-го января, описан несколько иначе:

«За обедом я взял на минуту веер из рук Кавадзи посмотреть: простой, пальмового дерева, обтянутый бумажкой. Я хотел отдать ему назад, но он просил знаками удержать у себя „на память“, как перевел Эйноске ‹японский переводчик — К. С.› слова его. Я поблагодарил, но, не желая оставаться в долгу, отвинтил золотую цепочку от своих часов и подал ему. Он на минуту остановился, выслушал переведенное ему мое приветствие и сказал, что благодарит и принимает мой подарок. Потом вышел из-за стола и что-то шепнул Эйноске. Это вот что: Кавадзи и Тсутсуй приготовили мне и П‹осье›т по два ящика с трубками, в подарок. Приняв от меня золотую цепочку, он, вероятно, нашел, что подарок его слишком ничтожен» [1, с. 377].

Обратимся опять к дневнику Кавадзи:

«„Стратега“ можно назвать шутником и острословом; он казался немного пьяным и жестикулировал, показывая, что совсем сыт: сначала поднял руку к горлу, потом к голове, а затем совсем высоко и кивнул головой. (Это означало, что он сыт не только по горло, но по голову, не только по голову, но и более того.) Все дружно расхохотались» [2, с. 103—104].

Об этих подробностях прощального банкета, данного японскими полномочными 23 января, накануне ухода русской флотилии, Гончаров умалчивает в своем произведении. Писатель, должно быть, находился в хорошем настроении: скучные переговоры с японцами подошли к концу, и можно было возвращаться домой в Россию. Как известно, русская эскадра с началом Крымской войны оказалась в трудных обстоятельствах: в любой момент могли произойти столкновения с превосходившими их силой английскими и французскими флотилиями.

2

Другим полномочным был Кога Кинъитиро (1816—1884) — известный в то время конфуцианец. Вместе с тем, признавая прогрессивность и рационализм европейской культуры, он старался ее усвоить. Среди четырех полномочных Кога занимал самую низшую должность консультанта в японской делегации. Он набросал проект ответного послания сёгуната на официальное послание Нессельроде. Можно сказать, что роль Кога почти соответствовала роли Гончарова в русской делегации.

Кога тоже описывается в путевых очерках писателя:

«Четвертый ‹Кога — К. С.› — средних лет; у этого было очень обыкновенное лицо, каких много, не выражающее ничего, как лопата. На таких лицах можно сразу прочесть, что, кроме ежедневных будничных забот, они о другом думают мало» [1, с. 353].

«... четвертого ‹зовут — К. С.› ... забыл, после скажу.» [1, с. 359]

«Они ‹японцы — К. С.› с удовольствием ели баранину, особенно четвертый полномочный. Кончив тарелку, он подал ее человеку сам: знак, что желает повторения.» [1, с. 366]. «Пили они ‹японцы — К. С.› умеренно. Они пробовали с большим любопытством вино, отпивая понемногу, но бокала не доканчивали, кроме, однако ж, четвертого полномочного, мужчины рослого и полного. Тот выпил бокала четыре» [1, с. 367].

В последней цитате отражена реализация собственных принципов Кога. Он пишет в дневнике:

«Поэзия, вино и развлечение — все это тоже официальные дела» [3, с. 354].

Почему-то Гончаров относится к Кога довольно строго, а порой даже недоброжелательно.

Кога вел «Дневник командировки на Запад», где три раза упоминается Гончаров. Например:

«Главный советник, зовут Гончаров, брюхастый варвар, называют так, потому что у него большой живот.» [3, с. 244].

Интересно, даже смешно определение «брюхастый варвар». В самом деле четырьмя месяцами раньше Гончаров писал Е. П. и Н. А. Майковым:

«Что Вам сказать о себе — нечего, разве что я чудовищно потолстел, что иногда бываю так болен своею печенью, что теряю надежду даже воротиться. Недавно такая боль около печени и сердца и вместе такая тоска одолела, что я опасался слечь.» [4, с. 676].

Следует отметить, что все японские полномочные считали Гончарова «главным советником».

3

Сэндзю Дайносукэ (1815—1878) был одним из приближенных князя земли Сага, рядом с которой расположен город Нагасаки. В декабре 1853 года Сэндзю вместе со своим князем был командирован в Нагасаки и там вел дневник «Личные записки Сэйтэя» (Сэйтэй — псевдоним Сэндзю). Разумеется, Сэндзю не принимал участия в переговорах, но он часто посещал Кога и других коллег-конфуцианцев и получал неофициальные сведения, которые и записывал в своем дневнике. То есть его дневник драгоценен как источник, сообщающий истинные намерения полномочных, а также факты, не встречающиеся в официальных документах.

В дневнике Сэндзю в рассказе, услышанном от Кога, упоминается Гончаров:

«Секретарь — большой злодей. Он, хитрый, часто дает послу советы.» [5, с. 16].

Это совпадает с вышеприведенным замечанием Кавадзи, но с еще большей отчетливостью сообщается, что писатель был серьезным оппонентом японской делегации. А на рисунке «Посадка на судно 4 января», приложенном к дневнику, имени Горчарова сопутствует ремарка «человек с большим животом», «очень хитрый секретарь» [5, с. 48]. Это совпадает с замечанием Кога.

4

Продолжая сопоставление «Фрегата „Паллада“» с японскими источниками, я хочу указать на проницательность и заблуждения Гончарова. Сначала по поводу его заблуждений.

После трехмесячного безрезультатного пребывания в Нагасаки русские корабли ушли в Шанхай, чтобы пополнить запасы топлива и провизии и собрать сведения о ходе Крымской войны. По японским источникам, этот уход в Шанхай сильно повлиял на путешествие полномочных: те, узнав об уходе русских, остановились в пути на два дня, обсуждая, продолжать ли им путешествие. Но узнав о возвращении русской эскадры 24 декабря, заспешили и спустя трое суток, даже не задерживаясь на ночлег, прибыли в Нагасаки. И Кавадзи, и Кубота Мосуй (1817—1877), сопровождающие лицо Кога, были очень утомлены переходом в 1500 километров, пройденными за 40 дней. Несмотря на то, что нагасакский губернатор откровенно и подробно рассказал русскому послу о трудностях пути, тот ему не поверил и угрожал, что сам отправится в Эдо, если полномочные не прибудут в самое ближайшее время. «Фрегат „Паллада“» Гончарова и «Всеподданнейший отчет» Путятина свидетельствуют, что русские понимали обстановку неправильно, хотя можно объяснить их раздражение волокитой, с которой они часто сталкивались в Нагасаки.

31-го декабря в официальной резиденции губернатора состоялась первая встреча, после которой был подан обед. У Гончарова читаем об этом:

«После обеда подали чай с каким-то оригинальным запахом; гляжу: на дне гвоздичная головка — какое варварство, и еще в стране чая!» [1, с. 359].

Это заблуждение писателя: гвоздичная головка в чае в Японии считается счастливым предзнаменованием, и в данном случае она была положена именно с этим намерением.

3 января японские полномочные в свою очередь посетили «Палладу». Это было вообще первое посещение иностранного корабля японцами. Русские с большим усердием занимались приготовлениями к встрече японцев на фрегате.

«Мы занялись приготовлениями к встрече невиданных на европейских судах гостей. Сколько возни, хлопот, соображений истратилось в эти два дня!» [1, с. 362].

Однако, как отмечает Дж. Ленсен [6, с. 49—51], по дневникам Кавадзи, Кога, Кубота и Сэндзю видно, что приглашение было принято с опасениями, что «Паллада» снимется с якоря и увезет их за границу. А судя по «Всеподданнейшему отчету» Путятина, русские не заметили и не поняли той настороженности, которую испытывали японцы.

... они <полномочные — К. С.> не только беспрекословно, но с видимым удовольствием приняли мое приглашение посетить фрегат» [7, с. 58]

Гончаров замечает, что на банкете того же дня Кавадзи начал говорить о женщинах:

«Только один из них ‹японцев — К. С.›, Кавадзи, на минуту придержался японского обычая. Подали какое-то жидкое пирожное, вроде крема, с бисквитами: он попробовал, должно быть, ему понравилось; он вынул из кармана бумажку, переложил в нее все, что осталось на тарелке, стиснул и спрятал за пазуху. „Не подумайте, что я беру это для какой-нибудь красавицы, — заметил он, — Нет, это для своих подчиненных“.

При этом случае разговор незаметно перешел к женщинам. Японцы впали было в легкий цинизм. Они, как все азиатские народы, преданы чувственности, не скрывают и не преследуют этой слабости» [1, с. 367].

Мне трудно сказать, насколько верно это наблюдение писателя, но о том же самом случае сам Кавадзи писал несколько иначе:

«Так как я раньше слышал, что иностранцы радуются до слез разговорам о своих женах, я сказал, что не могу не вспомнить свою жену-красавицу, оспаривающую первое место по красоте во всей столице. Русские очень обрадовались этой теме и рассмеялись. Посол сказал, что его родина находится еще дальше моей, своей жены он не видел гораздо дольше, чем я, и просил меня посочувствовать ему» [2, с. 72].

Таким образом, что касается разговора о женщинах, обе стороны стараются «свалить вину» друг на друга.

Дальше Гончаров пишет:

«Назначать время свидания предоставлено было адмиралу. Один раз он назначил через два дня, но, к удивлению нашему, японцы просили назначить раньше, то есть на другой день. Дело в том, что Кавадзи хотелось в Эдо, к своей супруге, и он торопил переговорами. „Тело здесь, а душа в Эдо, — говорил он не раз“» [1, с. 372].

Однако в защиту Кавадзи надо сказать, что причина спешки заключалась не в его личных интересах, а в тактике японский делегации: не давать русскому посольству времени на размышления и быстрее закончить переговоры. Кога записал в дневнике:

«Не желая успеха, мы торопим переговоры» [3, с. 252].

Приведу теперь те места, которые свидетельствуют о проницательности Гончарова.

«По их ‹японцев — К. С.› словам, сиогун умер 14 августа, а мы пришли 10-го. Может

быть, он умер и в прошлом году, а они сказали, что теперь, в надежде, не уйдем ли. Поверить им трудно: они, может быть, и от своих скрывают такой случай, по крайней мере долго.» [1, с. 296]

Двенадцатый сёгун династии Тогугава Иэёси скончался 15-го июля 1853 года. Нагасакский губернатор сообщил русскому посольству о его смерти 10-го октября, то есть через два месяца после прибытия русской эскадры в Нагасаки. Проницательный взгляд Гончарова разгадал сущность позиции японцев: японское правительство боялось, что узнав о смерти сёгуна, иностранные державы воспользуются безвластием и беспомощностью Японии, а собственный народ будет смятен и потрясен кончиной правителя. Поэтому внутри страны о кончине оповестили только через месяц, 16-го августа.

Во «Фрегате „Паллада“» Гончаров неоднократно возвращается к образу «спящих» Японии и японцев. Обращает на себя внимание то, как часто употребляются слова *сон, сонный, спать* и т. п. Вместе с тем Гончаров метко улавливает и редкое «пробуждение» Японии. Это именно Кавадзи и такие молодые переводчики, владеющие голландским языком, как Нарабайоси, Эйноске и Сьоза.

«Из разговоров, из обнаруживаемой по временам зависти, с какою глядят на нас и на все европейское Эйноске, Сьоза, Нарабайоси 2-й, видно, что они чувствуют и сознают свое положение, грустят и представляют немую, покорную оппозицию: это jeune Japon.» [1, с. 294].

Это сопоставление «сна» и «пробуждения» постоянно встречается в произведениях Гончарова.

5

Первым представителем «jeune Japon» является Эйноске, то есть старший переводчик (oppertolk) Мориямa Эйносукэ (1820—1871). Японские переводчики, владеющие голландским языком, появились в начале XVII века. В этих семьях сыновья наследовали профессию отца и таких семей было около 30. Переводчики подчинялись нагасакскому губернатору и в последние годы сёгуната их было уже человек 140. Переводчики, состоявшие в должностях «старшего» и «младшего» (ondertolk) переводчика, занимали центральное положение, но на эти две должности назначалось только по четыре человека, а остальные занимали должности «кандидата в переводчики» (leer ling) и «переводчика со свободной практикой» (particuliere tolk). Эйносукэ владел кроме голландского английским языком и был одним из ведущих переводчиков в переговорах с иностранными государствами: он изучал английский язык у американца Макдональда, который, притворясь потерпевшим крушение, приехал в Японию.

Во время переговоров слова Цуцуя переводил Кичибе, а слова Кавадзи, фактически главного лица японской делегации, — Эйносукэ. Кавадзи высоко оценивал способности своего переводчика.

«Эйносукэ — очень способный человек, отлично переводит, он переводит голландские книги так, как будто пишет письмо» [2, с. 50].

Во время посещения русского корабля Эйносукэ увидел в одной каюте карту, изданную в Англии, на которой линия государственной границы между двумя странами на Сахалине проходила по 50-й параллели. Об этом он сообщил Кавадзи. На этом основании Кавадзи и предложил Путятину провести пограничную линию именно по 50° с. ш.

Гончаров неоднократно упоминает об Эйносукэ, но он в своей оценке Эйносукэ расходится с Кавадзи. Писатель, признавая талант Эйносукэ, относится к нему с антипатией.

«Противнее всех вел себя Эйноске. Он был переводчиком при Кавадзи и потому переводил важнейшую часть переговоров. Он зазнался, едва слушал других полномочных: когда Кавадзи не было, он сидел на стуле развалившись. Вообще не скрывал, что он вырос, и под конец переговоров вел себя гораздо хуже, нежели в начале. Он непрочь и покутить: часто просил шампанского и один раз, при Накамуре ‹японский чиновник — К. С.›, так напился с четырех бокалов, что вздумал было рассуждать сам, не переводить того, что ему говорили; но ему сказали, что возьмут другого переводчика» [1, с. 375].

Резкий контраст Эйносукэ представляет Кичибэй, то есть также старший переводчик Ниси Кичибэй (1812—1855), которого Гончаров называет Кичибе. Кичибэй представлял 11-е поколение переводчиков с голландского языка из дома Ниси. Он работал переводчиком при прибытии голландского, французского, американского и русского кораблей в Японию. В «Нагасакском дневнике» Кавадзи есть интересное описание:

«Кичибэй умом уступает Эйносукэ, но говорят, что в последнее время редко встретишь такого способного переводчика. Эйносукэ — ученик Кичибэя. Кичибэй,

добрый, не любит ссориться. Он больше всех оказывает внимания Эйносукэ и старается остаться в тени, уступая тому все заслуги. Кичибэй очень радуется, когда Эйносукэ пользуется благоволением. Он говорит, что близок с Эйносукэ, но никогда не называет его своим учеником. Эйносукэ часто говорит, что в 8 лет поступил в ученики к Кичибэю. Все это мелочи, но так вести себя крайне трудно» [8, с. 96—97].

Кичибэй тоже нередко упоминается во «Фрегате „Паллада“». В описании Гончарова нет ни слова о способном чиновнике. Напротив, этот японец, ровесник писателя, в противоположность Эйносукэ олицетворяет «сон». Кичибэй признается:

«Я люблю ничего не делать, лежать на боку» (курсив оригинала — К. С.) [1, с. 303].

Можно назвать его «японским Обломовым». Да и пишет о нем Гончаров с неизменным юмором, а подтрунивание лишено язвительности.

«Кичибе не забывался: он показывал зубы, сидел в уголку и хихикал на все стороны. „Хи!“ — откликался он, быстро оборачиваясь то к тому, то к другому японцу, когда кликали „Кичибе!“. „Кичибе!“ — кликнул я однажды в шутку. „Хи!“ — отозвался он на мою сторону и пополз ко мне, увидев ошибку, добродушно засмеялся и пополз назад» [1, с. 375].

Это «добродушие» как раз и совпадает с характеристикой в дневнике Кавадзи.

Итак, можно сказать, что образы Эйносукэ и Кичибэя являют собой еще один пример сопоставления «ума» и «сердца», которое Гончаров представил уже в «Обыкновенной истории» и затем использовал в дальнейших произведениях.

Приносим благодарность преподавателю Университета Сайтама Алле Викторовне Хамано.

ЛИТЕРАТУРА

1
Гончаров И. А.
Фрегат «Паллада» / Серия «Литературные памятники». Л., 1986.
2
Кавадзи Тосиакира
Нагасакский дневник. Симодский дневник. Токио, 1986.
3
Кога Кинъитиро
Дневник командировки на Запад. Сборник древних актов Японии: документы о внешних сношениях в последние годы правительства сёгуна. Приложения, т. 1. Токио, 1913.
4
Гончаров И. А.
Письмо Е. П. и Н. А. Майковым. Нагасаки, 16/27 сентября 1853 года / Фрегат «Паллада» / Серия «Литературные памятники». Л., 1986.
5
Сугитани Акира.
По поводу «Личных записок Сэйтзя» / Собрание исторических источников в последние годы правительства сёгуна и в эпоху реставрации Мэйдзи. Токио, 1991.
6
Lensen G. A.
Russia's Japan Expedition of 1852 to 1855. University of Florida Press, Gainesville, 1955.
7
Всеподданнейший отчет генерал-адъютанта графа Путятина о плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай. 1852—1855. / Морской сборник. СПб, 1856, № 10, отд. 2.
8
Кавадзи Тосиакира
Нагасакский дневник / Сборник древних актов Японии: документы о внешних сношениях в последние годы правительства сёгуна. Приложения, т. 1. Токио, 1913.

Кадзухико Савада

Творчество И.А. Гончарова в Японии

В 1853-54 годах Иван Александрович Гончаров посетил Японию в качестве секретаря миссии адмирала Е.В.Путятина.

В 1880 годы произведения Гончарова оказали большое влияние на писателя Фтабатэя Симэя[1], а немного позднее многие из них стали известны японским читателям в переводах. И вероятно, можно сказать, что из русских писателей Гончаров наиболее глубоко связан с Японией и ее литературой. В японской печати имя Гончарова впервые было упомянуто, насколько мне известно, в 1889 году. В статье «Цензура и развитие литературы», опубликованной во влиятельном в то время журнале «Кокумин но томо» («Друг народа»), Гончаров, вместе с Толстым и Тургеневым, оценивается как «чудесный романист»[2].

В этой статье я хочу в хронологической последовательности проследить историю восприятия творчества Гончарова в нашей стране.

1

В 1881 году Хасэгава Тацуносукэ (1864-1909), известный под псевдонимом Фтабатэй Симэй[3], поступил на отделение русского языка Токийского института иностранных языков[4]. Русско-японский договор 1875 года, предусматривающий обмен Сахалина на Курильские острова, возмутил юного Фтабатэя, и он решил изучать русский язык, чтобы в будущем принять решительные меры против «вражеской страны России». Но случилось так, что язык ввел его в сложно-противоречивый мир русской литературы. Историю русской литературы в институте читал эмигрировавший из России Николай Грей[5]. Он не только глубоко знал предмет, но и был блестящим чтецом. Его студенты не только слушали произведения русских классиков в мастерском исполнении, но и обсуждали услышанное, давали характеристики литературным персонажам на русском языке. Не исключено, что именно этот метод помог Фтаба-

тэю глубже понять и почувствовать русскую литературу. Кроме того, долгие часы он проводил в институтской библиотеке, без устали читая собранные там художественные произведения и критические статьи по русской литературе. Это было увлекательное путешествие в мир Пушкина, Гоголя и Лермонтова, Белинского и Добролюбова, Тургенева и Гончарова, Достоевского и Толстого.

Во второй половине 80-х годов Фтабатэй дебютирует как писатель и переводчик. Прежде всего, следует назвать написанный в 1887-89 годах его роман «Плывущее облако», который считается одним из первых японских реалистических романов. В 1888 году Фтабатэй публикует переводы рассказов «Свидание» (из «Записок охотника») и «Случайные встречи» («Три встречи») И.С.Тургенева. Картины природы в «Свидании», передающие очарование русского леса, произвели глубокое впечатление особенно на японских молодых, жадно впитывающих новое читателей. Это были важные уроки для писателей следующего поколения, создавших в японской литературе натуральную школу. И можно сказать, что в начальный период проникновения русской литературы в нашу страну произведения Тургенева были известны гораздо лучше, чем произведения других писателей.

В это же время состоялось и знакомство Фтабатэя с Гончаровым. Фтабатэй заслушивался превосходным чтением «Обломова» на занятиях Грея, а в библиотеке зачитывался «Обрывом», который впоследствии назвал своим любимым романом. В позднем интервью «Прочитанные любимые книги» (1906) Фтабатэй заметил, что он любит прозу Гончарова за мелодичность звучания, и именно поэтому произведения этого писателя интереснее читать вслух. Безусловно, подобная точка зрения родилась под влиянием уроков преподавателя Грея. А в интервью «Беседа о русской литературе» (1906), имеющем подзаголовок «Романы Гончарова», есть такие строки:

«...Что касается Гончарова, его последовательная манера повествования рисует, в какой среде вырос герой, какой он прошел путь, в результате которого у него сформировался такой-то характер, и так как у него такой-то характер, то он, в таком-то случае, не мог не поступить так-то...»[6]

Мы, признаться, не встречали столь простого и точного определения своеобразия писательской манеры Гончарова. По мнению Фтабатэя, одна из стилистических особеннос-

тей Гончарова состояла и в частом употреблении философских и научных терминов, которые, однако, все без исключения поэтически осмыслены. Далее, рассуждая о сложностях идущего от реформ Петра Великого спора между славянофилами и западниками, Фтабатэй говорит, что роман «Обрыв» написан под влиянием этого спора. Можно только восхищаться, насколько глубоко Фтабатэй понял Гончарова.

Во второй половине 1880-х годов, кроме Тургенева, Фтабатэй переводит и два произведения Гончарова. Одним из них был отрывок из «Сна Обломова» - «Детство». Сохранившийся черновик перевода, сделанный приблизительно в июле-августе 1888 года, можно считать первым переводом Гончарова на японский язык. И если вспомнить, что в 1888 году автор «Обломова» был еще жив, то вряд ли можно переоценить роль Фтабатэя в деле знакомства Японии с русской литературой. Вероятно, этот перевод сделан с книги А.Филонова «Русская хрестоматия с примечаниями для высших классов средних учебных заведений. Ч.1. Эпическая поэзия»[7], которая была в библиотеке Токийского института иностранных языков и использовалась как учебное пособие для четвертого и пятого курсов на занятиях по грамматике, риторике и истории литературы. И хотя мы имеем возможность говорить только о черновике, переведенный отрывок, в основном, верен оригиналу и представляет точный перевод, в котором преобладают обороты разговорной речи. Последнее представляется особенно значимым. Ведь одной из важных и одновременно сложнейших задач, стоящих перед японскими писателями в последнее 20-летие XIX и первое десятилетие XX века, было создание национальной литературы на народном разговорном языке. И, безусловно, одним из достижений Фтабатэя следует считать то, что в романе «Плывущее облако» достигнуто единство литературного и разговорного языков. Фтабатэй полагал, что зарождение новой литературы непосредственно связано с усвоением опоэтизированных вульгаризмов, которые он использует в переводе наряду со специфически японской лексикой. Кроме того, в переводе «Детство» можно наблюдать и речевые повторы. В интервью 1906 г. «Мои принципы художественного перевода» Фтабатэй отмечал, что он стремился путем повторения одних и тех же словосочетаний передать ритмическое своеобразие европейского литературного текста, по срав-

нению с которым японский текст звучит монотонно. А система речевых повторов как раз и позволяла в монотонную японскую фразу внести мелодическое разнообразие оригинала.

Другим переводом из Гончарова, сделанным вслед за «Детством» в августе-сентябре того же 1888 года, был «Перевод первой части второго тома «Обрыва» в записной книжке «Кутиба (сухие листья). Книга первая». Это перевод начала первой главы третьей части «Обрыва», выполненный в сугубо книжном стиле. Там излагается мировоззрение Райского, как умеренного либерала. В записной книжке «Кутиба» есть еще 4 отрывка из «Обрыва», которые, строго говоря, являются наполовину переводами, а наполовину собственными сочинениями Фтабатэя. В той же записной книжке Фтабатэй признается, что «очень трудно описать психологию или страсть»[8]. И можно предположить, что эти полупереводы есть своего рода модель, образец «описания психологии или страсти». Но если учесть время этих переводов-опытов, то очевидно, что они тесно связаны с романом этого писателя - «Плывущее облако».

Его действие происходит в Токио приблизительно в 1886 году. Уцуми Бундзо, сын давно умершего мелкого провинциального самурая, - двадцатитрехлетний талантливый юноша, не сумевший приспособиться к практической жизни чиновника. Он живет на иждивении своего дяди Сонода Магобэя. В доме отсутствующего хозяина живет и его жена о-Маса - мелкая и корыстная женщина, и дочь о-Сэй-легкомысленная и поверхностно европеизированная девушка. После того, как Бундзо уволили со службы, о-Маса тотчас круто меняет свое отношение к неудачнику, о-Сэй тоже постепенно переносит свое внимание с Бундзо на Хонда Нобору, его бывшего сослуживца и ловкого карьериста. Бундзо презирает филистера Нобору и пробует предостеречь о-Сэй от опасности встреч с ним, но безрезультатно. Беспомощный, не знающий, что предпринять, Бундзо целыми днями сидит один в своей комнате, терзаемый сомнениями и душевными страданиями. На этом «Плывущее облако» обрывается. В записной книжке «Кутиба» есть набросок задуманной, но не осуществленной автором концовки романа: Нобору обольстит и бросит о-Сэй, а Бундзо из-за разочарования и личного несчастья сойдет с ума.

Вернемся к переводам Фтабатэя. Перевод первой части

второго тома «Обрыва», видимо, способствовал созданию образа Бундзо. Что касается остальных переводов, то образ Райского, тревожащегося за Веру, соответствует образу Бундзо, беспокоящегося об о-Сэй, а сцена, в которой Райский страдает над обрывом после того, как помог Вере пойти на свидание с Марком, соответствует эпизоду в предполагаемой третьей части «Плывущего облака», когда «Бундзо идет следом за о-Сэй и удостоверяется в том, что она входит в частный пансион Хонда» или «в тайной встрече Хонда с о-Сэй. Despair»[9].

Связь «Обрыва» с «Плывущим облаком» этим не исчерпывается. Как признается сам Фтабатэй в «Беседе о русской литературе», в «Плывущем облаке» он попытался повторить стиль «Обрыва», и это стилистическое сходство очевидно. В интервью «Слово о муках творчества» (1897) Фтабатэй подробно анализирует столкновение сюжетных линий своего романа и соотносит их с романом Гончарова: в противопоставлении о-Маса с Бундзо и о-Сэй автор видит столкновение новых и старых идеалов японского общества, то есть, расположение и противопоставление действующих лиц в обоих романах по существу совпадает: Райский и Бундзо, бабушка и о-Маса, Марк и Нобору, Вера и о-Сэй. Главная героиня каждого из романов по-своему ищет себя, словно «плывущее облако», между тремя другими героями. Так Вера «бросается с обрыва» между новым и старым поколениями; любя Марка, она вскоре отступает от своей любви, а о-Сэй переносит свое внимание с Бундзо на Нобору, который бросает ее.

В «Плывущем облаке» также показано, что детство Бундзо и о-Сэй наложило, каждое по-своему, определенный отпечаток на их характер. Такой взгляд на развитие личности, разумеется, свойствен русской натуральной школе первой половины XIX века, но вместе с тем, думается, что он сложился по преимуществу под влиянием Гончарова, если судить в особенности по вышеприведенному высказыванию Фтабатэя в «Беседе о русской литературе».

Несомненно, что персонажи «Плывущего облака» по своему содержанию гораздо ограниченнее и зауряднее своих «прототипов» из «Обрыва»: Бундзо «больше к лицу, когда он извиняется перед кем-то: он не решится упрекнуть кого-либо», а о-Сэй «по натуре легкомысленная болтушка»[10], и «образованность» ее поверхностна. Но и в этом тоже проявляется проницательно-бесстрастный реализм

Фтабатэя, пристально всматривающегося в японское общество 1880-х годов, только что вступившее на путь современного развития. Тем более, что Фтабатэй не видел в обществе такой личности, как Тушин, которого Гончаров очень ценил. Возможно, отчасти и поэтому задуманная концовка «Плывущего облака», о которой я писал выше, так и не была осуществлена, роман остался незаконченным. Однако незавершенность романа, вынужденное изменение сюжета образца (имею в виду роман «Обрыв») как результат неустойчивости, неопределенности самого японского общества составляют, без сомнения, не только оригинальность «Плывущего облака», но и предопределяют то значение, которое имел роман для дальнейшего развития нашей литературы.

2

Говоря о переводчиках произведений Гончарова на японский язык, вслед за Фтабатэем следует назвать Ядзаки Синсиро (1863-1947), известного под псевдонимом Саганоя Омуро. Саганоя поступил на отделение русского языка Токийского института иностранных языков на пять лет раньше, чем Фтабатэй, и в 1887 году дебютировал как писатель. Он много переводил из Тургенева и других русских классиков и вместе с Фтабатэем способствовал знакомству японских читателей с русской литературой в самый начальный период ее проникновения в Японию.

В 1894 году Саганоя опубликовал под заглавием «Детство Обломова» перевод отрывка из «Сна Обломова», который можно считать первым по времени публикации переводом из Гончарова, поскольку перевод Фтабатэя - «Детство» увидел свет лишь в 1913 году. Оригиналом для обоих переводов послужила, по всей вероятности, хрестоматия, составленная Филоновым. И Фтабатэй, и Саганоя выбрали один и тот же отрывок из «Сна Обломова», однако перевод Саганоя почти вдвое короче. Внимательное сравнение позволяет заключить, что Фтабатэй гораздо более верен оригиналу, чем Саганоя, в переводе которого находим немало произвольно сокращенных мест, то есть Фтабатэй относился к работе над художественным переводом с большей строгостью, чем Саганоя. Но несмотря на это, «Детство Обломова» (перевод Саганоя) пользовалось популярностью, причем современному читателю даже импонировала эта

«авторизированность» перевода. В одной рецензии 1894 г. на перевод читаем: «...это больше не «Обломов» Гончарова, а несомненно «Обломов» Саганоя...»[11].

В 1897 году в другом журнале появился роман Саганоя «Жизнь обыкновенного человека», который представляет собой перенос на японскую почву сюжета «Обыкновенной истории». Фабула романа Саганоя коротко сводится к следующему:

Тамура Ёсиаки, единственный сын богатого крестьянина, избалованный прислугой и любящей матерью, вырос барчонком. Он увлекся «литературой» и с самозабвением посылал свои стихи в местную газету. В возрасте 24 лет Ёсиаки решил поехать в Токио, чтобы учиться и стать великим поэтом. Там жил его дядя Тамура Будзаэмон. Он в молодости покинул родные места и, нажив состояние, теперь управлял заводом. В противоположность Ёсиаки, он, человек прозаичный, убеждал племянника в пользе наживы, предлагая тому «живые дела». Затем повторяется мотив столкновения племянника и дяди с последующим разочарованием первого. Вскоре Ёсиаки оставляет надежду стать поэтом и поступает на службу в фирму дяди. Он увлекается гейшей Косин, но спустя какое-то время замечает, что та обманула его. Чувствуя острое отвращение к столице, Ёсиаки возвращается на родину. Там продолжается холостая жизнь молодого человека. Она заставляет его родственников обеспокоиться, в итоге они решают его женить. Роман заканчивается сценой, происходящей спустя несколько лет, тогда Ёсиаки вместе со своей семьей приезжает в Токио и там снова встречается со старым дядей и тетей.

Сходство с «Обыкновенной историей» очевидно, но, разумеется, есть и различия. Например, Ёсиаки, в отличие от Александра Адуева, не вступил окончательно на путь своего дяди; образ Наденьки, возлюбленной Александра, общественно остро полемичен, а Косин же - просто гейша, искушающая неопытного героя. И здесь можно заметить различное отношение к литературе Саганоя и Фтабатэя: первый, «пересаживая» в Японию действующих лиц и ситуации русских романов, создавал одну за другой их вариации, а второй не смог закончить «Плывущее облако» как «переделку» «Обрыва».

Еще следует заметить, что в первой главе «Жизни обыкновенного человека» Саганоя подробно рассказано о

«семье и воспитании» героя. И эта глава, несомненно, есть не что иное, как реминисценции из аналогичного отрывка из «Сна Обломова», в том числе и переведенного самим Саганоя. То есть, строго говоря, роман является своего рода японским вариантом «Обыкновенной истории» и «Сна Обломова». Однако, в отличие от более раннего перевода, роман «Жизнь обыкновенного человека» не пользовался популярностью.

После русско-японской войны в 1904-05 годах число художественных переводов и обзорно-критических статей о русской литературе резко увеличилось, они были буквально нарасхват. Кроме того, японцы могли читать произведения русских писателей и в английских переводах Констанс Гарнет, которые продавались в магазине «Маруд-зэн», старейшем магазине европейских книг[12]. В это время переводились и современные русские писатели, но главное место занимал Л.Н.Толстой.

3

В 1917 году Яманоути Хосукэ[13] полностью перевел «Обломова». Яманоути - воспитанник Православной духовной семинарии, основанной в Токио архимандритом Николаем Японским[14] в 1875 году. Отделение русского языка Токийского института иностранных языков и Православная духовная семинария были двумя центрами изучения русского языка и русской культуры в Японии в конце XIX и начале XX века. В 1918 году Яманоути отправился во Владивосток и там работал главным редактором ежедневной газеты «Урадзио ниппо» («Владивостокский вестник»), издаваемой на японском языке. В начале литературной деятельности Яманоути занимался главным образом творчеством Л.Н.Толстого. В 1924 году он издал очень полную для того времени биографию «Ленин». Судя по воспоминаниям, «Обломов» в переводе Яманоути пользовался большой популярностью, а «обломовщина» вызвала интерес и сочувствие у тогдашних японских читателей. Это объясняется, вероятно, тем, что после Русско-японской войны общий интерес к России и к русской литературе значительно вырос, а, с другой стороны, японцы увидели в Обломове типичный русский национальный характер. Можно сказать, что в этот период интерес к творчеству Гончарова был велик, как никогда.

В монографии «История русской литературы» (1927)

Яманоути называет такие отличные черты писательской манеры Гончарова: «глубина объективности, точность наблюдений и стремление изобразить типические образы во всем многообразии обстоятельств»[15]. А в книге «Лекция по мировой литературе. Русская литература» (1930) Яманоути также замечает, что изображение типических образов есть отличительная черта Гончарова, свидетельство его большого «таланта синтеза». Со столь емкой и точной характеристикой творчества Гончарова нельзя не согласиться и сегодня.

В 30-е годы в списке наиболее читаемых русских писателей Толстого сменил Достоевский.

В 1940-50-е годы Иноуэ Мицуру[16] (1900-1959) перевел почти все крупные произведения Гончарова. В 1924 году Иноуэ окончил Институт Японо-русского общества[17], основанный в 1920 году в Харбине Ида Кохэем, любимым учеником Фтабатэя. Одним из первых переводов Иноуэ были «Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 гг. с приобщением замечаний его о японском государстве и народе» (1943-46). Издание сопровождено прекрасно составленными подробными комментариями переводчика. После Второй мировой войны Иноуэ стал одним из основателей Общества исследователей Советского Союза и первого Общества Советско-японской дружбы. Кроме того, он много переводил из русской и советской литературы.

Иноуэ, как русист, впервые опубликовал «Записки о плавании в Японию» (1941) - перевод отрывка из «Фрегата «Паллада». В дальнейшем он перевел «Литературно-критические статьи» (1948) (то есть «Мильон терзаний», «Заметки о личности Белинского» и «Лучше поздно, чем никогда»), «Обрыв» (1949-52), «Обыкновенную историю» (1952-53), и в 1959 году закончил перевод «Обломова». В середине работы над своими примечаниями к последнему переводу Иноуэ скончался. Примечания, составленные переводчиком к «Обрыву» и «Обыкновенной истории», основываются на монографии А.Г.Цейтлина «И.А.Гончаров» (1950). Следовательно, еще одной заслугой Иноуэ было и знакомство японского читателя с новейшим в то время исследованием творчества Гончарова в СССР. Иноуэ хотел издать собрание сочинений Гончарова на японском языке, но не успел. Необходимо сказать, что переводы Иноуэ и примечания к ним исключительно важны для понимания в

Японии творчества Гончарова, и я сам в своих исследованиях во многом опираюсь на них. К сожалению, в последнее время переводы Иноуэ не переиздаются.

4

С конца XIX века главы о Японии из «Фрегата «Паллада» несколько раз переводились на японский язык и послужили ценным источником для изучения истории русско-японских отношений.

Приведем основные переводы очерков путешествия Гончарова. Первыми по времени были «Записки о плавании Путятина в Японию» и «Записки о плавании русского посла в Японию». Эти сокращенные переводы, сделанные Такасу Дзисукэ в 1894 году, частично были опубликованы в 1939-40-х годах. Такасу, оставивший отделение русского языка Токийского института иностранных языков приблизительно в 1880 году, известен тем, что в 1883 году опубликовал сокращенный перевод повести А.С.Пушкина «Капитанская дочка», под названием «Неслыханная история в России. Записки о том, как влюбилась бабочка в пестик цветка»[18]. Это первый перевод русской беллетристики в Японии.

В 1930 году Хираока Масахидэ впервые перевел полностью главы о Японии из «Фрегата «Паллада» и опубликовал их под названием «Записки о путешествии в Японию». Это очень точный перевод, включающий, помимо глав о Японии, и впервые переведенную заключительную главу книги «Через двадцать лет». Хираока окончил отделение русской литературы университета Васэда, основанное в 1920 году.

В переводе Такано Акира и Симада Ё «Записки о плавании в Японию» (1969) представлено гораздо большее, по сравнению с предыдущими переводами, число глав из очерков, а в комментариях, привлекая большое количество японских и русских источников, Такано восстанавливает весь процесс русско-японских переговоров, которые невозможно проследить по одному лишь описанию Гончарова. Кроме того, как приложение в книгу включен перевод биографической статьи С.Д.Муравейского «И.А.Гончаров и его плавание на фрегате «Паллада»[19]. Не будет преувеличением сказать, что совместный перевод Такано и Симада - наиболее верный оригиналу, обширный и полно прокомментированный перевод глав из «Фрегата «Паллада».

5

Кроме того на японский язык переведены несколько

литературно-критических статей о Гончарове. Среди них «Взгляд на русскую литературу 1847 года» В.Г.Белинского (1848), «Что такое обломовщина?» Н.А.Добролюбова (1859), «Вечные спутники» Д.С.Мережковского (1897), «Идеал и действительность в русской литературе» П.А.Кропоткина (1905) и др. Возможно, вам будет любопытно узнать, что статья Добролюбова «Что такое обломовщина?» до сих пор занимает главное место в нашем понимании Гончарова.

Впервые частичный перевод этой статьи был сделан Баба Котё[20] в 1909 году под названием «Обломовщина». Однако с ее содержанием японский читатель был знаком еще раньше. Например, Фтабатэй в предисловии к своему переводу «Детство» называет имя Добролюбова, а в «Беседе о русской литературе» подробно пересказывает содержание этой статьи. В 1943 году Канэко Юкихико перевел ее полностью.

6

В заключение заметим, что знакомство японских читателей с произведениями Гончарова, хотя и не столь широкое и массовое, как знакомство с творчеством Толстого или Достоевского, началось в конце 80-х годов прошлого века. После Русско-японской войны интерес к произведениям писателя стал расти, и можно сказать, что 10-е годы нашего века - время наибольшей популярности Гончарова в Японии, что в целом характерно для процесса проникновения в Японию произведений и других русских классиков. Однако особенность знакомства японского читателя с Гончаровым мы видим в том, что с самого начала читатель познакомился с ним не по переводам с языков-посредников, как это было с другими русскими писателями, а в основном по переводам, сделанным с оригиналов Фтабатэем и Саганоя, воспитанниками Токийского института иностранных языков. Очень важной особенностью является и то, что впервые японское общество познакомилось с таким исключительно русским характером, как Обломов.

Приносим благодарность преподавателю университета Сайтама Алле Викторовне Хамано.

ПРИМЕЧАНИЯ

[1] В настоящей статье принят японский порядок написания: на первом месте - фамилия, на втором - имя.

[2] «Кокумин но томо» («Друг народа»), Токио, 1889, N 4-48, с. 4. Автор неизвестен.

[3] Созвучно «кутабаттэ симаэ», т.е. «чтоб тебя черт побрал», выражение, которое он часто повторял в свой адрес.

[4] Основан в 1873 году.

[5] По мнению японоведа Г.Д.Ивановой, это известный философ-народник Николай Васильевич Чайковский. См.: Иванова Г.Д. Русские учителя. - В кн.: 100 лет русской литературы в Японии. М., «Наука», 1989, с. 14-16.

[6] Фтабатэй Симэй. Полн. собр. соч., т. IV, Токио, «Тикума сёбо», 1985, с. 190.

[7] Изд. 5-е, знач. испр. СПб., 1875. Сохраняем орфографию оригинала.

[8] Фтабатэй Симэй. Полн. собр. соч., т. V, 1986, с. 25.

[9] Там же, с. 40.

[10] Фтабатэй Симэй. Полн. собр. соч., т. I, 1984, с. 140, 17.

[11] К.М. Последние события у Саганоя. - ж. «Уранисики» («Скромность»), Токио, 1894, N 19, с. 59.

[12] Основан в 1868 году.

[13] Годы рождения и смерти неизвестны. В «Библиографии И.А.Гончарова» А.Д.Алексеева (Л., «Наука», 1968) его ошибочно на странице 64 называют «Ямаути Фусукэ».

[14] Иоан Дмитриевич Касаткин (1836-1912).

[15] Яманоути Хосукэ. История русской литературы. Токио, «Кинсэйдо», 1927, с. 126.

[16] В «Библиографии Японии» (М., Издательство восточной литературы, 1960) его ошибочно на странице 264 называют «Иноуэ Мицу».

[17] Позднее Институт Харбин-гакуин.

[18] В 1886 году переиздан под названием «Русская любовная история, или Повесть о Смите и Марии».

[19] В кн.: Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». М., Географиздат, 1949, с. 3-60.

[20] Настоящее имя - Баба Кацуя.

第2章　　二葉亭四迷

二葉亭四迷の日本最初の小説『浮雲』（1886-89）におけるロシアの役割

ジャネット・A・ウォーカー

よく知られていることだが、ヨーロッパのいくつかの国々、とりわけフランス、イギリス、ドイツ、ロシアの文化は、日本文化の中で1870年代に始まる形態上の革新をもたらしたが、その革新は多様な形式をとり、重要性の度合いにおいて異なるものだった。J・トーマス・ライマーはその著書『巡礼の旅』の中で、この革新の主な源泉だったフランス文化の役割を評価して、「芸術が文化に対して中心的位置をしめる」（ライマー、23ページ）という感覚をフランスが独自に提供したと論じている。興味深いことにライマーは、フランスへおもむき、芸術に一身をささげる雰囲気を吸収するに足りるだけの期間そこに滞在した日本の作家や芸術家をとおして、日本文化に対するフランスの影響がどの程度もたらされたかを明らかにしている。西欧の主な文化的影響が日本で暮らし日本で働く個々の西洋人によってもたらされることは、おそらく異例のことだろうが、しかし日本文化に対するロシアの影響は、一部このような基盤の上に生じた。五十殿（おむか）利治の論稿は、1922年から1958年まで日本に住んだロシアのアヴァンギャルド版画家ワルワーラ・ブブノワが同時代の日本の美術界に与えた影響を描き出している。また長縄光男は、1861年に来日し1912年に日本で亡くなったロシア正教の宣教師ニコライ・カサートキン（神父ニコライ）が、日本の宗教と文化において果たした重要な役割について述べている。ロシアから日本へやって来た多少とも著明な旅行者で、近代日本のフィクションの発達において間接的に重要な役割を果たしたのが、ニコライ・グレーという人物だった。彼はアメリカ経由で1884年に来日し、東京外国語学校魯語科の教員となった。この学校は1873年東京に創設された官立学校で、未来の外交官や実業家などにさまざまな外国語を教えた（ライアン、26－29ページ）。

日本文化の革新のためにグレーがなした重大な貢献は、この学校でひとりの才能豊かな学生、二葉亭四迷（1864－1909）にロシア文学を教えたことである。その結果二葉亭はロシアのフィクションの翻訳家となり、その翻訳は正確さと美しさの点で当時の他のいかなるヨーロッパ語からの翻訳をも凌駕していた。彼はついには1880年代後半、マーレイ・グレヤー・ライアンが「日本最初の近代小説」①と名づけた作品を発表した。二葉亭は1884年6月グレーの日本到着から1886年1月の彼自身の外国語学校退学までの期間、グレーの薫陶を受けた。この学校の慣例として、二葉亭はロシア語の上級クラスでロシア文学の最良の作品によってロシア語を教わった。その教授法は、グレーや他の教師がゴンチャロー

フやドストエフスキイの作品を身ぶりを交えながら朗読するというやり方だった。②

二葉亭は疑いもなくグレーによるロシア文学の名作の音読と、グレーに刺激を受けて自分で読んだ他のロシアのフィクションや、ベリンスキイ、チェルヌィシェフスキイ、ドブロリューボフの文学批評から、19世紀ロシア・リアリズムの伝統の意味と、フィクションが当時の日本で果たしうる社会批評の役割の意味を学んだ。二葉亭は、「小説改良」が事実上ひとつの潮流となった（コルニツキ、25ページ）10年間にフィクションを書き始めた。マーレイ・グレヤー・ライアンは、二葉亭がフィクションを書くにあたって文学上の師である坪内逍遙（1859－1935）から多くを学んだことを明らかにした。だが二葉亭が1886年６月に『浮雲』を書き始めた時、ロシアのフィクション作品を自分のモデルとしたこともまた明白である。日本および西洋の批評家たちは多様な観点から二葉亭に対するロシア文学の影響を研究してきた。③筆者がこれから展開する議論は、４人の19世紀ロシア作家、すなわちゴーゴリ、ツルゲーネフ、ゴンチャローフ、ドストエフスキイが、二葉亭が小説という、日本文化にとって新しい形式で彼自身の実験を始めることを文字どおり可能にした、というものである。筆者は『浮雲』の冒頭に着目し、これら４人の著者が、19世紀リアリズム風の社会批評小説を書こうという二葉亭の意図にいかに影響を及ぼしたかを示そうと思う。

エドワード・W・サイードは、文学作品の発端はある意味で「作家が他のあらゆる言葉から離れる地点」（サイード、３ページ）だと書いている。同時に「発端」という用語は、「革新、新奇さ、独創性、改革、変化．．．」（サイード、５ページ）といった用語も導いてくる。だが「発端」という用語は第三の意味において、「必然的な意図の設定」（サイード、５ページ）を意味する。意志と行為を強調するのは観念である。そしてサイードはさらにこう説いている。

> 意図という言葉によって私が意味するものは、何かを特徴的な方法でーー意識的であれ無意識的であれーー、とにかくいつも（あるいはほとんどいつも）なんらかの形で最初の意図を合図し、常に目的をもって意味の創造に従事する言語で、知的に何かをなしたいという最初の欲求である（サイード、12ページ）。

「発端」という用語に関するサイードの言葉は、二葉亭と19世紀ロシア・リアリズムの作家たちとのつながりに光をあてる一助となる。まず第一に、二葉亭に対する彼らの影響はきわめて大きかったので、彼は以前の日本の長大なフィクションとは異なる作品を書き始め、小説というものがそうであるように、それまでのすべての小説とは違う小説を書くことができた。第二に、ロシアの作家の手本は日本のフィクションに改革をもたらした。あるいは筆者の以前の用語を用いれば、日本のフィクションを革新する作品を書くよすが

となったのである。第三に、より具体的なレベルで言えば、19世紀ロシアの作家たちは、二葉亭が大いに称揚した彼らの作品に代表されるような作品、すなわちリアリズム小説を書くという彼の意図を、とりわけ『浮雲』の冒頭で宣言し、実現すべく出発する助けとなった。

『浮雲』の冒頭を見てみよう。④

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となッた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ〳〵ぞよ〳〵沸出でゝ来るのは、孰れも顎を気にし給ふ方々。しかし熟々見て篤と点検すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髯、顎の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狆の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鶏髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろ〳〵に生分る。髭に続いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛ハ延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是れより降つては、背皺よると枕詞の付く「スコツチ」の背広にゴリ〳〵するほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デも持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか覓めんと済した顔色で、火をくれた木頭と反身ツてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より続いて出てお出でなさるは孰れも胡麻塩頭、弓と曲げても張の弱い腰に無残や空弁当を振垂げてヨタ〳〵ものでお帰りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上、さりとはまたお気の毒な。

途上人影の稀れに成つた頃、同じ見附の内より両人の少年が話しながら出て参つた。一人は年齢二十二三の男、顔色は蒼味七分に土気三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹つた鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ、繪草紙屋の前に立つても、パツクリ開くなどゝいふ気遣ひは有るまいか。兎に角顎が尖つて頬骨が露れ、非道く麁れてゐる故か顔の造作がとげ〳〵してゐて、愛嬌気といつたら微塵もなし。醜くはないが何處ともなくケンがある。背はスラリとしてゐるばかりで左而已高いといふ程でもないが、疲肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人聞の悪い渾名に縁が有りさうで、年敷物ながら摺畳皺の存じた霜降「スコツチ」の服を身に纏ツて、組紐を盤帯にした帽檐広な黒羅紗の帽子を戴いてゐ、今一人は、前の男より二ツ三ツ兄らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパツチリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせ〳〵してゐるので、何となく品格のない男。黒羅紗の半「フロツクコート」に同じ色の「チヨツキ」、洋袴ハ何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、縁の巻上ツた釜底形の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向ひ、

［中略］

「フヽヽン、馬鹿を言給ふな。」

ト高い男は顔に似気なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手軽るく、別れて獨り小川町の方へ参る。顔の微笑が一かは〳〵消ゑ往くにつれ、足取も次第〳〵に緩かになつて、終には蟲の這ふ様になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も参ツた頃、不図立止りて四辺を回顧はし、駭然として二足三足立戻ツて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階屋へ這入る。一所に這入ツて見やう。

高い男は玄関を通り抜けて縁側へ立出ると、傍の坐舗の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チヨンボリとした摘ツ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツト出る。

「お帰なさいまし。」

トいつて、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは。」

「先程お嬢さまと何處らへか。」

「さう。」

ト言捨てゝ高い男は縁側を傳つて参り、突當りの段梯子を登ツて二階へ上る。茲處は六畳の小坐舗、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になツている。床に掛けた軸は隅々も蟲食んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据え付けてあツて、筆、ペン、楊枝などを摑插しにした筆立一個に、歯磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立の書函、是にハ小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の缺けた火入、是れには摺附木の死體が横ツてゐる。其外坐舗一杯に敷詰めた毛團、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いづれを見ても皆年数物、その證據には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旧付てゐる。

『浮雲』の「筋」は次のように始まる。すなわち、主人公文三は田舎にいる寡婦の母から、上京して彼と一緒に暮らしたいと繰り返し言ってよこす手紙を受け取る。皮肉なことに、母を呼び寄せて一緒に住むという文三の計画は、彼が失職したために、以前にもまして今は実現しがたく思われる。そしてその先の関心も挫折する。すなわち、本文中で「お嬢さま」と言及されるひとつ屋根の下に暮らす従妹のお勢と結婚したいという、文三の口には出さぬ願いが破綻の危機に瀕するのである。この二本の糸、そして作者が文三ともうひとりの男昇を冒頭で対立する人物と設定したことによってプロットの糸が紡ぎ出されるが、これらが文三と昇をお勢を争うライバルの対立する社会・歴史的タイプとして示すプロットを生み出す。ここで作者は第一篇を終える。

世界中のフィクションには、いかにして作品を書きおこすかについて実に多種多様なしきたりがあるが、おそらくすべてのフィクションの冒頭はその作品を言語と時空間のコンテクスト上に設定しようと努めるだろう。19世紀前半の戯作、二葉亭が一番よく知っていたこの日本の過去のフィクションは、「『狂文』と呼ばれるユーモラスな、こっけいな散文スタイル」（ルートナー、37ページ）による、いくつかのパラグラフからなる長い形式的なプロローグから始まるのを常としていた。そしてこのスタイルは古典詩や古典劇への言及、地口や奇想に満ち、語り手の語る能力を本質的に証明してみせるものであった。ほとんど偶然であるかのように、そのようなプロローグの終わりあるいはその途中で、語り手は作品の背景を示してみせる。二葉亭が『浮雲』のなかで言及する二つの重要な戯作の作品、式亭三馬（1776－1822）の『浮世風呂』（1809）と為永春水（1790－1843）の『春色梅児誉美』（1832）⑤のいずれでも、特別な時間設定は示されていなかった。『浮世風呂』には実際導入部が二つある。ひとつは形式的に凝りに凝った「狂文」スタイルのなかで、これは地口や引喩とともに公衆浴場の形而上学的な意義に対する教訓的コメントを織り上げる（ルートナー、137 －139 ページ）。いまひとつは作品の前編を男湯から始め、これは教訓と地口が続くが、最後の一対の文章で来るべき見取り図、すなわち月の中頃の夜明け時を時間上に設定する（ルートナー、141 －143 ページ）。形式的なテクストは最初にさらに時（夜明け）を示し、客の身なりと彼が風呂に来たことをリアリスティックに描いて、そのあとで客と三助の会話へと進む（ルートナー、144 ページ）。

為永春水の導入部分は、「背景と雰囲気を決めるために星占いの暦の特殊な言葉」（ルートナー、39ページ）を用いる勇壮なレトリックの開陳（ウッドゥルは訳さず）によって機能し始め、その後さらに進んで叙情的な文体の言葉で綴られた、場面を一層特定するくだりとなる。ここでは語り手は場面を初春の朝に設定する。この設定は少なくとも「春」という言葉を含む表題からも明らかだ。場所は当時の江戸（東京）郊外にある向島地区の中の郷。語り手は初春の詩的な風景を描き出し、その後憂いに沈む主人公丹次郎とその「侘住居（わびずまゐ）」を紹介して、一時的な不運、貧困、苦しみといった彼の立場を示す（ウッドゥル、198 ページ）。正式のテクストの初編は、語り手が会話の行間にその身なりと容貌のリアリスティックな描写をちりばめるヒロインのひとりと、彼女がちょうどその朝訪問した丹次郎との長々しい会話から始まる（ウッドゥル、199 ページ）。

二葉亭の導入部を三馬のそれと比べてみると、二人の著者ともに教訓を垂れる、雄弁な一節があることは明らかだが、より顕著なのは違いの方だ。二葉亭同様、三馬はひとりの人間を紹介し、その身なりをリアリスティックに詳細にわたって描写するが、この人物は登場人物とはならないし、三馬の作品にはプロットがない。公衆浴場のこの永遠の形而上学的世界において、時間は特定されないし、場所も特定されない。そして人物と場のその鋭いリアリズムにおいて、会話がもっとも重要となる。二葉亭の一節と春水のプロローグ

の類似はそれ以上である。双方の作品とも教訓を垂れる、雄弁なくだりがある。双方ともにストーリーを（ともにストーリーがある）時間と場所上に位置づける。ともに登場人物の少なくともひとりを、彼／彼女の身なりと容貌の観点から紹介する。そしてともにプロットを導き出す会話がある。春水の作品に見られないのは、二葉亭による主人公の家の細心な地理の引用と主人公の部屋の描写であり、また二葉亭の歴史上の時間の具体的な感覚である。だが真に二葉亭の導入部を三馬と春水のそれと区別するものは、「場面を特定するテクストの力を読者に信じ込ませるような一連の話法の戦略を用いる」（スティール、5ページ）点で、19世紀ヨーロッパのリアリズムのフィクションの実際に倣おうとする二葉亭の明確な意図である。なぜなら二葉亭は『浮雲』のなかで、歴史上の時間と現実の場に存在し、確かな感情を有し、まことしやかな言葉を話し、生身の肉体をもつ登場人物たちの住むフィクションの世界を創造しようとするからだ。プロットと構成のレベルにおいて、二葉亭はプロットをとおしてまことしやかな行為を創造し、二人の人物の対立のプロットをとおして自分の時代と場にかかわるテーマを表現しようとする。

二葉亭が冒頭部分でロシアのモデル、すなわちゴーゴリの短編小説『ネフスキイ大通り』（1832）に依拠したことは明らかのようだ。⑥ゴーゴリの書きおこし方は、式亭三馬の戯作を読んでいた二葉亭にとってごく自然に思われたことであろう。なぜなら三馬が日本の都会の読者を公衆浴場、すなわち江戸末期の都会を背景としたくつろいだ、民主的な、裸のつきあいのこの大衆的な中心へと案内するのに対し、ゴーゴリはロシアの都会の読者を19世紀サンクト・ペテルブルグの流行の最先端をいく通り、あらゆる階級、職業の人々の集まる地点へと案内するからだ。三馬、ゴーゴリともに自分の言葉の軽やかさと、世界と人類の本質について思索をめぐらす能力を証明してみせ、無情とから騒ぎで知られるその場の一日の生活をとおして、包括的な言葉と視覚の旅へと読者を誘う。ゴーゴリのネフスキイ大通りの旅に比べて、二葉亭は神田見附方面の旅を徹底的に短縮してはいるものの、教訓めかしたくだりにはゴーゴリを想起せしめるような通行人数え上げの場面がある。すなわち、さまざまなタイプの髭の描写や、官吏に風刺をきかせた焦点を当てる箇所である。

約6ページをネフスキイ大通りの空しいから騒ぎの数え上げに費やした後、ゴーゴリは二人の若者を紹介し、一方に理想主義者、他方に実利主義者にして現実主義者の特徴を付与する。ゴーゴリは彼らに会話を始めさせ、この会話は二人の間に対立する、相容れない哲学が存在することを明らかにする。それからゴーゴリは二人を反対の方向に見送り、まず理想主義者の方に注意を向けて、彼にピスカリョーフという名を与える（ゴーゴリ、156 －157 ページ）。ゴーゴリは、二人のそれぞれが自分の好みの女性の後を追うというプロットを設定する。二人が互いに直接的な闘争関係に入ることはないが、彼らの運命はともにネフスキイ大通りによって象徴される、気まぐれな、人をまどわす見せかけの世界に

操られていることが示される。二葉亭は逆に神田見附周辺の人々と官僚世界の教訓めかした数え上げに約１ページを費やし、それから二人の男の官吏を、その身なりと容貌を描写し、注意深く一方に理想主義者、他方に実利主義者にして現実主義者の特性を付与しながら紹介する。二人の若者は会話を始め、そこで両者それぞれの価値感の相克が明らかになる。その後二人は別れ、めいめいが自分の道をたどる。プロットはまず理想主義者文三に焦点を当て、この人物はゴーゴリの物語の理想主義者同様、語り手の共感を得ているようにみえる。

『ネフスキイ大通り』の目的は『浮雲』のそれとは異なる。ゴーゴリは都合約35ページの物語で、気まぐれな都会の見せかけの世界における理想主義者の敗北を書く。二葉亭は結局177 ページの長編小説なみの作品を書き、そこでその時代の典型的人物としての二人の若い官吏の価値感の相克を暴いてみせる。いずれか一方の人物の敗北が両者の価値観の並置ほど重要にはみえないが、しかし理想主義者文三の方が恋の競争に敗れるようだ。だがゴーゴリは二葉亭に『浮雲』の冒頭部分を構成すべき要素、二葉亭の生まれ育った伝統にはない要素を提供した。それは、現代生活の象徴的な中心である特殊な都会の場、つまり日本のフィクションにとって新しい社会グループたる官僚の活動の中心である場を描くことである。だが二葉亭はさらにこれらの要素を、ゴーゴリの物語の導入部に源をもつ構成へとまとめ上げる。そこで語り手は歴史的に位置づけされた、歴史的に重要な闘争を導入すべく、二人の正反対の気質の人物を使う。二葉亭がそれに関してゴンチャローフの小説『断崖』⑦に負うところ大であることを表明し、明らかにこの闘争を「新旧」の間の闘争と規定しようとも、あるいはゴーゴリのように理想主義者と実利主義者の闘争と規定しようとも、二葉亭のプロローグの構成はゴーゴリから借用したものである。

二葉亭の導入部、すなわち、二人の若者が袂を分かってそれぞれの道を行く地点までのくだりに二つの要素が認められるが、これはゴーゴリの作品には見られない。それは筋の運びを時間上に正確に設定することと、二人の男の人物を身なりと身体的な外観から十分に特徴づけることである。二葉亭は『浮雲』の冒頭で10月末のある日の３時であることを示し、10月という言葉の代わりにこの月の古典的な日本語表現「神無月」を用いる。彼はこれが何年のことかは示さない。もっとも最初の段落に、1886年秋に洋服部を開業したばかりの呉服屋「白木屋」で購入したスーツを着た群衆中の人物に言及があることからして、物語は1886年秋以後のこととなる。二葉亭が作品の第一篇を1886年夏に書き、物語が２カ月間のことだとすれば、物語は1886年秋ということになるだろう。二葉亭のかなり正確な時間設定は、彼をその伝統上の師たち、三馬と春水から区別することとなる。三馬は公衆浴場の描写を特定の日、特定の年のこととはしない。なぜならこの浴場の恒久的であるとともに一時的な性格を描くことが彼の意図だったからだ。春水も同じく正確な歴史上の時間枠にあまり関心を払わなかった。なぜなら彼の意図は、典型的な恋の場面を特定の

時間とはかかわりのないおきまりのお家騒動という筋のパターンで扱うことだったからだ（ウッドゥル、21ページ）。『浮雲』冒頭を構成するうえで二葉亭の師となったゴーゴリも、正確な日付に頭を悩ますことはなかった。もっともゴーゴリの物語は、1830年代のロシアに根ざした価値観の苦闘、つまりやる気満々で実行力があり権力志向のタイプと闘うロマンチックな理想主義者の苦闘を描いてはいるけれども。

二葉亭は自分の小説を特殊な歴史上の現実内に位置づけようとする点で、すべてのロシアの師匠たちーーゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイ、ゴンチャローフーーに倣ったが、これら４人の作家のうちツルゲーネフだけが常に自分の小説の歴史上の時間を示している。『その前夜』（1859）はこんな風に始まる。「1853年のある暑い夏の日であった．．．」。そして『父と子』（1861）の冒頭は次のようにはっきりと時を設定している。「1859年５月20日のことだった」。⑧これが世に出た1861年の時点からみれば、物語の年が1859年であることを示すことによって、ツルゲーネフは読者に「農奴制廃止２年前のことだ」と思わせ、それによって読者に、ゆるやかな社会的変化を好む旧世代のロマンチックな自由主義者と、急速な荒々しい変化すら好む若いニヒリスト世代との社会・歴史的闘争の描写への心の準備をさせようとした。この日付はかくして歴史的な契機を、それにともなうあらゆるダイナミズムとともに示しているのである。

同様に二葉亭も、自分の小説に1886年の日付を与えることによって、読者に社会・歴史的変化の描写に合わすべく歯車の切り替えをさせようとしたのかもしれない。ただ彼の場合その描写とは、1861年という一年間にロシアで起こったような劇的な変化を提示することではなくて、むしろ農業に依拠した封建制度から官僚化し工業化しつつある近代国家への大規模な社会・経済的転換、1880年代末までのフィクションの中でその結果が一定の概念として形をとりつつある転換のいくつかの局面を描き出すことだった。二葉亭がロシア・リアリズムのフィクションを読んで知ることができ、彼自身が『浮雲』のなかで扱った重要な同時代の問題点とは、次のようなものである。すなわち、忠誠心という絆によって結び付いた封建君主のための勤労から、官僚制という特定の名と結びつかない大きな制度のコンテクストのなかで縁もゆかりもない雇い主のための勤労への移行、社会的な絆がゆるんだ結果、賢しくて野心ある者が突如として力と社会的な可能性を得ること、女性を尊敬するという新しい態度と男女のロマンチック・ラブの奨励、そして家中心の価値観が次第に風化し、それに応じて個人の価値観が増大してくることがそれである。⑨二葉亭は社会的論点をテーマ化する点で、自分が親しんでいたロシアの小説家の中で明らかに最もツルゲーネフに近い。そして二葉亭は自分の小説の内容が何年のことか、いつの季節のことかを正確に示し、また後に作品中で前述の数多くの社会的趨勢に触れるのでこのことが分かる。

二人の若者が別れる地点までの『浮雲』の導入部のいまひとつの要素、正確な時間設定

同様ゴーゴリから得たものではない要素とは、同時代の社会・歴史的闘争を描くという、より大きな構成上のプランの一部として、小説の主要登場人物たちを対立する心理・歴史的タイプとして肉体的、精神的に十全に特徴づけることである。実際、ゴーゴリは非常に多くのタイプの服装に言及しているものの、服装はそれを着ている人々の特徴づけの一部とはならない点で衣服は肉体から遊離している。またゴーゴリは二人の若者の服装は最小限しか描写せず、彼らの身体的な外観については何ひとつ語らない。二葉亭による二人の若者の顔、身体、服装の描写の濃密さはゴーゴリにはない。注目すべきことは、二葉亭が親しんでいた二人の戯作者がともに、登場人物の服装を詳細に描くという何代にもわたる日本文学の伝統に依拠しながら、登場人物の服装の豊かな描写を行っていることだ。このような服装の描写は、ある程度登場人物の特徴づけに用いられる。もっとも古典の時代から戯作にいたるまでの日本文学において服装描写の主たる効果は、相対的なエレガンスと美を示すことであり、さもなければ流行の美の標準に達しえないことを示すという役割を担っていたことだと思われる。江戸時代のフィクションで「野暮」な男が粋な服装をしようとして真の「粋」の精神を有する都会人に敗北した時ですら、この対立は美学上の対立であって、歴史上の葛藤を表現するために用いられたわけではない。フィクションのなかで数世紀にわたって服装描写に注意を払ってきた遺産は、二葉亭による登場人物の服装の正確な描写に明らかである。その場合、服装に無頓着な田舎出の人間という意味の「野暮」（文三）と、流行の先端をいく当世風で都会のめかし屋という意味の「粋」をそなえた人物（昇）との対立は、多分ここでも同じように認められる。

西洋のフィクションの伝統の中で、バルザックはたとえば『幻滅』（1837－43）の冒頭のダヴィド・セシャールとリュシアン・シャルドンの対照的な描写において、対立する心理・歴史的タイプとして登場人物を身体の観点から描く方法を一般化した。だが二葉亭はこの方法をむしろツルゲーネフの小説のひとつから学んだようだ。『その前夜』の冒頭に次のようなくだりがある。

1853年のある暑い夏の日であった。クンツォヴォからほど遠からぬモスクワ河のほとりに生えた、高い菩提樹の木陰に、二人の青年が草を敷いて寝そべっていた。一人は見かけたところ、23、4という年頃で、背が高くて色浅黒く、少し尖った鋭い鼻に、秀でた額をして、横に広い唇の上には控えめな微笑を浮かべていたが、仰向けにひっくり返って、小さな灰色の目を心持ち細めながら、物思わしげに遥か彼方を見つめている。

いま一人は腹ばいになり、薄色の髪のふさふさと渦巻いた頭を両手で支えながら、やはりどこか遠くの方を眺めていた。彼は友達より３つ年上だったが、見かけはずっと若々しかった。鼻ひげはやっとのぞきはじめたばかりで、顎には薄いうぶ毛がもやもやしていた。さわやかな色をした円っこい顔のデリケートな輪郭にも、やさしい茶色の目に

も、美しく反った唇にも、きゃしゃな手にも、何となく、子供子供した愛くるしさと、人をひきつけるような優美さが感じられた。全体に彼の体は、健康から来る快活な幸福感と、若々しさに息づいていたがーーそれは若人にのみ見られるのん気さであり、思い上がった得意さであり、愛すべき我がまま気分である。人が自分にうっとり見とれていることを心得た子供のように、彼は目を動かしたり、にこにこ笑ったり、頭を両手で支えたりした。上っぱりのような、だぶだぶした白い外套を着て、水色のボヘミヤン・ネクタイを細い頸に巻き、ぐにゃぐにゃになった麦藁帽子を傍らの草の中にほうり出している。

これに比べると、もう一人の方はまるで老人のような感じがした。その角張った格好を見たら、当人がいい気持ちで自然を享楽しているなどとは、恐らく誰も考えつくまい。彼は窮屈そうに寝そべっていたが、上が開いて下がせばまった大きな頭は、落ちつき悪く長い頸の上にのっかっていた。こうした不器用らしさは、彼の両手や短い黒のフロックにぎゅうっと締めつけられた胴や、まるでばったの後脚のように膝頭をおっ立てた、長い足などの格好にも現れていた。にもかかわらず、彼が良家の子弟であるということは、一目でそれと認められた。上品な教養の徴は、その不格好なからだ全体にうかがわれた。醜い上にやや滑稽でさえある彼の顔は、思索の習慣と善良性を現していた。彼はアンドレイ・ペトローヴィチ・ベルセーネフといい、薄色の毛をした仲間の青年は、パーヴェル・ヤーコヴレヴィチ・シュービンと呼ばれていた。

このくだりでツルゲーネフは、心理的、精神的特質を提示するために二人の登場人物の顔、髪の毛、肉体、衣服の描写を利用しながら、グレーム・タイトラーが19世紀リアリズム小説のすぐれた証として論ずるような、二人の人物の人相学的な描写を提示する。ツルゲーネフはわがままで無邪気な彫刻家志望のシュービンを、不器用で思慮深い哲学の徒ベルセーネフと気質の上で比べてみせる。普通、著者が特徴の対置によって特徴づけを行うこのようなくだりがあれば、対立するタイプはプロット上の葛藤の表現となるものだが、ここではツルゲーネフはロシアの現代青年の二人の代表を、後に主人公として小説に登場する激情的なブルガリアの革命家インサーロフと対置するのである。

多分二葉亭がツルゲーネフの一節において重要とみなしたものは、対立する二つのタイプを紹介するゴーゴリの似通った一節とは違って、こちらの方が登場人物たちの身体的な外観の豊かな描写を含んでいることであろう。ツルゲーネフは歴史上のある期間を提示するばかりでなく、人物の特徴を提示するためにそれを用いたのだ。『浮雲』の一節で二葉亭は登場人物たちの当世風を示すために彼らの洋服を利用する。官吏として彼らは大部分の同国人男性の服装、そしてもちろん同時代の田舎者の服装とは異なった様式の服装をするものと考えられていたのだ。したがって、日本を西欧の帝国主義列強と並ぶ世界の一員

とした歴史的な進歩的運動たる明治維新（工業革命と呼んでもよかろう）と結び付いたものとして、官吏の服装は彼らを特徴づける。ツルゲーネフ同様二葉亭も、登場人物たちの顔やふるまいにまつわる詳細を、個々人のタイプを示すために用いる。ツルゲーネフ同様彼も、都合の悪い細部、すなわち背の高い方の男の「蒼味七分に土気三分」の顔色にしりごみすることはない。そしてツルゲーネフ（とゴーゴリ）同様彼も、二人の男の一方を好んでいることを示す。なぜなら二人の登場人物のシーンの末尾で、ツルゲーネフは次のように書いているからだ。

> ．．．ベルセーネフは歩くたびに肩を高く上げ、頸を伸ばしながら、不器用な格好で進んで行ったが、それでも彼の方がシュービンよりもかえって歴とした人間のように見えた。もしあまりに使い古されて俗気を帯びていなかったなら、紳士という言葉を当てはめてもいいくらいだった。（『その前夜』第１章）

前述のように、ゴーゴリは『ネフスキイ大通り』において二葉亭に、社会・歴史的闘争をテーマ化する手段として対立する人物のタイプを描く方法を提供した。一方ツルゲーネフは二葉亭に、この対立を精神世界をまざまざと思いうかべさせるようにくっきりと描き出した細部をとおして、視覚的に具現する方法を提供した。

二葉亭は二人の若者が別れる地点まで（「フヽヽン馬鹿を言ひ給ふな」で始まる段落まで）のストーリー上の葛藤はもちろんのこと、場所と登場人物の紹介の手順までゴーゴリをほぼそのまま踏襲した。二葉亭による紹介がゴーゴリのプロローグと袂を分かつのはこの地点である。なぜならここで二葉亭は、ゴーゴリのプロローグでもその語りでもいかなる役割も果たさなかった19世紀リアリズムの約束ごとを導入しているからだ。すなわち二葉亭はもろもろの場所、とりわけ都会の空間のなかの主人公の住まいの地理上の位置を明らかにしているのである。日本のフィクションは少なくともさかのぼって西鶴くらいまで（17世紀末）、都会という環境――西鶴の場合は主に江戸、京都、大坂――に舞台を設定した。だが西鶴は、たとえば1686年の物語集『好色五人女』のなかの物語「中段に見る暦屋物語」が京都東山近辺の安井でのことだと記しながらも⑩、都市の想像裡の地図の上でこの位置を地理的に他の場所と関連づけて確定してはいない。二葉亭のフィクション上の直接の先輩にあたる三馬と春水も、虚構の地図の上で都会の舞台を互いに関連づけて位置を示すことはしない。⑪だが二葉亭は登場人物を紹介した後、神田見附を通り過ぎてから、はっきりと地図の上に記すことのできる道を彼らに横切らせる。

二葉亭がここで踏襲している手続きは、フランスのリアリズム作家バルザックによって創始されたものであり、都市の地図化とでもいうべきものである。すなわち、もし読者がその都市に出かけて登場人物と同じ道をたどれば、示された架空の目的地に到達しうるよ

うな精密さをもって、作家が都市の区域を言葉によってレイアウトするのである。二葉亭が知っていたロシア・リアリズム作家のうちドストエフスキイだけが、地理にのっとって地図化した現実的な都会の設定の中で登場人物を提示する。二葉亭が『浮雲』を書きはじめる時点までに読んでいた『罪と罰』（1866）のなかで、登場人物たちの住まいや行き先は、当時のサンクト・ペテルブルグの地図に正確に記入することができる。そしてドストエフスキイは地図でたどることのできる道すじで、ラスコーリニコフが殺人に着手する質屋の部屋からちょうど730 歩のところにある建物の中に彼の部屋を置く。文三が錦町で道に迷うのを二葉亭が描く上でモデルになりえたであろう小説中のくだりは以下のようなものである。

> 警察署へはどこまでも真っすぐに行って、二つ目の曲り角を左へ取らなければならなかったーー警察はそこから一足だった。けれど、最初の曲り角まで来ると、彼は立ち止まってちょっと考えた後、横町へ外れてしまった。そして、通りを二つ越して、まわり路をしながら先へ進んだーーこれは何も当てなしだったのかも知れないが、或いはほんの１分でも先へ延ばして、余裕を作ろうとしたのかも知れない。［中略］彼は家の中へ入って、門の下を通り抜け、それから右手にある最初の入り口をくぐって、なじみの階段を４階へと上り始めた．．．（『罪と罰』第２部第６章）⑫

こうしてドストエフスキイは二葉亭に、都市でおこる架空の物語に場面設定の正確な位置づけを確立する新しい方法を提供したのである。

マイケル・アーウィンは19世紀西洋のフィクションについて、「フィクションの多くの登場人物はその居間の叙述によって適切かつ効果的に読者に紹介される」（アーウィン、110 ページ）と述べた。二葉亭は文三の部屋の描写において19世紀西洋のリアリズムのフィクションのこの約束ごとを踏襲し、新しい創作技法を日本文学に導入した。三馬は浴場という普遍的な設定のなかで人物のタイプを扱い、一方春水は結末が登場人物の性格の必然的結果とはならない決まりきったプロットの中で幾分個性化した登場人物を提示したが、ともに登場人物の居住空間は描写していない。初期の戯作者山東京伝（1761－1816）は短編『錦之裏』（1791）において、「どんちゃん騒ぎの翌朝」の売春宿の売春婦の住まいを、床の上の皿や酒盃、便所に散らばったへどのちらばりとともに描く点で、19世紀西洋の写実的な室内描写に近づいた。⑬ただ特定の人物に関係のない描写が場面設定の一部にはなっていても、西洋の伝統的な写実主義とは異なり、それが登場人物の性格づけの一部にはなっていない。Ａ・Ｊ・マウントはバルザックによる登場人物の部屋の描写にふれて、「部屋の主の目から見ればあらゆる物は人間世界に同化されて生命を与えられ、人間的性質を付与されている」（マウント、42ページ）と述べている。『浮雲』において二葉

亭は、文三の住む都会の一部を地図で示したように主人公の部屋を描いてみせたばかりでなく、住人の性格の特徴を示すために文三の居間を利用する。

まず二葉亭は文三の部屋を「図面」に描くように示し、その広さ、面積、そして部屋の四方の側面の相互関係について情報を与える。ついで彼はもろもろの品物の相互関係、それから品物の状態に焦点を当てる。品物の状態はこの人物の経済的、個人的地位を明らかにし、彼の精神状態をも示してみせる。この場面で床の間のほったらかしの花と床の間のかけ軸は、田舎から来た親戚として一家のなかで文三の占める比較的低い地位のしるし、あるいは審美的な事柄に対する彼自身の無頓着のしるしと解釈できよう。文三の叔母や下女によってそこに置かれたかけ軸や花とは逆に、彼の持ち物の配置はきれい好きで整理整頓好みの気質を明らかにする。もっとも品物は目的に応じてではなく、形とサイズにしたがって一緒に置かれているのだが（すなわち、歯ブラシと筆とペンが一緒に置かれている）。バルザックの方法を踏襲しながら、二葉亭はいくつかの品物をとおして設定の時期を明らかにする。「燭缶」（ランプ）、「摺附木」（マッチ）、「火入」（たばこの火種を入れる小さい器）はことごとく1870年代以前の日本では見出すことのできなかった西洋からの輸入品である。さらに二葉亭は戯作者によってすでに用いられてきた技法、つまり事物に人間の性質を吹き込むばかりでなく、品物に登場人物の心理のあやを付与する。この場面で「縁の欠けた火入」は、幾分意欲をなくした、あるいは台無しになった人間を示す。これは後に小説の中で主人公が自分の無能さと無力さを思い知らされる危機のさいにこの損なわれた品物が登場する、という事実から得られるところの感想である。

二葉亭が馴染んで愛したロシアの小説家の中では、登場人物の部屋の描写をとおしてその人物を特徴づける方法のモデルを彼に提供した可能性の最も高いのはドストエフスキイである。ラスコーリニコフの目をとおして見たソーニャの部屋の描写の一部をここで引用してみよう。

> それは広いけれど至って天井の低い部屋で［中略］ソーニャの部屋は何となく物置きじみていて、恐ろしく不揃いな四辺形をしていたが、それがこの部屋に一種不具的な感じを与えるのであった。堀割に面した窓の三つある壁は、部屋を斜めに横切っているので一方の隅はひどい鋭角をなし、鈍い灯りではよく見分けられないほど奥深く入り込んでいるのに反して、いま一方の隅はみっともないほど鈍角になっている。この大きな部屋全体に家具らしいものはほとんどなかった。右手の隅に寝台があって、その傍には戸口に近く椅子が一つ置いてあった．．．（『罪と罰』第４部第４章）

この一節はさらに家具を数え上げ、黄色味をおびた壁紙に注目し、最後に湿気と貧しさを強調して終わっている。ドストエフスキイは二葉亭と同じように広さと面積の観点から

部屋を示し、その後事物に焦点を合わせる。もっとも、ドストエフスキイが部屋の細密描写にはるかに多くのスペースをさき、光と湿気の効果に焦点を当てさえするのに対して、二葉亭の方は室内の特定の事物により注意を集中させる。ツルゲーネフの細部描写の豊富さと歴史的な方向づけや、同じようなくだりにおけるゴンチャローフの直観的で分析的な広やかさとユーモアとは対照的に、二人の著者はともに部屋に対して即物的で科学的な関心をもつことを示している。二葉亭はドストエフスキイの細密描写の本能と、特定の事物に焦点を当てることによって個人の特性を示すツルゲーネフの力をひとつに結びつけたのである。

要するに、ゴーゴリは二葉亭に、二人の登場人物を現代世界の都市環境におくプロローグもしくは導入部のモデルを提供した。その世界は新しい経済的、社会的、精神的秩序の到来によってもたらされた不安定性に支配されている。二人の人物を紹介するうえでゴーゴリが目標としたものは、同時代の情景に根ざした社会的かつ倫理的な闘争の相対立する側面を彼らに体現させることだった。この目標を二葉亭は受け継いで、社会批評の小説を書くという目的に適うものとした。彼はツルゲーネフによって鼓吹されたより正確な時間設定と、人物の人相学的な描写を添えて、ゴーゴリのプロローグを肉づけした。ゴーゴリのプロローグに二葉亭は、ドストエフスキイによって提示されたような都会の場と主人公の部屋の細密描写を付け加えた。これらの部分はそののち話の筋を時空間内に位置づけ、主人公を特徴づけることとなった。二葉亭がロシアの師匠たちから諸要素を借用したその根底にあったものは、同時代の社会・歴史的闘争を描き出し、それにコメントを加えるようなすぐれてロシア的なリアリズム小説を書こうという意図だった。だが二葉亭が自分の作品を社会批評小説として書き上げたかどうかは疑問である。なぜならツルゲーネフとゴンチャローフがその小説のなかで行なったのとほぼ同じ程度に、二人の男の登場人物の間の葛藤を構築し、ひとりの女性をめぐる彼らの敵対関係の観点からこの葛藤を組み立てたあとで、作者二葉亭は小説の最終篇になるとこの敵対関係から離れて、まず主人公の頭の中の思案、次いでその女性の思案の詳細な吟味へと向かうからである。これらの思案はともに、三角関係をいかに解消するかを決めようとするものである。では我々は二葉亭が述べたように、彼の小説がその師ツルゲーネフととりわけゴンチャローフの完成の高みに達していないという点で、失敗作だと結論づけるべきだろうか。そしてもし二葉亭が実際に自分の小説を、ロシアのリアリズム作家たちの写実主義的な、社会批評の様式で終わらせなかったとすれば、二葉亭による小説形式の日本最初の作品の創造におけるこれら著者たちの役割をどのように解釈し得ようか。

筆者は、小説形式の日本最初の試みの発展におけるロシアの役割を次のように見たい。日本のフィクションを革新しようとする二葉亭の努力に対するロシアの刺激が生じたの

は、『浮雲』の冒頭、彼がこの作品を「創造する」さいの拠りどころとしてロシアの作家たちを必要とした時だった。だが二葉亭は書き続けていくうちに、自分自身の独創性を発展させていったばかりでなく、自国の伝統の美学上の考え方とパターンにますます多くのものを結びつけていき、とどのつまり自分の尊敬するロシアのモデルの作品とはまったく異なった種類の作品を書き上げたのだ。当時の文学上の植民地たる非西洋の作家にとってありがちな西洋に対する劣等感にとらわれた二葉亭は、この西洋のモデルからの逸脱を失敗と見なした。しかしながら、彼は「新旧の闘争」を豊かな陰影に富んだ方法でーーもっとも、ゴンチャローフが三つの小説で提示したような正確な方法ではないにしろーー提示しているのだから、二葉亭はより日本的な雰囲気の社会批評小説を書いたと考えるべきだろう。

したがって、二葉亭四迷は『浮雲』において確かに日本的形式の小説の発達にむけて第一歩を踏み出した。その小説は意図としては西洋の小説をモデルとしていたが、同時に二葉亭自身の伝統の継続であり副産物と見なすべきものでもあった。アフリカの小説評論家チディ・アムタが論じたように、西洋を小説の覇者たらしめているヨーロッパの伝統の中にすら普遍的な小説なるものは存在しないので、日本もしくはアフリカのようなより新しい小説の伝統を、確固とした規範を固守していないといって批判すべき点は何ひとつない。アムタは、それぞれの小説の伝統のユニークさは、それが提示する「特殊な現実」にあるとする（アムタ、127 ページ）。もっとも、アール・マイナーが言うように、文学的伝統のユニークさを生み出すうえで極めて重要なものとして、美学上の考え方とパターンに注意を促す人もあろう。したがってこういう考えを念頭に置くと、『浮雲』の創作におけるロシアの役割は、二葉亭が文化の交錯したフィクションという新しい伝統を自分自身の言葉で創始するさいの補助物のようなものと見なすことができよう。彼の場合、明らかにロシアの伝統に助けをかりてはいたが、それはそれとして近代日本のフィクション形式の発展に貢献したのである。

注

① 1967年にマーレイ・グレヤー・ライアンによる『浮雲』の研究と翻訳が世に出て以来、とりわけ1980年代初頭以来、西洋の《novel 》とは全く異なる起源と特徴をもつフィクションである日本語の「小説」について《novel 》という用語を用いることに研究者たちは異論を唱えてきた。マサオ・ミヨシは Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel. Berkeley: University of California Press, 1974と、近代日本の《novel 》の本質を探った最近の二つのエッセイ"The 'Great Divide' Once Again: Problematics of the Novel"（ともにMasao Miyoshi, Off Center: Power and Culture Relations between Japan and the United States. Cambridge:Harvard University Press, 1991, pp.9 - 36 and pp.37 - 61, respectively. の中で、「小説」を西洋の《novel 》と比較、対照して論じた。また筆者の総論的なエッセイ"On the Applicability of the term 'Novel' to Modern Non-Western Long Fiction", Yearbook of Comparative and General Literature, 37(1988): 47 - 68.も参照のこと。二葉亭が実際に《novel 》を書こうと意図していたとすれば、このエッセイで『浮雲』に関してこの語を用いるのが妥当だと思われる。

② Ryan, Japan's First Modern Novel, pp.26 - 29. ライアンはグレーの教育の実践に関する記述を大田黒重五郎と内田魯庵の記述に負っている。

③ ライアンの『浮雲』研究、二葉亭とロシアの作家たちのかかわりを英語でもっとも徹底的に論究したこの著作の他に、この点について西洋の言語で書かれた次のような学術的研究がある。Bruno Lewin, Futabatei Shimei in seinen Beziehungen zur russischen Literatur. Hamburg: Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens 38, 1955. またР.Г.Карлина. Творческие связи Хасагава Футабатэя с русской литературой. В кн.: Японская литература. Исследования и материалы. М., Изд-во восточной литературы, 1959, с.26-55.とБелинский и японская литература. В кн.: Литературное наследство: В.Г.Белинский. 56, т.2, 1950, с.501-512.（日本語版は『文学』22－1、1953年10月、992 －1005ページ）も参照のこと。日本の研究者の論文としては次のようなものがある。北岡誠司「二葉亭とロシア文学－小説観を中心に－」、『近代文学鑑賞講座』第1巻、東京、角川書店、1967年、292 －307 ページ。重松泰雄「『浮雲』におけるロシア文学の問題」、『文学論輯』７－１、1960年３月、33－46ページ。大谷深「『浮雲』とロシア文学」、『天理大学学報』32、1960年。（ツルゲーネフとのかかわりについては）柳富子「二葉亭の初期の訳業－翻訳散文論－」、『講座比較文学２　日本文学における近代』、東

京、東京大学出版会、1973年、83－117 ページ。柳富子「ツルゲーネフと二葉亭」、吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』、東京、清水弘文堂、1971年、43－71ページ。小森陽一「二葉亭四迷の文学理論」（ベリンスキイとの関わりについて）、『国語国文研究』65、北海道大学国語国文学会、1981年、18－31ページ。秦野一宏「二葉亭とゴーゴリー『浮雲』の文体をめぐって－」、『比較文学年誌』18、1982年、34－51ページ。清水茂「二葉亭『新編浮雲』の冒頭及びゴーゴリ、ドストエフスキーとの関聯について」、『比較文学年誌』23、1987年、34－51ページ。清水茂「二葉亭とゴンチャロフ」、『国文学』６、1961年５月、75－81ページ。杉山康彦「二葉亭四迷とゴンチャロフ」、『現代詩手帖』19－７、1976年６月、76－85ページ。沢田和彦「ゴンチャローフと二葉亭」、『比較文学年誌』17、1981年、30－53ページ（参考文献目録付き）。重松泰雄「『浮雲』とゴンチャロフの諸作品」、『文学論輯』５、1958年３月、14－28ページ。十川信介「『浮雲』の世界」、『文学』33－11、1965年、24－35ページ（本作品とゴンチャローフの『断崖』との関連について）。尾形国治「『浮雲』とゴンチャロフの『断崖』－呼称表現上の類似をめぐって－」、『比較文学年誌』17、1981年、16－29ページ。

④ 『浮雲』、『二葉亭四迷集　日本近代文学大系４』、畑有三・安井亮平注釈、東京、角川書店、1983年、40－44ページ。

⑤ これらの作品の日本語テクストは、式亭三馬『浮世風呂』、『日本古典文学大系』63、中村通夫校注、東京、岩波書店、1975年。「浮世風呂大意」、47－50ページ。「男湯之巻」の序文、53－55ページ。為永春水『春色梅児誉美』、『日本古典文学大系』64、中村幸彦校注、東京、岩波書店、1973年。「梅ご与美の序」、42－43ページ。物語の開始は47ページ。

⑥ Николай Гоголь. Невский проспект. Полное собрание сочинений, т.3, ред. В.Л.Комаровича, М., Изд-во Академии наук, 1938, с.91-116. 英語訳は、Nikolai Gogol: Arabesques, trans. Alexander Tulloch, introd. Carl R.Proffer (Ann Arbor: Ardis,1982), pp.151 - 157.筆者は二葉亭によるこのくだりの借用を1982年秋に発見し、1983年春に日本比較文学会東京支部、次いで1985年春にプリンストン大学で行った報告でこの問題を提起した。清水茂は注の③で引用した1987年発表の論文のなかでこれと似た結論に到達している。

⑦ 1897年の談話筆記のなかで、『浮雲』の中心となる論点は何かと尋ねられて、二葉亭はいかなる考えで第一篇を書き始めたか思い出せないが、作品の中心点となる思想は、官僚制を風刺もしくは批判するロシア文学の読書によってかき立てられた、日本の官僚制に対する憎悪の念であると答えた。後の談話筆記中で彼は、ゴンチャローフの最後の長編小説『断崖』（1869）のなかでなされている「新旧の対立」の描写を第三篇あたり

から取り上げてみようとした、と述べている。「作家苦心談」、『二葉亭四迷集　日本近代文学大系4』、410 −411 ページ。

⑧ これらのテクストのロシア語原文は、И.С.Тургенев. Накануне. Отцы и дети. Полное собрание сочинений и писем. т.8, М.-Л., Изд-во "Наука", 1964, с.7, 195. を参照のこと。

⑨ 16世紀後半以降の日本とロシアの歴史、経済、社会的変化の詳細な比較については、Cyril E. Black et. al., The Modernization of Japan and Russia: A Comparative Study. New York: The Free Press, 1975.を参照のこと。明治期の文学におけるロマンチック・ラブについては、村上孝之「ロマンティック・ラヴの成立と崩壊－二葉亭四迷の場合－」、『比較文学研究』46、1984年、36－59ページを参照のこと。

⑩ 日本語の原文は、井原西鶴「中段に見る暦屋物語」、『日本古典文学大系47　西鶴集上』、麻生磯次・板坂元・堤精二校注、東京、岩波書店、1974年、261 ページ。英語訳は、The Life of Amorous Woman and Other Writings, ed. and trans. Ivan Morris. Norfolk: New Directions, 1963.に所収。

⑪ 春水は自分の語り手か登場人物に、町のさまざまな地域や、彼らが参詣しようとする寺院のような場所の名前を言わせる。そして登場人物がそのことに触れるので、東京の二つの場所－－中の郷地区と吉原遊廓－－の間の道路地域を確定することができる。ウッドゥルの説明によれば、1830年代初頭にこの道路沿いには多くの武家屋敷があった（353 ページ）。だがこの街は『梅児誉美』のなかで語り手もしくは登場人物によって地図上に位置づけされてはいない。

⑫ 原文のテクストは、Ф.М.Достоевский. Преступление и наказание. Л., "Лениздат", 1970, с.167. を参照のこと。

⑬ 翻訳と注釈は、Peter F. Kornicki, "Nishiki no Ura": An Instance of Censorship and the Structure of a Sharebon", Monumenta Nipponica 32, No. 2. Summer 1977: pp.170 - 188. 事物が居住者の精神を反映するという意味で登場人物とその部屋の描写の顕著な古典的実例としては、紫式部『源氏物語』の「末摘花」の帖の描写がある。

引用文献

Amuta, Chidi. The Theory of African Literature: Implications for Practical Criticism. London: Zed, 1989.

Dostoevsky, Feodor. Crime and Punishment. Norton Critical Edition. Ed. George Gibian. New York: Norton, 1975.

Irwin, Michael. Picturing: Description and Illusion in the Nineteenth-Century Novel. London: George Allen&Unwin, 1979.

Kornicki, Peter F. The Reform of Fiction in Meiji Japan. Oxford Oriental Monographs 3. London: Ithaca Press, 1982.

Leutner, Robert W. Shikitei Samba and the Comic Tradition in Edo Fiction. Cambridge: Council on East Asian Studies, Harvard University and the Harvard-Yenching Institute, 1985.

Miner, Earl. Comparative Poetics: An Intercultural Essay on Theories of Literature. Princeton: Princeton University Press, 1990.

Mount, A.J. The Physical Setting in Balzac's 'Comedie Humaine'. Occasional Papers in Modern Language 2. Hull: Hull University, 1966.

Rimer, J.Thomas. Pilgramages: Aspects of Japanese Literature and Culture. Honolulu: University of Hawaii Press, 1988.

Ryan, Marleigh Grayer. Japan's First Modern Novel: "Ukigumo" of Futabatei Shimei. Translation and Critical Commentary by Marleigh Grayer Ryan. New York and London : Columbia University Press, 1967.

Said, Edward W. Beginnings. Intention and Method. Baltimore and London:The Johns Hopkins University Press, 1975.

Steele, H.Meili. Realism and the Drama of Reference: Strategies of Representation in Balzac, Flaubert, and James. University Park: Pennsylvania State University Press, 1988.

Turgenev, Ivan. Fathers and Sons. Trans. Rosemary Edmonds. With the Romanes Lecture "Fathers and Children" by Isaiah Berlin. Harmondsworth: Penguin, 1975.

Turgenev, I.S. On the Eve. Trans. Gilbert Gardiner. Harmondsworth: Penguin, 1950.

Tytler, Graeme. Physiognomy in the European Novel: Faces and Fortunes. Princeton : Princeton University Press, 1982.

Woodhull, Alan S. "Romantic Edo Fiction: A Study of the Ninjobon and Complete Translation of 'Shunshoku Umegoyomi'". Diss. Stanford University, 1978.

Кадзухико Савада (Сайтама)

И. С. Тургенев в Японии

Имя И. С. Тургенева, насколько мне известно, японские читатели впервые встретили в статье *О партии нигилистов в России*, опубликованной в известной своими оппозиционными взглядами газете *Тёя* (Вся нация) 28-го октября 1879 года[1], где говорилось, что слово "нигилист" впервые употребил Тургенев в романе *Отцы и дети*. В последней четверти XIX века всю Японию охватило "движение за свободу и народные права", и внимание японской общественности было приковано к русскому революционному движению, получившему название "нигилизм".

А 28 декабря 1883 г., видимо как дань памяти, в той же газете *Тёя* появился первый японский перевод произведения писателя. Это был *Порог* (из *Стихотворений в прозе*) под заголовком *Разговор Тургенева*. Перевод был сделан, по всей вероятности, с французского языка, переводчик, к сожалению, неизвестен. Тогда же, т. е. 27 и 28 декабря 1883 г., газета *Юбин хоти* (Почтовые известия) сообщала подробности о похоронах Тургенева.

Однако в истории новой японской литературы имя И. С. Тургенева навсегда связано с переводом *Свидания* (из *Записок охотника*), который был опубликован в 1888 году и кроме всего прочего развеял легенду о Тургеневе как вожде русских нигилистов. Думаю, что в истории мировой литературы мы не так часто можем наблюдать столь большое влияние маленького рассказа, тем более перевода произведения зарубежной литературы, на развитие литературы национальной. В предлагаемой статье я хочу рассказать главным образом об этом переводе рассказа *Свидание* и о дальнейшем знакомстве японцев с творчеством Тургенева.

I

В 1881 году Хасэгава Тацуносукэ[2] (1864–1909), известный под псевдонимом Фтабатэй Симэй[3], поступил на отделение русского языка Токийского института иностранных языков[4]. Русско-

---

1 Все даты приводятся по новому стилю.

2 В настоящей статье принят японский порядок написания: на первом месте – фамилия, на втором – имя.

3 Созвучно "кутабаттэ симаэ", т. е. "чтоб тебя черт побрал", выражение, которое он часто повторял в свой адрес.

4 Основан в 1873 году.

японский договор о дружбе 1855 года предусматривал, что граница между обеими странами будет проходить между островами Итуруп и Уруп, а Сахалин будет неразделенным между ними. Однако по договору 1875 года Япония, уступив России весь остров Сахалин, получила Курильские острова. Второй, т. е. 1875 г., договор возмутил японцев: это показалось им "обменом своего на свое" и породило уверенность, что Россия представляет для Японии большую угрозу. Фтабатэй разделял это страстное возмущение и решил изучать русский язык, чтобы в будущем принять решительные меры против "вражеской страны России".

Из 250 абитуриентов, собравшихся со всей страны, было отобрано 40. В течение 2–3-х недель в Токийском институте иностранных языков они изучали русское произношение, а затем лишь 25 человек из них, хорошо усвоивших русскую фонетику, были приняты в институт в качестве студентов. Уровень преподавания был очень высок, к тому же почти все занятия проводились на русском языке по русским учебникам. Как будто в центре Токио внезапно появилась русская гимназия.

Русский преподаватель Андрей Коленко, народник-эмигрант, питая доверие к умственным способностям и духовной самостоятельности студентов, на лекциях по русской литературе углублялся в иногда слишком трудные для подростков социально-нравственные и художественные проблемы русской литературы. После Коленко историю русской литературы читал эмигрировавший из России Николай Грей. По мнению японоведа Г. Д. Ивановой это известный философ-народник Николай Васильевич Чайковский[5]. Он не только глубоко знал предмет, но и был блестящим чтецом. На занятиях студенты слушали произведения русских классиков в мастерском исполнении преподавателя, а обсуждая услышанное, давали характеристики литературным персонажам на русском языке. Не исключено, что именно этот метод помог Фтабатэю глубже понять и почувствовать русскую литературу. В позднем интервью *Мои принципы художественного перевода* (1906) Фтабатэй говорит, что европейский литературный "текст имеет своеобразный ритм и, если читать его вслух, то вырабатываются правильные интонации", однако трудность состоит в том, чтобы "передать в японском переводе его ритм, его мелодику"[6]. Это был на редкость мудрый взгляд в то время, когда большинство литераторов читало про себя произведения зарубежной литературы в тиши кабинета, чтобы использовать сюжет в

---

[5] Г. Д. Иванова, *Русские учителя*, в кн.: *100 лет русской культуры в Японии*, Москва 1989, с. 14–16.

[6] Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. IV, Токио 1985, с. 166; пер. Р. Карлиной. – *Восточный альманах*, вып. 1, Москва 1957, с. 384.

своем творчестве. Среди японских преподавателей следует назвать Итикава Бункити. В 1865 году он был выбран одним из студентов, отправленных сёгунатом в Россию, и поехал в Петербург, где его взял на попечение Е. В. Путятин, бывший посол в Японии, а русскому языку он учился у И. А. Гончарова. После падения сёгуната Итикава один остался в России еще лет на 9, был принят в свете, женился на русской женщине, у них был ребенок. После закрытия Токийского института иностранных языков в 1885 году он решительно отказался от карьеры и до конца дней своих, лет 40 провел в уединении вдали от столицы. Для Итикавы, видевшего петербургский свет второй половины XIX века, должно быть, жизнь не стоила карьеры в обществе новой Японии.

Долгие часы Фтабатэй проводил в институтской библиотеке, читая собранные там художественные произведения и критические статьи по русской литературе. Это было увлекательное путешествие в мир Пушкина, Гоголя и Лермонтова, Белинского и Добролюбова, Тургенева и Гончарова, Достоевского и Толстого. Таким образом на формирование мировоззрения молодого Фтабатэя глубокое влияние оказали китайская культура и конфуцианская мысль, изучение которых было обязательным в школе, а с другой стороны философско-этические и эстетические принципы русской литературы. Из этого же сплава родилась его художническая концепция, что литература не объяснением или наставлением, а описанием, обращенным к чувствам, может выразить заповеди бытия, содержащиеся в конфуцианских Четверокнижии и Пятикнижии, Библии или будийских сутрах. И это был принципиально новый взгляд на возможности литературы, поскольку в Японии литература до тех пор называлась "гэсаку" (легкая, развлекательная литература) и считалась бульварной. Фтабатэй же отводил литературе совершенно иное место в системе общественного сознания: она "наблюдает, рассматривает и предвидит общественные явления"[7]. Во второй половине 80-х годов Фтабатэй дебютирует как писатель и переводчик. Прежде всего следует назвать написанный в 1887–89 годах роман *Плывущее облако*, который считается одним из первых японских реалистических романов. В 1888 году он публикует переводы рассказов *Свидание* и *Три встречи*.

---

[7] Фтабатэй Симэй, *Исповедь в середине жизни. Полн. собр. соч.*, т. IV, с. 289.

II

Знакомство Фтабатэя с творчеством Тургенева произошло, как выше сказано, в студенческие годы. Фтабатэй заслушивался превосходным чтением тургеневских произведений на занятиях Грея. А в библиотеке были *Сочинения И. С. Тургенева (1844–1874)* в 7-ми томах (1874). В 1884 году Фтабатэй на третьем курсе прочитал один за другим по крайней мере 2, 3, 4, 5 и 6 тома *Сочинений*. В 1886 году Фтабатэй начал переводить роман *Отцы и дети* под заглавием *Нравы партии нигилистов*. Однако этот перевод, несмотря на рекламу, не был закончен.

Как понимал Фтабатэй творчество Тургенева? В интервью *Мои принципы художественного перевода* Фтабатэй говорит:

> "Возьмем для примера Тургенева: его поэтическая идея не напоминает ни зиму, ни осень. Это весна. Но не ранняя весна и не ее середина. Это – конец весны, когда вишни в полном цвету и уже чуть-чуть начинают осыпаться. Как будто идешь лунным вечером по узкой тропинке среди вишен, и призрачная, прекрасная весенняя луна сияет в далеком, подернутом туманной дымкой небе. Иначе говоря, та неуловимая грусть, что сквозит в этой красоте, и есть поэтическая идея Тургенева"[8].

Одним словом, Фтабатэй считал Тургенева лирическим писателем, а его "поэтическая идея" совпала с романтизмом, лиризмом и идеализмом молодого Фтабатэя.

III

Перевод *Свидания* был опубликован в 25 и 27 номерах журнала *Кокумин но томо* (Друг народа) за июль и август 1888 года. Это был пятый год после смерти Тургенева. *Кокумин но томо* – толстый журнал, один из влиятельнейших и читаемых, особенно интеллигенцией. Редактором журнала был Токутоми Сохо. В 1896 году Токутоми посетил Толстого в Ясной Поляне, и даже известно, что он попробовал для классика распеть китайские стихи ("сигин").

По всей вероятности, *Свидание* было переведено с текста первого тома *Сочинений И. С. Тургенева (1844–1864)* (Карлсруэ, Изд. бр.

---

[8] Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. IV, с. 168; *Восточный альманах*, вып. 1, с. 386–387.

Салаевых, 1865)[9]. Тщательное сличение перевода с оригиналом показывает:

1. Это точный и в основном верный оригиналу перевод. В интервью *Мои принципы художественного перевода* Фтабатэй отмечает:

> "Таким образом, если при переводе иностранного произведения учитывать только смысл и на него делать весь упор, то возникает опасность нарушить подлинник. По моему убеждению, необходимо понять и ощутить ритм подлинника и передать его в переводе. Поэтому я считал, что нельзя самовольно отбросить ни одной запятой, ни одной точки; если в оригинале три запятых и одна точка, то и в переводе должна быть одна точка и три запятых. Тогда будет сохранен ритм подлинника"[10].

Разумеется, нельзя прямо применить эти слова к *Свиданию*, но если учесть, что в то время в Японии перевод понимался как изложение, то это был верный оригиналу перевод и в передаче пунктуации.

2. В переводе можно наблюдать фонетико-семантические повторы, которыми так богат оригинал. Например:

"аваавасии сиракумо га сора" ("Небо то все заволакивалось рыхлыми белыми облаками"), "дзаситэ, сикоситэ, соситэ" ("Я сидел и глядел кругом, и слушал"), "омосиросóна, варауёна" ("веселый, смеющийся трепет")[11].

Безусловно, это была попытка в монотонную японскую фразу внести мелодическую живость оригинала, о которой Фтабатэй говорил в упомянутом выше интервью, и которую впервые услышал на занятиях преподавателя Грея. Однако современники вообще не оценили этой попытки, не осознали ее эстетической верности оригиналу. Консервативный критик Исибаси Сиан с иронией отмечал, что "и украдкой, лукаво, начинал сеяться и шептать по лесу мельчайший дождь" – слишком напыщенно-сложное описание дождя, и упрекал перевод за назойливость художественных

---

9 Арая Кэйдзабуро, *'Свидание' в переводе Фтабатэя – проблемы интерпретации*, в: *Хикаку бунгаку нэнси* (Ежегодник сравнительного литературоведения), Токио 1967, № 4, с. 67.

10 Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. IV, с. 167; *Восточный альманах*, вып. 1, с. 385.

11 Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. II, 1985, с. 5; И. С. Тургенев, *Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах*, изд. 2-е, испр. и доп., т. III, Москва 1979, с. 240.

средств[12]. Однако, так как одна из отличительных черт стиля Тургенева состоит в богатстве эпитетов, в их семантическом нанизывании во фразе для передачи нюансов чувства или состояния, то Исибаси надо было упрекать самого автора.

3. Перевод *Свидания* был написан языком, основанным на единстве литературного и разговорного стилей. Описание березовой рощи в первой половине и в самом конце рассказа Фтабатэй переводит дословно, а разговор Виктора с Акулиной во второй половине – достаточно свободно. Одной из важнейших и одновременно сложнейших задач, стоявших в то время перед японскими писателями, было создание национальной литературы на народном разговорном языке. У Фтабатэя была модель построения диалогов в произведениях "гэсаку", сохраняющих старую литературную традицию, но не было соответствующей модели повествования, поэтому он сосредоточился на выработке повествовательного стиля, отстраненно-равнодушно наблюдающего ход вещей. *Свидание* было переведено между публикациями второй и третьей частей романа *Плывущее облако*. Думается, что Фтабатэй особенно тщательно работал над описанием березовой рощи еще и потому, что хотел найти в третьей части своего романа ту манеру повествования, в которой бы сплавились воедино язык литературный и разговорный. Возможно поэтому он выбрал простой по структуре рассказ из *Записок охотника* и затратил на перевод первой половины особенно много сил.

4. При переводе названий растений, оттенков цветов и пр. Фтабатэй использует научную лексику, записывая эти названия "катаканой" (один из двух вариантов японской слоговой азбуки), по-английски или прибегает к примечаниям в скобках, что говорит о больших трудностях художественного перевода, поскольку запас собственно японской лексики для обозначения реалий западного мира был крайне мал.

IV

Какие отклики вызвала публикация *Свидания*? Большинству читающей публики оно показалось только странным. Исибаси Сиан, как выше упомянуто, считал его "сухим и скучным" и отмечал с иронией, что "фабула очень проста, а описание очень назойливо [...] надо выбрать рассказ посодержательнее"[13]. Можно сказать, что это своего рода выпад старой литературной школы

---

[12] Сиан Гайси [псевдоним Исибаси Сиана - К. С.], *Читая 'Свидание'*, в: *Кокумин но томо* (Друг народа), Токио 1888, № 30, с. 39.

[13] Там же, с. 39.

против новой.

Напротив, на новое, пока еще немногочисленное поколение молодых читателей *Свидание*, в частности картины природы, произвели глубокое впечатление. Хотелось бы остановиться на некоторых особенностях восприятия "тургеневской" природы. В описании завораживающей красоты русского леса японский читатель в переводе Фтабатэя почувствовал лес Японии. Например, молодой поэт Канбара Ариакэ позднее заметит:

> "Как я уже говорил, и то, что пейзаж в *Свидании* показался мне схож с теми картинами, которые я видел вчера, гуляя за городом, в конечном счете во многом обязано прекрасному перу господина переводчика. Деревенский пейзаж средней полосы России был перенесен на равнину Мусаси [равнина, к которой примыкает город Токио – К. С.]"[14].

В самом начале рассказа есть фраза: "Внутренность рощи, влажной от дождя, беспрестанно изменялась, смотря по тому, светило ли солнце или закрывалось облаком"[15] – эти попытки наблюдать движение света и воздуха, передать все новые и новые нюансы в состоянии природы, в чем критик Исибаси увидел лишь рой эпитетов, вызвали восхищение.

Кроме того, в рассказе Тургенева читатели увидели совершенно иную традицию понимания природы, ее взаимоотношений с человеком. В Японии издавна сложились уходящие в синтоизм традиционные приемы любования красотами природы: ее олицетворение, погружение в нее. Эта же традиция питала и японскую литературу. Но читатели *Свидания* впервые осознали, что природа есть нечто независимое, отдельное от человека, имеющее свое тело, душу, жизнь. "Ворон", "большое стадо голубей", "признак осени!", стук "пустой телеги"[16] – все существует в независимом от "меня" временном течении, перемены внешнего мира самостоятельны, как и перемены, колебания "моего я", и лишь их совпадение, синхронность может родить гармонию бытия. Таким образом перевод Фтабатэя был важным уроком сенсуалистического и импрессионистического понимания природы, который приблизил следующее поколение писателей к созданию в японской литературе натуральной школы. Поэтому не будет преувеличением сказать, что *Сви-*

---

[14] Канбара Ариакэ, *По поводу 'Свидания'*, в кн.: *Фтабатэй Симэй в воспоминаниях современников*, Токио 1909, с. 82.

[15] И. С. Тургенев, *Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах*, изд. 2-е, испр. и доп., т. III, с. 240.

[16] Там же, с. 248.

дание представляет собой первый художественный перевод произведения новой европейской литературы и новая японская литература началась этим переводом.

Как относился Фтабатэй к упомянутым выше откликам на свой перевод? В интервью *Мои принципы художественного перевода* читаем:

> "Если меня и хвалили, то это не имело отношения к моему переводческому методу, так что одобрение не доставляло мне радости, а когда порицали, то это опять-таки не относилось к моим переводческим принципам и не затрагивало меня, потому что в этих критических замечаниях не было ничего для меня поучительного"[17].

Отсюда ясно, что Фтабатэй совсем не был доволен откликами. Под словом "порицали" он, должно быть, имел в виду, например, вышеуказанную критику Исибаси Сиана. В позднем незаконченном интервью *Влияние русской литературы на японскую* Фтабатэй отмечает:

> "Говорят, что одно небольшое произведение Тургенева [*Записки охотника* – К. С.], пропитанное кровью и слезами, много способствовало освобождению крепостных"[18].

Однако японские читатели того времени были совсем не знакомы с теми общественными противоречиями крепостнической России, которые отражены в рассказе, в частности в образе крестьянской девушки, посвятившей все барскому лакею и им брошенной.

V

В дальнейшем Фтабатэй перевел 8 произведений Тургенева: *Три встречи*, *Ася*, *Сон* (рассказ), *Рудин*, *Жид*, *Петушков*, *Дым*[19] и *Завтрак у предводителя*[20]. Эти переводы пользовались большой популярностью у молодых писателей и сильно повлияли на их творчество.

Они довольствовались не только переводами на японский

---

17 Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. IV, с. 167–168; *Восточный альманах*, вып. 1, с. 386.

18 Фтабатэй Симэй, *Полн. собр. соч.*, т. IV, с. 305.

19 Незаконченный и неопубликованный перевод.

20 Адаптация к японским условиям.

язык, но и читали другие тургеневские произведения в английских переводах, сначала *The Astor Prose Series*, а потом *The Novels of Ivan Turgenev* в 15-ти томах (1894–1899), выполненные английской переводчицей Констанс Гарнет. Приблизительно с 1900 года по 1910-е годы все японские литераторы пережили увлечение Тургеневым в переводах Гарнет. Их покупали в старейшем в Японии токийском книжном магазине "Марудзэн"[21].

Приблизительно с 1903 года в течение десяти лет постепенно увеличивается число переводов тургеневских произведений в журналах. В 1914 году вышла в свет первая биографическая монография Нобори Сёму *Тургенев*. К этому времени японские читатели располагали уже почти всеми основными произведениями писателя. Однако все переводчики, за исключением Фтабатэя, пользовались английскими переводами Гарнет. На новую японскую литературу оказали влияние, в частности *Записки охотника* и *Рудин*. Приблизительно в 1910 году популярность Тургенева в Японии достигла своего апогея. В одном из ведущих университетов на отделении английской филологии студенты писали дипломные работы, посвященные творчеству Тургенева. В 1915 году роман *Накануне* был поставлен на сцене, а *Песня гондольера*, спетая героиней в спектакле, пользуется и сейчас большой популярностью. В 1917–18 годах вышло первое *Собрание сочинений Тургенева* в 10-ти томах на японском языке.

Со временем интерес к произведениям Тургенева постепенно гаснет и в дальнейшем главное место будет занимать Л. Толстой, потом Достоевский. Однако по числу переводов тургеневских произведений Япония, по всей вероятности, занимает первое место во всем мире. В заключение приведу статистические данные. С 1888 по 1900 год на японский язык были переведены 14 произведений Тургенева, а с 1901 по 1912 год – 66[22]. С 1922 по 1955 год число переводов, опубликованных в отдельных книгах, – 340, число собраний сочинений – 13, а по числу переводов на первом месте – *Первая любовь* (28 раз в 11-ти различных переводах), на втором – *Рудин* (23 раза в 9-ти различных переводах), затем – *Отцы и дети* (20 раз в 9-ти различных переводах) и *Новь* (20 раз в 8-ми различных переводах)[23].

---

21 Основан в 1868 году.

22 Отани Фукаси, *Переводы произведений русской литературы и японская литература*, в: *Кокубунгаку* (Отечественная [Японская] литература), Токио 1959, № 4–5, с. 43.

23 *Мэйдзи, Тайсё, Сёва хоньякубунгаку мокуроку* (Библиография переводов иностранных литературных произведений на японский язык). По материалам Государственной библиотеки Парламента, Токио 1959, с. 281 – 288.

佐藤清郎著『二葉亭四迷研究』
（有精堂出版、1995年）

佐藤清郎氏の長年にわたる二葉亭四迷研究の成果が一本にまとめられた。その目次は次のとおりである。

Ⅰ　二葉亭四迷の生涯
　はじめに
　1　前期
　2　中期
　3　後期
　終章　「正直（チェースノスチ）」の人――揺れ動く心――
Ⅱ　「人生に対する態度」
　1　「正直」と《Честность》――二葉亭四迷における「正直」――
　2　二葉亭四迷のヴィッテ観
　3　二葉亭四迷と＜社会主義＞
Ⅲ　1　二葉亭四迷とベリンスキー――文学理論における継承性――
　2　二葉亭四迷と嵯峨の屋お室――ベリンスキー受容の相違点――
　3　二葉亭四迷とドブロリューボフ
　4　『浮雲』とロシア文学――新しい文体の摸索――
　5　二葉亭四迷とゴンチャローフ――＜Умение жить＞（処世術）をめぐって――
　　【補論】　二葉亭四迷と『断崖』（ゴンチャローフ）
　6　二葉亭四迷とトルストイ
　7　二葉亭四迷とチェーホフ――接点としてのスペンサー受容の相違――
Ⅳ　二葉亭四迷の翻訳について
　0　同伴者としてのロシア文学
　1　ゴーゴリ
　2　ツルゲーネフ
　3　トルストイ
　4　ガルシン
　5　ゴーリキー
　6　アンドレーエフ

年譜
あとがき
初出一覧

本書は、二葉亭四迷の愛弟子・井田孝平が初代校長となり、同じく教え子の清水三三（さんぞう）が教鞭を執ったハルビン学院でロシア語を学んだ著者が、「まがりなりにも二葉亭と一本の糸でつながる後進」（479 頁）として「先達におくる遅まきながらのレクイエム」（10頁）である。二葉亭の著作を深く読みこんだ著者にとってキーワードとなるのは、「決闘眼（はたしまなこ）」であり、「人生は気合だね」、「維新の志士肌」、「いやッといふ声」であって、著者は彼の生涯を熱い思いで追体験している。

本書の最大の特徴は、チェーホフ、ゴーリキー、ツルゲーネフ、ブーニン、ドストエフスキーなどに取り組んできたロシア文学者が書き上げた、最初のまとまった二葉亭研究書という点にある。二葉亭とチェーホフの比較（97、108 －109 頁）や、二葉亭の読んでいたロシアの新聞が反動紙や保守系紙だったこと（186 頁）、二葉亭が翻訳の対象として選んだゴーゴリの『肖像画』は、芸術はどうあるべきかを真剣に問いかける、硯友社文学批判の書であり（332 頁）、アンドレーエフの『血笑記』は、自然主義隆盛期を迎えようとしていた日本の文壇に、その次にくる傾向、即ちモダニズム文学の見本を紹介しようとしたものである（464 －465 頁）という指摘は興味深い。

だが何といっても重要なのは、二葉亭によるベリンスキーの文学理論と、ツルゲーネフ、ゴンチャローフ文学の紹介に関わる箇所である。例えば二葉亭が読んだベリンスキーの論文はこの批評家の思想上の転機以前、即ちヘーゲル流の「現実との和解」時のものであり、それ故二葉亭の理解したベリンスキーに社会批判性があわいこと（206 －207 、231 頁）、『美術の本義』中の術語「神的、絶対的理念」は「神的」であって「神の」の意ではなく、二葉亭はそれを理解した上でこの形容辞を省略したこと（208 －209 、237 頁）、逆に彼の「理念（イデー）」の理解には混乱があったこと（210 頁）等の指摘はロシア文学者ならではのものである。『あひゞき』の改訳では初訳の誤訳が直されているのに対して、『めぐりあひ』の改訳では文法的な誤りが増えているという指摘（381 頁）もおもしろい。とりわけ貴重なのはゴンチャローフに関する記述である。二葉亭自身がゴンチャローフの自らの創作への影響を繰り返し語っているにもかかわらず、このロシア作家の本格的な研究を踏まえた二葉亭論が従来皆無に等しかったからである。二葉亭が明治21年の日記『くち葉集　ひとかごめ』に訳出した『断崖』の断片訳が、主人公ラーイスキーの自由主義漸進論者としての立場を端的に表すという意味で重要であること（305 頁）、明治39年の談話筆記『露西亜文学談』では二葉亭は祖母、ヴェーラ、マルクの三人に的をしぼって、ラーイスキーには触れていないこと（310 頁）は、重要な指摘である。

本書の第二の特徴は、二葉亭の生涯と創作活動がしばしば嵯峨の屋お室のそれとの対比裡に検討されることである。嵯峨の屋が宗教に傾斜して安心立命を得たのに対し、二葉亭は「私は懐疑派だ」と宣言して苦悩のうちに人生を送ったこと（22、55頁）、二人は同時期にベリンスキーの文学理論の翻訳を試みているが、それらを比較すると、「二葉亭が独立した熟語によって原語にそのまま迫ろうとしたのにたいして、矢崎［嵯峨の屋－沢田］は説明的な表現で済まそうとしている」（230 頁）こと、前者が真理を探ろうとしたのに反して、後者にあっては儒教と仏教の教えが真理として既に存在し、その視点からベリンスキーの理論を修正したこと（234 頁）を論証するくだりは読みごたえがある。

本書の第三の特徴は、先行および同時代の二葉亭研究への明確な批判がふんだんに盛り込まれている点にある。中村光夫氏の代表的な二葉亭研究はもとより、日本文学研究者、ロシア文学研究者、そして比較文学研究者の一連の研究の、著者から見た問題点が俎上に載せられる。意見の相違点は明瞭で、むしろ評者はこのような批判の仕方に一種のすがすがしさすら感じる。ともすれば直接的な批判を避けようとするわが国の学界にあって、このような研究態度はもっとあってもいいのではないだろうか。

逆に評者が気になった点もなくもない。例えば『浮雲』の梗概を述べた箇所で、「そのうちお勢もそれ［昇が自分とは結婚する気はないこと－沢田］に気づいてか本田昇に少しずつよそよそしくなる。そして文三に笑顔を見せるようになる。」（43頁）というまとめ方には異論がありうるだろう。また『小説総論』の「張三も人なり、李四も亦人なり．．．」の箇所の解釈が２箇所で矛盾している（214 、229 頁）。さらに二葉亭がロシア文学の「余計者」発生の原因として「ピョートル大帝の大改革」を挙げている点を指摘して、「余計者を生み出す直接の原因として挙げるにはあまりにも時代が遠すぎはしないか。」（406 頁）と著者は述べているが、果たしてそうだろうか。二葉亭の言うとおり「余計者」の発生は、もとをただせば18世紀初頭のピョートル大帝による急激な西欧文明の導入によって近代化した貴族階級の知識人と、文化的鎖国政策をとったモスクワ公国時代の中世農民文化にとどまった民衆の隔絶に起因するものと評者は考える。その他、書き下ろし部分以外はかつて別個に発表した論文をそのまま収録したために、記述の重複が少なからず見受けられること（とりわけ第Ⅰ章と第Ⅱ章に）、本来第Ⅰ章に付けるべき注が第Ⅱ章以降で出てくること、「参考文献」は巻末にひとまとめにしてほしかったこと、ロシア語部分の誤植が数多く見られること（評者が気づいたのは33箇所）は残念である。

以上の点は、しかしながら、本書の価値を決して損なうものではなく、逆に本書の刊行によって二葉亭研究に新たな一石が投じられたことは間違いない。最近は学会の場で著者の姿を拝見することが少なくなった。今後とも後進に対して率直な批判を賜りたいものである。

第3章　B・ピウスツキと日本

ブロニスワフ・ピウスツキと日本

I

ポーランドの革命家にして民族学者ブロニスワフ・オーシポヴィチ・ピウスツキは、1866年11月２日①ロシア領リトワのズーウフという町に生まれた。②1887年、彼のペテルブルグ大学法学部在学中に、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤーノフらがアレクサンドル三世暗殺を計画したが、事前に発覚し、首謀者５名は絞首刑、他の10名は要塞監獄に幽閉、もしくはシベリアへ徒刑となった。この事件にピウスツキも連座し、サハリン島に15年（後に恩赦で10年に減刑）の流刑となった。③

この牢獄の島で彼はギリヤーク、次いで樺太アイヌの言語を習得し、その民族学的調査を行った。刑期を終え「流刑移民」となったピウスツキは、ウラヂヴォストークのアムール地方研究協会の博物館勤務となった。やがてペテルブルグのロシア科学アカデミーからサハリン原住民の資料収集を委嘱され、エジソン発明（1877年）の蓄音機、蠟管（録音、再生に用いる蠟製の円筒）、カメラを携えて再度サハリンに向かった。その折りの貴重な記録をとどめる蠟管の一部が1930年にポーランドはザコパネの彼の元の下宿の屋根裏で発見され、1983年に日本の北海道大学に送られて再生作業にかけられたことは、周知の事実である。ピウスツキはサハリン原住民とその文化の擁護者となり、原住民の子弟のための学校を開設して、ロシア語の読み書きと算数を教えた。彼はアイヌの酋長の姪チュフサンマとの間に一男一女をもうけた。

1905年６月24日、日露戦争による日本軍のサハリン占拠の直前にピウスツキは妻子を残して島を脱出し、極東ロシア、日本、アメリカを経て翌年10月オーストリア領ポーランド（ガリツィア）に帰国した。ここで幼なじみのマリア・ジャルノフスカと事実上の夫婦となった。だがアイヌ研究はヨーロッパで正当に評価されず、学位をもたぬ彼は定職を得ることができないで、困窮生活を余儀なくされた。おまけにマリアが癌で亡くなる。④しかしこのような苦境にあってもピウスツキは民族学研究への情熱を捨てず、失意と貧困のなかで30数編もの著述を書き上げた。

1914年、ピウスツキは第一次世界大戦必至の気配を察してウィーンへ逃れる。ロシア国籍の「流刑移民」である彼は現在「逃亡農民」であり、ロシア軍のガリツィア進駐を恐れたものと思われる。翌年にさらに中立国スイスへ避難し、1917年末にはパリに流れついた模様である。そして1918年５月21日、セーヌ河のミラボー橋のたもとで、彼は水死体となって発見された。失意と孤独と亡命生活に疲れた末の自殺とされているが、死の真相は今なお明らかでない。それは、同年11月に実弟ユゼフ・ピウスツキの指揮下にポーランド

が悲願の独立を達成する、わずか半年前のことであった。樺太アイヌの血を引くピウスツキの孫たちは、日本で健在である。

本論文ではピウスツキの日本滞在について、日露・日ポ関係史の観点から論じてみたい。

II

サハリン時代の1903年７－９月にピウスツキはロシア地理学協会の依頼で、ポーランドの作家で民族学者W・シェロシェフスキと共に北海道白老（しらおい）町を訪れ、北海道アイヌの調査に従事した。調査地が白老町になったのは偶然である。即ち、ピウスツキは函館で白老に住むアイヌ人と出会った。このアイヌ人は一日本人から金儲けの話をもちかけられ、大阪の第５回内国勧業博覧会でアイヌの熊祭りを実演してみせるという契約で妻や隣人と出かけたところ、雇い主は一文も払わずに逃げてしまい、持ち物をすべて売り払って着の身着のまま、食べ物もなしに函館までたどりついたという。立ち往生しているところをピウスツキに巡り合ったわけで、ピウスツキは彼らに弁当や汽車の切符、そのほかを買い与えた。そして彼らと親しくなった機会に、白老へ行くことになったのである。二人が現地アイヌ人の歓待を受けたことは言うまでもない。かくしてピウスツキとシェロシェフスキはアイヌ資料を大量に集めたが、日露の仲が険悪になったので、函館駐在のロシア領事の命により調査は打ち切りのやむなきに至った。この時二人に会ったイギリス人宣教師でアイヌ研究家バチェラーは、後に自叙伝『我が記憶をたどりて』のなかで彼らのことを、「多分露西亜の間者ではなかつたかと思ひます」と書いている。これは信じがたいが、二人の調査活動がスパイの嫌疑をかけられたことをよく物語っている。⑤

III

ロシア人革命家ニコライ・ラッセル、本名スジローフスキイ（1850－1930）は、アメリカに亡命し、その後ハワイに帰化した。彼は、日本に送られたロシア俘虜兵士に革命思想を鼓吹する任務をもって1905年５月に来日し、神戸で日本人正教徒によって発行されていたロシア人俘虜向けの週刊露文新聞『日本とロシア』の記者になった。これを革命宣伝紙に変えていくかたわら、慰問を口実にして日本の７箇所の俘虜収容所を巡回し、ロシア兵と直接話し合った。

ピウスツキは1905年10月初旬に再度来日し神戸に来た。これは、９月５日ポーツマスで日露講和条約が締結された直後の時期にあたる。彼はここでラッセルの事務所を手伝った。サハリンでまず第一にピウスツキを探すようラッセルに忠告を与えたのは、ジェイム

ズ・ダグラスである。このポーランド生まれのイギリス人は、日本軍に投降したポーランド兵を国外に送り出すべく、ポーランド社会党によって日本に送りこまれたものの、後には自分の使命をラッセルにおしつけて姿をくらました人物である。ラッセルはサハリンに政治囚がいることを知っており、いち早くその解放と身柄の引き受けを日本の陸軍省に陳情した。彼らのなかに自分の協力者を得たいという気持ちもあり、第一にピウスツキに白羽の矢が立ったということだろう。

その後ピウスツキは南サハリンに向かい、11月にヴラヂヴォストークへ戻った。そして同月末にヴラヂヴォストークを出発し、翌1906年1月上旬にN・マトヴェーエフと共に函館に来た。函館ロシア領事館生まれのマトヴェーエフは、日本で生まれた最初のロシア人といわれ、新聞、雑誌の編集発行人兼詩人として知られる人物である。

ピウスツキは上京して、1月下旬には東京都心の「函館屋」という商店の二階に居をすえた。⑥この商店は函館の天然氷や牛乳を商い、後にはアイスクリームや洋酒類も置いて、バーの元祖として銀座の名物のひとつとなった。ヴラヂヴォストーク方面のロシア人と取り引きがあり、亡命外国人や旧幕臣が常にたむろしていたという。

一方ラッセルの方は、俘虜工作の目的を半ば達成したものの、俘虜を武装させてシベリアへ送り込むことはできなかった。彼は1月末に長崎へ移った。かの地に続々亡命してくるロシア革命党員の救済のためである。この地にラッセルは居を構えて同志を糾合した。3月中旬から9月まで彼は一時ハワイへ帰ったが、この間他のロシア人たちが4月27日からロシア語の新聞『ヴォーリャ』を発行し始めた。この新聞は沿海州やシベリアの各都市に広がって、争って読まれたという。ピウスツキは東京でこの新聞の協力者をつとめた。そして7月には長崎へ移り、直接彼らの活動を支援した。但し、革命運動に対しては少なからず懐疑的になっていたふしがある。

ピウスツキは在日中国人革命家とも交わりを持った。1906年3月10日、彼は東京都心で宋教仁と会見した。宋は1904年に来日し、雑誌『二十世紀之支那』を発行していたが、翌年8月東京で孫文を総理として中国革命同盟会が結成されると、その幹事として会務を担当した。当時24歳の留学生である。宋の当日の日記には次のように記されている。「また革命の事は一つの方面より手をつけてはならないと［ピウスツキは－沢田］いう。政治的革命だけをやっていたのでは、真の自由はかならず獲得できない、社会的革命だけをやっていても、またかならず真の自由は獲得できない。かならず二者を一緒にやって、はじめて自由の権利は得ることができ、目的を達することができると。」ピウスツキは宋に当時計画中の『ヴォーリャ』のことも話した。もちろん孫文とも会っている。同盟会の機関誌『民報』第4号に『ヴォーリャ』刊行の紹介文が掲載されたが、その材料を伝えたのはピウスツキである。⑦

Ⅳ

1906年初頭、ピウスツキは二葉亭四迷、本名・長谷川辰之助（1864－1909）のもとを訪れた。二葉亭は数多くのロシア文学の作品の優れた翻訳を行い、またロシア文学の強い影響のもとに日本写実主義小説の嚆矢とされる長編『浮雲』を書き上げた。二葉亭は対露政策に関心をもちつづけ、ロシア革命派への関心を強めつつあった折りにピウスツキに出会ったわけで、彼に物心両面で惜しみなく援助を与え、さまざまな人々に引き合わせた。二葉亭はピウスツキについて次のように述べている。「▲現に自分の知つて居る露人中に斯様の人物が一人居る。西比利亜で苦役に服し、今は四十才位でもあらうか、未だ家をなさない。而もアイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。▲さらば御當人はと言へば、嚢中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さえ継げば、夫れで充分だ、ドウしてもアイヌの如き憐むべき人種を保護しなければならぬと考えて居る。▲局外から見れば、実に馬鹿げて居るやうだが、其のあどけない真面目の態度が、吾々の同情を惹く所である。」⑧

まもなくピウスツキは二葉亭を見込んで、革命党の資金づくりのために、ラッセルがハワイに持つ100 エーカーの邸宅農園の売却に協力してほしいと頼んだ。二葉亭は張り切ってピウスツキと共に政界、言論界、教育界の要人を訪ねた。この要人訪問はいずれも不成功に終わったかに見えたが、しかしそれがラッセルの土地売却のためだったというのは名目上のことで、実は日本政府が亡命ロシア革命家をロシア政府に引き渡すつもりかどうかを打診するためのものだったのである。この一事が『ヴォーリャ』の人々の心配の種だった。さて打診の結果はどうだったか。『ヴォーリャ』第６号に次のような編集部の発表が掲載された。「東京その他の日本の地域にいる編集部員が日本の文化界の代表的人物、若干の議員や政治家と行なった多くの話し合いから、日本が政治犯の引き渡しを許さないばかりか、ロシア政府の意を汲んで政治犯を圧迫することもしないという点について、まったく疑いはないことが明らかとなった。」日本の支配層のロシアに対する警戒心はなお強烈で、露国革命党は依然としてひそかな同盟者たる資格を失っていなかったのである。

まもなく二葉亭は革命派の運動に冷淡になっていったが、ピウスツキとの交際は変わりなく続いた。二葉亭は彼の「年を取った小児」のような人柄を愛したのである。ピウスツキに文学の素養があったことも、両者の交遊を途切れさせなかった一因だろう。二人は日本・ポーランド協会を設立し、両国の交流をすすめるために、まず文学の翻訳、紹介を取り上げることにした。ピウスツキは帰国後クラクフでポーランドの代表的作家、批評家に自作の推薦やその露・独・仏・英訳の寄贈を求め、それらを二葉亭に送ってきた。そのうち二葉亭によって訳出されたのは、革命家ポリワーノフの短編小説『志士の末期』、ネモ

エフスキの散文詩『愛』、そして自然主義作家ブルスの『椋のミハイロ』である。一方二葉亭もピウスツキに二つの日本の小説のそれぞれ英語版を送ったが、そのうち木下尚江の長編小説『良人の自白』のみがポーランド語に翻訳された。⑨

V

二葉亭がピウスツキを引き合わせた人物のひとりに横山源之助（1870－1915）がいる。横山は二葉亭らの影響をうけて社会問題に興味をもち、新聞社に入社。以後ジャーナリストとしての生活を続けた。1899年に二冊の名著、『日本の下層社会』と『内地雑居後之日本』を出版した。

1906年の早春、二葉亭とピウスツキが横山の下宿にやって来た。ピウスツキは横山に、「日本の学者は何故日本の舊民族である此のアイヌを閑却してゐるのであらう」と言った。「学者的態度を以て研究するばかりでなく、正義博愛の観念強く、社会的同情を以てアイヌの現状を見てゐたのが日本の学者と異なる所」だった、と横山は書き残している。二葉亭がピウスツキを紹介したのは、ピウスツキのアイヌ研究と横山の下層社会研究に相通ずるものがあると考えたためだろう。さらに横山は続ける。「で、ピ氏自身は革命運動に怖気を立て、革命は好物だが、運動が嫌ひだといつてゐたが、永年西比利亜に漂ひ、革命者に知己が多かつた所から此の無邪気の人も、日本に在留してゐた露国革命党の捲き添となり、日本に在留して長崎と東京との連絡と為つて、革命党の為に民間に運動してゐた」。⑩横山が被差別部落民のことを話すと、ピウスツキは強い関心を示し、すぐに自分で訪ねていった。

横山はピウスツキからの聞き書きで、二つの文章を著した。一つは「露国革命婦人」と題するもので、ナロードニキ、L・ヴォルケンシチェインの一代記である。ヴォルケンシチェインはハリコフ県知事の暗殺に加わったかどで逮捕され、ペテルブルグのシュリッセルブルグ要塞監獄、次いでサハリンへ徒刑となった。刑期を終えてヴラヂヴォストークに移住、そして1906年1月23日、かの地に起こった争乱でヴォルケンシチェインは殺戮されたのである。ピウスツキは彼女とサハリンで同囚だったので、その死を深く感じて横山に話したのだろう。

いま一つの文章は「来遊中の布哇（ハワイ）砂糖王（露国革命党の金主）」と題するラッセルの一代記である。横山は俘虜工作の終わりまでのラッセルの経歴をかなり正確に物語っているが、その前書きと後書きから、ピウスツキがラッセル自身から聞いた談話を横山に伝えたこと、その際二葉亭が両者の通訳をつとめたことが分かる。本論文は、当時の日本の読者に露国革命派の一タイプを提示している。

Ⅵ

ピウスツキは日本の社会主義者とも接触をもった。1906年２月６日、アメリカから帰国した社会運動家・片山潜の歓迎会が開かれたが、その時ピウスツキはこれに出席し、通訳つきでロシア語で演説した。前年に社会主義者の団体「平民社」が解散し、『新紀元』と『光』の二派に分裂してそれぞれ新聞を出すことになったが、後者の集まりにピウスツキは出席したわけである。ピウスツキは帰ってきて、社会主義者の集まりといっても労働者がいないと不思議がったのに対し、二葉亭は「『日本の社会主義は学生の社会主義だ』と説明した」⑪という。ピウスツキはまた二葉亭の紹介で『新紀元』社の面々とも交際し、２月25日に開かれた晩さん会に出席して、一同と写真撮影を行った。

当時、女性の苦しんでいる様々な問題の根本的な解決は社会主義以外にはありえないことを訴え、婦人層を結集しようとする運動が展開されていた。そのスローガンは「婦人解放」であり、特に婦人の政治上の自由の獲得と恋愛の自由（家族制度からの解放）に力点を置いていた。ピウスツキはこのような若い婦人運動家たちとも交際を持った。ピウスツキは帰国後市民大学で日本婦人について公開講演を行った。

Ⅶ

ピウスツキの第二の、そしてアイヌ関係では最初の学術論文が、日本語で日本の雑誌に発表されたことは特筆に値する。即ち、月刊誌『世界』の1906年７、８月号に、「樺太アイヌの状態」という表題で彼自身の撮影による樺太アイヌの写真５葉とともに掲載されたのである。論文の訳者は上田将。ニコライ神学校でロシア語を学び、数多くの正教会の教書等を訳出した人物である。当時は新聞記者をしながら、東京での『ヴォーリャ』の予約購読と広告の受け付けをしていた。「樺太アイヌの状態」は、ポーツマス条約で南サハリンを獲得した日本当局の問い合わせに対する回答という側面をもっていたが、同時にピウスツキとしては、本論文によって日本社会にアイヌ人の悲惨な状態を知らせたかったのだろう。

ピウスツキは日本の民族学者やアイヌ研究家とも積極的に交際を求めた。彼は東京帝国大学理科大学人類学教室で坪井正五郎博士の研究談を傍聴した。ピウスツキの論文「樺太島に於ける先住民」には、坪井博士の説が引用されている。また同大学講師の鳥居龍蔵夫妻とも、ピウスツキは交わりを結んだ。鳥居は彼を東京の貝塚に案内し、また1911年には「樺太島に於ける先住民」をドイツ語版から訳出した。この論文には鳥居の著書『千島アイヌ』（1903）からの引用も見られる。

Ⅷ

ピウスツキは長崎から汽船「ダコタ号」に乗り込み、1906年８月３日に横浜を出港してアメリカのシアトルへと向かった。ピウスツキが結果的に８カ月も日本に滞在したという事実は、彼の日本での居心地の良さを物語るものだろう。恐らく彼は少なからざる物質的、精神的援助を受けていたのであり、その点で二葉亭と上田が果たした役割は大だったろう。それを暗に示すような証言を最後に引用して本報告の締めくくりとしたい。

上述のように、1914年ピウスツキはクラクフからウィーンへと逃れたが、多分その途次であろう、同年６月末に彼はブリュッセルで『新紀元』派の社会主義者・石川三四郎と再会した。石川はピウスツキの離日後社会主義活動のかどで数度にわたって投獄され、1913年に日本を脱出して、８年にわたるヨーロッパ放浪の旅に出た。ブリュッセルで、フランスの地理学者ルクリュ家に落ち着いたのは、1914年晩春のことである。このルクリュ家を、糊口の資を得るためであろう、ピウスツキが訪ねてきたのである。石川の回想は次のとおり。「『わたしはヨーロッパに帰つて来てアイヌ学者として世に立つことになつた。もう革命家はやめた。よい優しい婦人と結婚したのだが、最近その家内に死なれた。』ここまで話して彼［ピウスツキ－沢田］は如何にも淋しさうになり、眼には一ぱい涙を湛えた。そして『再婚してもよいが、私の仕事に理解のある、金持の婦人と結婚したい』と如何にも真じめに、淋しさうに語るのであつた。彼の現在が余り幸福でないことは直に読めた。日本にゐた時は、眼も頬も若さと柔和さとに輝やいてゐたのに、今はその紅潮を湛へた頬の艶も消え失せて、瞳さへ曇りがちに見へる。」⑫ピウスツキがパリで亡くなるのは、この４年後のことである。

注

① 日付は新暦で統一した。

② ピウスツキの家系については、井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキ（二）」（『えうゐ』12、1983年）、幼少年時代については、井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」（『国立民族学博物館研究報告別冊』5、1987年）を参照のこと。

③ アレクサンドル三世暗殺未遂事件については、佐々木照央「アレクサンドル・ウリヤーノフと『人民の意志』党テロフラクション」（『埼玉大学紀要　外国語学文学篇』11、埼玉大学教養部、1977年）を参照のこと。

④ この時点で既にマリアはピウスツキに失望して、彼と合意のもとに別れ、前夫と復縁していた、とする説もある。

⑤ ピウスツキらの北海道調査旅行については、吉上昭三「ブロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後」（『国立民族学博物館研究報告別冊』5）、Утида Ю. Деятельность Б.Пилсудского в Сираой(исследования по записям Б.Пилсудского и рассказам, услышанным в Сираой). В кн.: Б.О.Пилсудский – исследователь народов Сахалина(Материалы международной научной конференции. 31 октября-2 ноября 1991 г. Южно-Сахалинск). т.1, Южно-Сахалинск, 1992. を参照のこと。

⑥ 現在の中央区銀座6丁目の婦人服店「銀座マギー」のある所。

⑦ ラッセルについては、和田春樹『ニコライ・ラッセル　国境を越えるナロードニキ』上・下（中央公論社、1973年）を参照のこと。

⑧ 「露国文学談片」（『二葉亭四迷全集』4、筑摩書房、1985年）。

⑨ ピウスツキと二葉亭の交遊については、安井亮平「二葉亭四迷のロシヤ人・ポーランド人との交渉」（『文学』34－8、1966年8月）、安井亮平翻刻・訳「二葉亭四迷宛ピウスツキ書簡」（『二葉亭四迷全集』別巻、1993年）を参照のこと。

⑩ 横山源之助「真人長谷川辰之助」（『二葉亭四迷　各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐』易風社、1909年）。なお旧漢字は新漢字に改め、ルビは省いた。以下同様。

⑪ ⑩に同じ。

⑫ 石川三四郎「ピルスヅスキイの想ひ出」（『石川三四郎著作集』6、青土社、1978年）。

БРОНИСЛАВ ПИЛСУДСКИЙ И ЯПОНИЯ НАЧАЛА XX ВЕКА

I

Польский революционер и этнограф Бронислав Осипович Пилсудский родился 2-го ноября 1866 года1 в местечке Зулово в Литве, входившей в состав Российской империи. Как известно, в 1887 году народовольцы во главе с Алексадром Ульяновым готовили покушение на императора Александра III. Однако заговор был раскрыт, пять его организаторов повешены, а десять участников заточены в крепость или сосланы на каторжные работы. Студент юридического факультета Петербургского университета, Бронислав Пилсудский был среди этих десяти – 15 лет каторги на острове Сахалин (впоследствии по амнистии срок наказания уменьшился до десяти лет).

На Сахалине Пилсудский овладел языками коренных народностей острова, гиляков и айнов, и проводил этнографические наблюдения. По истечении 10-летнего срока, став ссыльнопоселенцем, он начал работать во Владивостоке в музее Общества изучения Амурского края. Его исследования стали известны в Петербурге и вскоре Императорская Академия наук командирует его на Сахалин для сбора этнографической коллекции аборигенов. И в 1902 году Пилсудский вновь отправляется на остров, взяв с собой фонограф Эдисона2, восковые цилиндры и фотоаппарат. В 1930 году в Польше в Закопане на чердаке бывшей квартиры Пилсудского нашли часть восковых цилиндров с записями песен и сказок айнов, в 1983 году эти восковые цилиндры перевезли в Японию в Университет Хоккайдо, реставрировали, звуковые записи были воспроизведены. На Сахалине помимо сбора этнографического материала, Пилсудский был занят и просветительством среди населения: открывал для детей школы и сам преподавал русскую грамоту и арифметику. Он женился на айнской девушке Чухсаме, родственнице айнского старосты, у них родились сын и дочь.

Во время Русско-японской войны, перед захватом Сахалина японской армией Пилсудский, оставив семью, 24-го июня 1905 года уехал с острова. В октябре следующего года через Дальний Восток, Японию и Америку он вернулся в Галицию, входившую в состав Австро-Венгерской империи. Там он вступил в гражданский брак с подругой своего детства Марией Жарновской. Однако в Европе его айнские исследования не оценили. Без ученой степени Пилсудский не мог найти постоянную

работу и жил в крайней нужде. К тому же его жена Мария умерла от рака. Но несмотря на нищету и личное горе, он не терял страсти к этнографическим исследованиям и написал более 30 работ.

В 1914 году, в преддверии Первой мировой войны, вероятно опасаясь оккупации Галиции русской армией, он переезжает из Кракова в Вену, в следующем году – в нейтральную Швейцарию, а в конце 1917 года – в Париж. 21–го мая 1918 года тело Пилсудского нашли в реке Сена под мостом Мирабо. Это самоубийство объясняют разочарованием, одиночеством и усталостью от эмигрантской жизни, однако полностью загадка его трагической кончины еще не разгадана. Самоубийство произошло всего лишь за полгода до того, как в ноябре этого же 1918 года Польша стала независимым государством во главе с Юзефом Пилсудским, младшим братом Бронислава. В настоящее время потомки Бронислава и айнской женщины Чухсамы живут в Японии.

В предлагаемой статье я хочу рассказать о пребывании Пилсудского в Японии с точки зрения истории российско–японских и польско–японских отношений.

II

В 1903 году Российское географическое общество поручило жившему на Сахалине (1902–1905 гг.) Брониславу Пилсудскому вместе с польским этнографом и писателем В. Серошевским посетить для сбора этнографического материала поселение хоккайдских айнов. Случайно их выбор пал на деревню Сираой, где они пробыли с июля по сентябрь 1903 года. Дело в том, что Пилсудский в городе Хакодатэ на Хоккайдо познакомился с одним айном из Сираой по имени Номура Сибаран. Сибаран заключил договор с неким японским импресарио о том, что будет представлять " медвежий праздник" на 5–ой Всеяпонской выставке в Осаке, привез с собой жену и соседей, однако был обманут импресарио и с трудом добрался до Хакодатэ, продав все свои вещи. Пилсудский встретился с этими попавшими в беду айнами, накормил их, купил билеты на поезд и проч. Таким образом они подружились и Пилсудский решил поехать в Сираой. Нечего и говорить, что они с Серошевским встретили радушный прием и смогли собрать значительную этнографическую коллекцию хоккайдских айнов. Однако надвигалась Русско–японская война и по приказу российского консула в Хакодатэ им пришлось прекратить работу. Английский миссионер и исследователь айнов Дж. Бэчелор, в то время видевший их, позднее записывает в своей автобиографии "Следуя за воспоминаниями":

"Должно быть, они были шпионами Российской империи"3 – т.е. несомненно, что их подозревали в шпионаже.4

Польско-русский революционер Николай Руссель (настоящее имя – Судзиловский, 1850–1930) в 1887 году эмигрировал в США, а позднее получил гражданство Гавайев. В мае 1905 года он приехал в Японию с целью распространения революционных идей среди военнопленных Русско-японской войны. Руссель стал сотрудником еженедельной русской газеты "Япония и Россия", издававшейся японскими православными в городе Кобэ для русских военнопленных. Превращая "Японию и Россию", по сути дела, в газету пропаганды революционных идей, Руссель под предлогом визита соболезнования побывал в 11-ти лагелях для русских военнопленных в Японии.

В начале октября 1905 года, непосредственно после того, как 5-го сентября в Портсмуте был заключен мирный договор между Россией и Японией, Пилсудский снова приехал в Японию в Кобэ и помогал Русселю. Найти на Сахалине прежде всего Пилсудского Русселю посоветовал Джеймс Дуглас. Этот англичанин, уроженец Польши, был послан в Японию Польской социалистической партией для возвращения на родину польских военнопленных, воевавших на стороне России. Однако очень скоро он свалил это поручение на Русселя и скрылся. Руссель знал, что на Сахалине живут политические ссыльные и немедленно обратился в японское военное министерство с просьбой об их освобождении и готовности взять на свое попечение. Полагаю, что он стремился найти среди них соратников, и выбор пал прежде всего на Пилсудского.

Некоторое время спустя Пилсудский отправился на Южный Сахалин, а в ноябре вернулся во Владивосток. По всей вероятности, эта поездка была связана со свободой, дарованной манифестом Николая II от 30-го октября. Известно, что уже 18-го ноября Пилсудский принимает участие в городском собрании жителей Хабаровска, вырабатывает проект создания "рабочего бюро" и с этой целью вносит личное пожертвование в сумме 100 рублей5, а 26-го ноября встречается во Владивостоке с ветераном партии "Народная воля" Тригони.6 Серошевский объясняет деятельность Пилсудского в этот период следующим образом:

"Пилсудский приехал во Владивосток с целью вернуться на родину через Сибирь. Однако революция 1905 года его ужаснула. Человек высокой культуры, он не мог согласиться с бессмысленным кровопролитием и старался повлиять на власти и на революционеров, чтобы удержать обе стороны от насилия и убийств. Однако все оказалось напрасным, кровопролитие продолжалось, а Пилсудский, потеряв авторитет, в отчаянии бежал в Японию".7

Таким образом, он в последний раз отказался от возможности вернуться на родину через европейскую часть Российской империи. В конце того же месяца он выехал из Владивостока и в начале января следующего, т.е. 1906 года приехал в Хакодатэ вместе с Н.П.Матвеевым.8 Матвеев, родившийся в Хакодатэ в семье фельдшера при российском консульстве, известен как первый русский уроженец Японии, редактор газет и журналов, поэт под псевдонимом Амурский.

В конце января Пилсудский устроился в центре Токио на втором этаже магазина " Хакодатэя". Там продавали природный лед из Хакодатэ и молоко, а позже мороженое и иностранные вина. Впоследствии магазин превратился в первый в Японии бар и стал одной из достопримечательностей центра Токио. Хозяин магазина как самурай сёгунского правительства принял участие в возникшем в Хакодатэ сражении с новым правительством Мэйдзи. Магазин имел торговые отношения с русскими во Владивостоке. В нем всегда собирались эмигранты и бывшие вассалы сёгуната.9

Между тем Руссель, наполовину достигнув своей цели относительно военнопленных, не мог вооружить их и отправить в Сибирь. В конце января он поехал в город Нагасаки с тем, чтобы помочь русским революционерам, которые один за другим эмигрировали туда. Обосновавшись там, Руссель объединил вокруг себя единомышленников. Но в середине марта до сентября он на время вернулся на Гавайские острова, и руководителем русской коммуны в Нагасаки на этот период становится Вадецкий, который с 27-го апреля начинает выпускать газету на русском языке под названием "Воля". "Воля" распространялась в городах Приморья и Сибири и была нарасхват. Пилсудский из Токио оказывал газете поддержку. В июле он переезжает в Нагасаки, где поселяется в доме переводчика русского языка по имени Сига Тикатомо10, и непосредственно помогал русским революционерам. Однако думается, что в то время он уже довольно скептически взирал на революционное движение. Продолжая переписываться с Русселем, Пилсудский подробно рассказывает ему о положении дел в "Нагасакской коммуне". Начиная с 11-го номера газеты, редактором "Воли" становится Оржих и в редколлегии появляются разногласия. И Руссель в своем письме к Пилсудскому довольно резко отзывается о "Воле".11

IV

В Японии Пилсудский познакомился и с китайскими революционерами, живущими здесь. 10-го марта 1906 года в Токио он встретился с Сун Цзяо-жэнь. Сун приехал в Японию в 1904 году из Хунань и начал выпускать журнал "Китай 20-го века". В августе следующего года, когда в Токио была создана китайская революционная организация "Тунмэнхой" ("Союз китайских революционеров") во главе с Сунь Ят-сеном, Сун как секретарь управлял делами организации. В то время Суну было 24

года. Он учился в японском Университете Васэда. Суна свел с Пилсудским Миядзаки Тамидзо, второй из братьев Миядзаки, известных своей помощью китайским революционерам. В день встречи с Пилсудским Сун записывает в своем дневнике:

"По словам Пилсудского нельзя приниматься за революционное дело только с одной стороны. Одна политическая революция никак не принесет настоящей свободы. Но и одна социальная революция тоже не принесет настоящей свободы. Только совершив и то и другое, можно получить свободу и достигнуть своей цели."12

Пилсудский рассказал Суну о предстоящем в то время выпуске "Воли". Разумеется, Пилсудский встретился и с Сунь Ят-сеном. 28-го апреля 1906 года в 4-м номере печатного органа "Тунмэнхоя" "Мин бао" ("Народный вестник") было опубликовано переданное Пилсудским сообщение о начале издания "Воли".

Познакомился Пилсудский и с У Жо-нань. Она родилась в Шанхае и получила образование в Женской патриотической школе, где впитала революционные идеи. Спустя некоторое время вместе со старшей сестрой приехала в Японию, где поступила учиться на Высшие женские курсы Аояма на отделение английской литературы и вступила в "Тунмэнхой". Тогда ей было 18 лет. В 32-м номере газеты " Воля" за 5-е июля было опубликовано письмо У к редактору под заглавием " Китайская революционерка". Возможно, письмо было передано Пилсудским. Ведь Пилсудский, будучи поляком, испытывал огромный интерес к борьбе китайцев за национальную независимость.

V

В начале 1906 года Пилсудский посетил японского русиста и знаменитого писателя Хасэгава Тацуносукэ (1864-1909), известный под псевдонимом Фтабатэй Симэй.13 Фтабатэй делал множество превосходных переводов произведений русской литературы и под сильным влиянием русской литературы написал первый японский реалистический роман "Плывущее облако" (1887-1889). Его неизменно интересовала японская политика в отношении России. Фтабатэй познакомился с Пилсудским именно тогда, когда первый проявил повышенный интерес к русским революционерам, и Фтабатэй щедрой рукой оказывал Пилсудскому материальную и духовную помощь, знакомил его с разными людьми. Какие цели преследовал при этом Фтабатэй? Ёкояма Гэнносукэ объясняет их следующим образом:

"Как для Японии необходимо получить Маньчжурию под свое управление, так же важно для России, поддержав партию социалистов, добиться расширения гражданских прав в стране."14

Пилсудский и Фтабатэй встречались почти ежедневно и за короткое время стали

духовно близки друг другу. Фтабатэй записывает о Пилсудском:

"Действительно среди моих знакомых русских есть такой человек. Он был на каторжных работах в Сибири. Теперь ему, видимо, лет сорок, но он еще не признан в своем кругу. Помощь айнам он считает важнейшей обязанностью своей жизни, зачем и приехал в Токио. Однако японское общество отнеслось к нему с такой холодностью, что он был, кажется, сильно возмущен.

О нем самом можно сказать, что часто его карманы пусты, одет он скромно и в еде неразборчив, привык довольствоваться очень малым. Но несмотря на это думает, что надо обязательно покровительствовать такой бедной нации, как айны.

Со стороны это кажется крайней глупостью, но его наивные и серьезные намерения вызывают сочувствие."15

Вскоре Пилсудский доверительно попросил у Фтабатэя помощи в продаже 100-акровой плантации Русселя на Гавайских островах для создания денежного фонда русских революционеров. Фтабатэй вместе с Пилсудским с удовольствием посещал значительных лиц в политическом, журналистском и педагогическом кругах Японии. Но визиты окончились безрезультатно. Впрочем продажа плантации Русселя – это был отчасти предлог посещений, а настоящая цель состояла в том, чтобы узнать, выдаст ли японское правительство русских революционных эмигрантов русскому правительству. Именно этот вопрос волновал людей группы "Воля". Что же они выяснили? В 6-м номере "Воли" было опубликовано заявление В. Горвица "От редакции":

"Из многочисленных бесед, которые пришлось вести членам нашей редакции в Токио и других местах Японии с лучшими представителями японского интеллигентного общества, некоторыми депутатами и государственными деятелями, для нас вполне выяснилось, что не может быть ни малейшего сомнения в том, что Япония не допустила бы не только выдачу политических эмигрантов, но и какие бы то ни было стеснения их в угоду русскому правительству."16

Настороженность японского господствующего класса в отношении России была все еще велика и русская революционная группа оставалась его тайным союзником. Кроме того, позиция кабинета министров во главе с Сайондзи в отношении деятельности социалистов была достаточно гибкой. Так, например, в феврале того же года кабинет официально признал образование Японской социалистической партии. Вот в таких политических условиях существовала и действовала группа "Воля".

Через некоторое время постепенно Фтабатэй стал охладевать к революционному движению, но его общение с Пилсудским не прекратилось. Фтабатэй видел в нем " старое дитя" и за это любил. Когда Пилсудский решил вернуться в Европу, "он сразу же пришел к Фтабатэю и, бросившись внезапно к нему, этот взрослый мужчина в 80 кг весом залился долгожданными слезами радости".17 Кроме того, не стоит забывать

и о литературной подготовке Пилсудского. Они организовали Польско-японское общество и решили прежде всего познакомить друг друга с литературой своей страны, что способствовало бы развитию отношений между обеими странами. Вернувшись в Галицию в Краков, Пилсудский попросил ведущих польских писателей и критиков собрать для него русские, немецкие, французские и английские переводы их произведений, которые затем послал Фтабатэю. Три из них тот перевел с русского языка на японский: это рассказ П. С. Поливанова "Кончился", стихотворение в прозе А. Немоевского "Люблю" и рассказ Б. Пруса "Михалко".18 В рассказе "Кончился" дано мрачное описание душевного состояния заключенного в петербургскую тюрьму человека, отдавшего всего себя революционной борьбе, юноши, одержимого тягой к подлинной справедливости. "Люблю" представляет собой воспевание в символической манере духовного мира революционера. Рассказ "Михалко" занимает среди переводов Фтабатэя место произведения, описывающего жизнь отверженных, низов общества – бездомных и голодных людей. Все три названных произведения Фтабатэй опубликовал в журнале активистки женского движения Фукуда Хидэко "Сэкай Фудзин" ("Женщины мира"). Этот журнал уже стал чем-то вроде официального органа Польско-японского общества. Позднее Фукуда в своем некрологе Фтабатэя писала:

"Поскольку он с пониманием и сочувствием относился к трудностям моего журнала, то продолжал публиковать свои переводы в этом журнале."19

Однако Фукуде следовало бы признать и кое-что еще, порой противоположного порядка. Дело в том, что опубликование в журнале сокращенного перевода второй половины рассказа "Кончился", чернового (незавершенного) варианта стихотворения "Люблю" и отрывка без окончания рассказа "Михалко" позволило оценить публикации как легковесные, зависимые от прихотей переводчика. А Фтабатэй в свою очередь послал Пилсудскому два английских перевода новой японской прозы, из которых тот перевел на польский язык роман Киносита Наоэ "Рёдзин но дзихаку" ("Признание мужа"). В 1908 году Фтабатэй посетил Петербург в качестве специального корреспондента газеты "Асахи" и встретился там с Марией. Однако свидеться с Пилсудским ему не удалось.20 В следующем году Фтабатэй по пути домой скончался. Пилсудский написал некролог-статью о нем, однако, вышло ли это в свет, неизвестно.21

VI

Фтабатэй познакомил Пилсудского и с Ёкояма Гэнносукэ (1870–1915), который, заинтересовавшись социальными проблемами под влиянием Фтабатэя, поступил работать в газетное издательство. Занимаясь журналистикой, в 1899 году Ёкояма написал две знаменитых книги "Низшие слои японского общества" и "Япония после

открытия страны для иностранцев". В своих произведениях Ёкояма рассказывал широкому читателю о значении реставрации Мэйдзи, о формировании в Японии промышленной олигархии и ее социально-экономической ориентации, о влиянии на общество индустриальной революции, о жизни обездоленных, о зарождении и социальном положении рабочего класса.

Ранней весной 1906 года Фтабатэй привел Пилсудского к Ёкояме на квартиру. И конечно, Пилсудский не мог не спросить:

"Почему японские ученые игнорируют айнов, древнюю нацию Японии?"

Ёкояма записывает:

"Пилсудский отличается от японских ученых тем, что видит в айнах не только предмет научного исследования; в его отношении к современному состоянию айнов сильно чувство специальной справедливости и гуманности."

Фтабатэй познакомил Пилсудского с Ёкоямой, поскольку, видимо, нашел общее между изучением айнов Пилсудским и изучением Ёкоямой низших слоев японского общества. Далее Ёкояма продолжает записи:

"Сам господин Пилсудский стал побаиваться революционного движения и говорит, что революцию любит, а движение – нет. Однако поскольку он долгое время скитался по Сибири и знает многих революционеров, то этот наивный человек был вовлечен в группу живущих в Японии, он осуществляет связь между Нагасаки и Токио, а также многое делает для поддержки в народе русских революционеров."22

Когда Ёкояма рассказал Пилсудскому о "дне" японского общества, тот был сильно взволнован и сразу же посетил эти жилища. Как представитель угнетенного польского народа, он чувствовал свою близость к айнам и дискриминируемым отверженным.

После разговоров с Пилсудским Ёкояма написал две статьи. Одна из них – краткая биография народницы Людмилы Волкенштейн "Русская революционерка".23 Волкенштейн была арестована за участие в убийстве харьковского губернатора, заключена в Шлиссельбургскую крепость, а потом сослана на каторгу на Сахалин. По отбытии срока она переселилась во Владивосток, где и была убита во время происходивших там волнений 23-го января 1906 года. Поскольку Пилсудский жил с ней рядом одно время на Сахалине, а в 1905 году встречался в Японии, куда та ненадолго приезжала, то он, видимо, глубоко потрясенный известием о ее смерти, рассказал о Волкенштейн Ёкояме.

Другая статья Ёкоямы – краткая биография Русселя, названная "Сахарный король, посетивший Японию (Меценат русских революционеров)".24 Ёкояма весьма точно описывает жизненный путь Русселя вплоть до его попытки революционизировать русских военнопленных, а предисловие и послесловие статьи свидетельствуют, что Пилсудский сообщил Ёкояме то, что рассказывал сам Руссель, в том числе и то, что

Фтабатэй работал у них в качестве переводчика. Можно сказать, что статья представляла читателям тогдашней Японии тип русского революционера.

VII

Пилсудский познакомился и с японскими социалистами. 6-го февраля 1906 года в Токио состоялся прием в честь японского общественного деятеля Катаяма Сэн, только что вернувшегося из Америки. Пилсудский был приглашен и выступал с помощью японского переводчика. В 1905 году общество японских социалистов " Хэйминша" ("Народное общество") распалось на две группировки и каждая из них начала издавать свою газету: "Син кигэн" ("Новая эра") и "Хикари" ("Свет"). На собрании второй группы и присутствовал Пилсудский. Во время этой встречи жена известного японского социалиста Котоку Сюсуй – Тиёко подарила Пилсудскому шелковый платок с ее собственным рисунком сливового дерева.25 Пилсудский был удивлен тем, что на собрании социалистов не было рабочего, Фтабатэй объяснил ему: " Японский социализм – это студенческий социализм".26 А социалист Сакай Тосихико записывает, что Пилсудский одобрил брак с представительницей другой расы.27 Кроме того, Пилсудский по рекомендации Фтабатэя общался и с членами общества " Новая эра". 25-го февраля 1906 года он был гостем на их банкете и вместе с ними сфотографировался.28 По возвращении в Европу Пилсудский написал статью " Встреча с японскими социалистами". Вместе с фотографиями статья была отдана в редакцию газеты "Товарищ", однако, увидели ли они свет, неизвестно.29

Благодаря Пилсудскому Фтабатэй в феврале того же года сблизился с Фукуда Хидэко. Дело в том, что в первые же послевоенные годы в Японии формируется женское движение. Его программа основана на том, что коренное решение всевозможных женских вопросов невозможно без социализма. Лозунгом этого движения было "освобождение женщин", в частности завоевание женщинами политических свобод и свободы любви (освобождение от пут брака). Пилсудский познакомился с молодыми активистками женского движения.

VIII

Матвеев издавал во Владивостоке еженедельный журнал "Природа и люди Дальнего Востока [Восточная неделя]" с 29-го января по 30-е июля 1906 года (по старому стилю). В этом журнале была опубликована серия репортажей Пилсудского под общим заголовком "Из Японии". В статье в 8-м номере журнала сообщается о неурожае в северных префектурах острова Хонсю и о том, что для помощи пострадавшим были устроены сборы пожертвований и ряд благотворительных

концертов. Далее Пилсудский делится впечатлениями об одном из этих концертов и особенно отмечает изящное исполнение на рояле г-жой Тачибана "Баллады" Шопена и замечательное исполнение г-жой Фуджии романсов Баха, Франца и Брэча.30 Благотворительный концерт, о котором пишет Пилсудский, был устроен 11-го февраля 1906 года в Токийском музыкальном училище (ныне Токийском художественном университете) по инициативе студентов Университета Васэда – уроженцев пострадавших префектур.

"Г-жа Фуджии", похваленная Пилсудским, – это Фуджии Тамаки (1884–1946), которая в то время училась на высших курсах по классу вокала и одновременно преподавала пение в качестве ассистентки.31 Или, может быть, лучше сказать, что это будущая Миура Тамаки, 2000 раз в течение 20-ти лет исполнявшая партию героини в опере Пуччини "Мадам Баттерфляй" на сцене многих театров мира. В то время Тамаки был 21 год. О ней Пилсудский пишет:

"... если бы она согласилась поехать в Европу, то я уверен, что она приобрела бы там своим пением популярность и всеобщее признание."32

Конечно, Пилсудский никак не мог знать, что через 9 лет Тамаки с успехом будет дебютировать в Лондоне в оперном театре. Однако можно сказать, что его слова прекрасно предсказали блестящее будущее певицы.

Другой исполнительницей, "г-жой Тачибана", была Тачибана Итоэ (1873–1939), профессор по классу фортепиано в Токийском музыкальном училище. Она занималась под руководством русского немца, философа и музыканта Р. Кебера.33 Кроме того, Итоэ писала стихи. Ее "танка" (краткое стихотворение размером в 5–7–5–7–7 слогов) проникнуты ощущением кризиса бытия и самоотрицанием. Итоэ прожила всю свою жизнь незамужней.

В "Рукописях Б. Пилсудского", хранящихся в Кракове в библиотеке Польской Академии наук, есть два письма Итоэ к Пилсудскому. Одно из них (от 20-го февраля 1906 года) – ответ Итоэ на благодарственное, полное восхищения ее игрой письмо Пилсудского – ответ, исполненный скромностью.34 Но надо сказать, что это была ее истинная скромность: скромность характера и строгость во взглядах на музыку. В то время Кебер преподавал философию в Токийском имперском университете, вел класс фортепиано и теории музыки в Токийском музыкальном училище, а также русский язык в Токийском институте иностранных языков. Через 7 месяцев после этого концерта Кебер ушел с должности преподавателя в институте35 и можно предположить, что Пилсудскому предложили эту должность, но он отказался от этого предложения.36

Из другого письма Итоэ от 27-го февраля 1906 года становится ясно, что Пилсудский вслед за первым послал ей второе письмо с просьбой о фотографии.37 Это была, должно быть, нежелательная просьба для Итоэ, не любившей

фотографироваться. По содержанию этого письма также видно, что Пилсудский по первоначальному плану намерен был оставить Японию раньше.

Как было выше указано, Пилсудский неоднократно встречался с "новыми женщинами" и, судя по его вопросам к ним, оценивал их деятельность положительно в отличие от Кебера. Вероятно, разносторонняя одаренность Итоэ рисовала Пилсудскому совсем другую женщину, и потому крайне скромное содержание ее ответного письма было для нее неожиданным. Однако заочное знакомство с Итоэ позволило увидеть женщину традиционного склада мысли и консервативного поведения, даже самоотрицания. В этом смысле переписка с Итоэ послужила Пилсудскому драгоценным материалом для понимания японских женщин. По возвращении в Галицию он прочитал открытую лекцию о положении женщин в Японии38 и написал статью "Японские женщины". Пилсудский вместе с фотографиями послал ее в редакцию журнала "Вестник знания", однако они, видимо, не вышли в свет.39

IX

Особо следует отметить, что в японском еженедельном журнале "Сэкай" ("Мир") за июль и август 1906 года Пилсудским была опубликована его первая научная статья по проблемам айнов "Состояние сахалинских айнов" вместе с 5-тью фотографиями, сделанными автором.40 Статью перевел Уэда Сусуми (или Сусуму). Он изучал русский язык в Православной духовной семинарии в Токио41 и переводил множество документов православной церкви. В то время Уэда работал журналистом и принимал в Токио подписку на "Волю" и заявки на размещение в ней рекламы. В ноябре того же года он переводил беседу Сунь Ят-сена с Герщуни, одним из лидеров Партии социалистов-революционеров.42 Пилсудский написал "Состояние сахалинских айнов" как ответ на запрос японского правительства, получившего Южный Сахалин по Портсмутскому договору, но вместе с тем своей статьей он, по всей вероятности, хотел привлечь внимание японского общества к ужасному положению айнов.

Пилсудский стремился к активным контактам с ведущими японскими этнографами и исследователями айнов. Он беседовал с доктором и профессором кафедры антропологии Токийского имперского университета Цубой Сёгоро. В статье " Аборигены Сахалина" Пилсудский ссылается на теорию Цубоя. Кроме того, он познакомился с преподавателем той же кафедры Тории Рюдзо. Тории сопровождал Пилсудского к кургану в Токио, а в 1911 году опубликовал в японских журналах перевод статьи Пилсудского "Die Urbewohner von Sachalin". В этой статье приведены цитаты из книги Тории "Тисима аину" ("Курильские айны", 1903).

Взаимная привязанность возникла у Пилсудского и с женой Тории – Кимико. Когда

в марте 1906 года Кимико уезжала в Монголию, приглашенная на преподавательскую работу в придворную школу Каратин, Пилсудский провожал ее и при расставании подарил ей свою фотографию.43 Кимико была специалистом монгольского языка и часто помогала мужу в работе с монгольскими и маньчжурскими источниками.

Есть основания полагать, что во время пребывания в Японии Пилсудскому предложили остановиться в доме доктора филологических наук, председателя " Общества просвещения аборигенов Хоккайдо" Оябэ Дзэнъитиро и заниматься айнскими исследованиями.44 Дело в том, что профессор Оябэ первым в Японии открыл коммерческую школу для айнских жителей и сам преподавал в этой школе. Известно также, что Пилсудский переписывался с первым председателем Ассоциации врачей Хоккайдо Сэкиба Фудзихико, учеными–айноведами Мурао Мотонага и Дзимбо Котора.45

X

Итак, 29–го июля 1906 года Пилсудский сел в Нагасаки на американский пароход " Дакота", который 3–го августа через Ёкохаму отплыл в Сиэтл на западном побережье США.46 Япония была для возвращавшихся из Сибири и сахалинской каторги ссыльных не более, чем экзотическими островами на пути освобождения из мест заключения. Однако думается, что восьмимесячное пребывание Пилсудского в Японии было не таким тяжелым, как его предыдущая, да и последующая жизнь. По всей вероятности, он получал значительную материальную и духовную поддержку, в чем ему во многом помогали Фтабатэй и Уэда. В заключение приведу цитату, косвенно подтверждающую это мое предположение.

Как было уже указано, в 1914 году Пилсудский выехал из Кракова в Вену. Вероятно в ходе этой поездки, в конце июня в Брюсселе он снова увиделся с японским социалистом группы "Новая эра" Исикава Сансиро.47 Эта встреча произошла случайно, когда Пилсудский, видимо, с целью найти средства к существованию посетил французского географа Реклю, в доме которого в это время обосновался после многомесячных скитаний Исикава. В воспоминаниях Исикавы так записаны слова Пилсудского:

""По возвращении в Европу я начал заниматься исследованием айнов. А деятельность революционера прекратил. Женился на хорошей, доброй женщине, но недавно жена умерла." Когда он[Пилсудский – К.С.] сказал это, то ему стало так грустно, что на глазах навернулись слезы. Немного погодя он очень серьезно и грустно добавил: "Можно жениться опять, но желательно – на богатой женщине, понимающей мою работу." Сразу стало ясно, что сейчас он не очень счастлив. Во время пребывания в Японии его глаза и щеки искрились молодостью и нежностью, а

теперь его румяные щеки поблекли и даже глаза потускнели."48

Через 4 года после этой встречи Пилсудский закончил свою жизнь в Париже.

ПРИМЕЧАНИЯ

1. Все даты, кроме специально оговоренных, приводятся по новому стилю.

2. Т. Эдисон (Edison) изобрел фонограф в 1877 году.

3. Джон Бэчелор(John Batchelor). Вага киоку о тадоритэ (Следуя за воспоминаниями). Автобиография Джона Бэчелора. Саппоро, "Бунрокуппа", 1928, с.289. Здесь и далее перевод с японского языка на русский выполнен мною.

4. Об экспедиции Пилсудского на Хоккайдо см.: Ёсигами Сёдзо. Бронислав Пилсудский после поездки на Хоккайдо. Специальное издание научного отчета Государственного этнографического музея, № 5, 1987, с.81–97, а также – Утида, Ю. Деятельность Б. Пилсудского в Сираой (Исследования по записям Б. Пилсудского и рассказам, услышанным в Сираой). В кн.: Б. О. Пилсудский – исследователь народов Сахалина (Материалы международной научной конференции. 31 октября – 2 ноября 1991 г., Южно–Сахалинск), т. I, Южно–Сахалинск, 1992, с.71–76.

5. Письмо Н. Блударова к Пилсудскому от 8–го ноября 1905 года (по старому стилю). Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, t.1, p.10.

6. Тригони, М. После Шлиссельбурга. Былое, № 9, 1906, с. 52.

7. Sieroszewski, Wacław. Bronisław Piłsudski. Rocznik Podhalański, 1921, s.21.

8. Два редких гостя. Газета "Хоккай таймусу" ("Североморское время"), 10–е января 1906 г.

9. Ногути Коити. Пилсудский и Хакодатэя на Гиндзе (главной улице Токио). Вечерний выпуск газеты "Хоккайдо", 12–е декабря 1985 г., с. 7.

10. Об этом человеке см.: Савада, К. Краткая биография Сига Тикатомо. В сб.: Совместные исследования. Россия и Япония. Токио, "Наука", 1990, с. 39–49. В настоящей статье принят японский порядок написания имен и фамилий японцев, т.е. на первом месте – фамилия, на втором – имя.

11. Письмо Н. Русселя к Пилсудскому от 24–го июня 1906 г. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, pp. 61-62.

12. Вада Харуки. Народник Н. К. Руссель, т. II, Токио, "Тюокоронша", 1973, с. 190.

13. Созвучно "кутабаттэ симаэ", т.е. "чтоб тебя черт побрал", выражение, которое он часто повторял в свой адрес.

14. Ёкояма Гэнносукэ. Настоящий человек Хасэгава Тацуносукэ. В кн.: Фтабатэй Симэй в воспоминаниях современников. Токио, "Экифуша", 1909, с. 218.

15. Фтабатэй Симэй. Краткий рассказ о русской литературе. Полн. собр. соч., т. IV, Токио, "Тикума сёбо", 1985, с. 205–206.

16. Воля, № 6, 7–е мая 1906 г., с. 4.

17. Ёкояма. Указ. соч., с. 219.

18. Andrzej Niemojewski. Kocham (1896). Bolesław Prus. Michałko (1880). Фтабатэй перевел эти произведения с русского перевода, сделанного женой Пилсудского Марией.

19. Фукуда Хидэко. Смерть Фтабатэя. Женщины мира, № 37, июнь 1909 г., с. 1.

20. О дружбе Фтабатэя с Пилсудским см.: Ясуи Рёхэй. Общение Фтабатэя с русскими и поляками. Журнал "Бунгаку"("Литература"), Токио, № 34–8, август 1966 г., с. 22–30, а также – Письма Пилсудского к Фтабатэю. Фтабатэй. Полн. собр. соч., VIII (специальный), 1993, с. 114–164.

21. Бронислав Пилсудский. "Дорогой Лев Яковлевич..." (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893–1917 гг.). Южно–Сахалинск, Сахалинский областной краеведческий музей, 1996, с. 255, 257.

22. Ёкояма. Указ. соч., с. 216, 217.

23. Журнал "Дзёгаку сэкай" ("Мир школьниц"), Токио, 1906, № 6–5, с. 131–137.

24. Журнал "Сёгёкай" ("Коммерческий мир"), Токио, 1906, № 5–4, с. 231–234; № 5–5, с. 308–314.

25. Прием в честь господина Катаяма Сэна. Хикари, Токио, № 1–7, 20–е февраля 1906 г.

26. Ёкояма. Указ. соч., с. 217.

27. Сакай Тосихико. Редкий гость из Польши. Журнал "Катэй дзасси"("Семейный журнал"), Токио, № 4–3, 1906, с. 32.

28. Собрание "Новой эры". Новая эра, Токио, № 6, 10–е апреля 1906 г.

29. Пилсудский. Указ. соч., с. 236.

30. К сожалению, это имя нам осталось неизвестно.

31. Общий обзор Токийского музыкального училища за 1905–1906 гг. 1906, с. 68, 69.

32. Природа и люди Дальнего Востока [Восточная неделя], № 8, 19–е марта 1906 г., с. 6.

33. Об этом человеке см.: Иванова, Г. Д. Тридцать лет в Японии. В кн.: Русские в Японии XIX – начала XX в. М., "Восточная литература", 1993, с. 130–142.

34. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4648, pp.2-3, 33.

35. Общий обзор Токийского института иностранных языков за 1905–1906 гг. 1905, с. 19.

36. Письмо Пилсудского к Фтабатэю от 24–го октября 1907 г. (по старому стилю). Фтабатэй. Полн. собр. соч., т. VIII (специальный), с. 145.

37. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4648, pp.4, 34.

38. Письмо Пилсудского к Фтабатэю от 10–го мая 1907 г. (по старому стилю). Фтабатэй. Полн. собр. соч., т. VIII (специальный), с. 130.

39. Пилсудский. Указ. соч., с. 236, 253.

40. Пилсудский. Карафутоаину но дзётай (Состояние сахалинских айнов). Сэкай,

Токио. № 26. июль 1906 г., с. 57–66; № 27, август 1906 г., с. 42–49.

41. Эта семинария была основана архимандритом Николаем Японским (Иоан Дмитриевич Касаткин, 1836–1912) в 1875 году.

42. Вада. Указ. соч., с. 156–157, 206.

43. Письмо Тории Кими [Кимико] к Пилсудскому. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, t.2, p.6.

44. Карточка Оябэ Дзэнъитиро. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, t.2, p.81.

45. Письмо Сэкиба Фудзихико к Пилсудскому от 20-го февраля 1906 г. (на немецком языке). Открытка Мурао Мотонага к Пилсудскому от 29-го марта 1906 г. Конверт письма Дзимбо Котора к Пилсудскому. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4648, pp. 37-39, 1, 17.

46. Выезд русских революционеров. Газета "Тоё хинодэ" ("Восточный восход солнца"), Нагасаки, 31-е июля 1906 г.

47. После отъезда Пилсудского из Японии Исикава Сансиро был несколько раз заключен в тюрьму за революционную деятельность, а в 1913 году покинул Японию и 8 лет скитался по Европе. Поздней весной 1914 года Исикава поселился в Брюсселе в доме французского географа Реклю.

48. Исикава Сансиро. Воспоминания о Пилсудском. Собр. соч., т. VI, Токио, " Сэйдоша". 1978, с. 279–284.

ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本
── 東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に ──

沢 田 和 彦

はじめに

ポーランドの革命家にして民族学者ブロニスワフ・ピウスツキは、1866年11月2日[1]にロシア領リトワのズーウフという町に生まれた。1887年、ペテルブルグ大学法学部在学中にロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座し、サハリン島に15年(後に恩赦で10年に減刑)の流刑となった。この牢獄の島でピウスツキはギリヤークと樺太アイヌの言語を習得し、その民族学的調査を行った。刑期を終えた彼は、ウラジヴォストークのアムール地方研究協会の博物館勤務となる。やがてペテルブルグのロシア科学アカデミーからサハリン原住民の資料収集を委嘱され、エジソン発明の蓄音機、蠟管(録音、再生に用いる蠟製の円筒)、カメラを携えて再度サハリンに向かった。ピウスツキは原住民とその文化の擁護者となり、アイヌの酋長の姪チュフサンマとの間に一男一女をもうけた。

1905年6月、日露戦争による日本軍のサハリン占拠の直前にピウスツキは妻子を残して島を脱出し、極東ロシア、日本、アメリカを経て翌年ガリチア(オーストリア領ポーランド)に帰った。1905年10月初旬から翌年8月3日まで、途中一月半の極東ロシア訪問を除く約8ヵ月間の日本滞在中に、彼は神戸、函館、東京、長崎を訪れて、亡命ロシア人革命家、中国人革命家、作家の二葉亭四迷、ジャーナリスト横山源之助、日本の政界、言論界、教育界の要人、社会主義者、民族学者やアイヌ研究家など実に多くの人々と多様な関係を持った。

ヨーロッパでは、しかしながら、アイヌ研究は正当に評価されず、学位をもたぬピウスツキは定職を得ることができないで、困窮生活を余儀なくされた。1914年、彼は第一次世界大戦必至の気配を察してウィーンへ逃れる。さらに中立国スイスへ避難し、パリに流れつく。そして1918年5月21日、セーヌ河のミラボー橋のたもとで水死体となって発見された。失意と孤独と亡命生活に疲れた末の自殺とされているが、死の真相は今なお明らかではない。それは、実弟ユゼフ・ピウスツキの指揮下にポーランドが悲願の独立を達成するわずか半年前のことであった[2]。

本稿ではピウスツキの日本滞在中の一エピソードとして、彼と東京音楽学校の女流音楽家たちとの関わりを取り上げてみたい。

I

ピウスツキはマトヴェーエフがウラジヴォストークで発行していた雑誌『極東の自然と人々』に「日本より」という記事を連載している。

ニコライ・ペトローヴィチ・マトヴェーエフ（1865または1866-1941）は、大庭柯公（おおばかこう）によれば「日本［箱館ロシア領事館］で生まれた最初の露国人」で、ウラジヴォストークでカデット党員として革命運動に加わり、市議会議員などを務めるかたわら、印刷・出版業に携わり、「ニコライ・アムールスキイ」のペンネームを持つ詩人でもあった。1919年に日本に亡命し、大阪でロシア語書籍の印刷・出版業、次いで神戸でロシア語書籍商を営んだ[3]。

1893-1898年の間にピウスツキはアムール地方研究協会の会員だったマトヴェーエフと手紙のやりとりをしていた。刑期を終え、1899年にギリヤークの青年エンディンを連れてウラジヴォストークにやって来たピウスツキは、はじめコレイスカヤ（ポグラニーチナヤ）通りの財閥ツィムメルマンの家に仮寓し、次いでアブレクスカヤ通り9番のマトヴェーエフ家に居を定めた。この家は偽造パスポートを所持していた多くの革命家の隠れ家となり、ここでボリシェヴィキの地下活動の秘密の会合がもたれた[4]。マトヴェーエフの詩「自然の継子（Б. О. ピウスツキに捧げる）」は、サハリン原住民に対するピウスツキの愛と、彼とエンディンの歩んだ苦難の道のりを詠ったものである[5]。

クラクフのポーランド科学アカデミー図書館手稿部所蔵の「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に、マトヴェーエフがピウスツキに宛てた手紙が2通残っている。一通は1905年11月13日付[6]でウラジヴォストークから発送したもので、雑誌（『極東の自然と人々』のことだろう）を翌年1月1日頃に発刊する予定のこと、近日中に自分が日本に出かけること、金が集まれば雑誌専用の小さなタイプライターを買い、集まった小額の金で雑誌用の印刷資材と鉛版と絵画を買うつもりでいること、印刷資材は既に日本で注文してあること、自分の事業が軌道に乗ればピウスツキも気に入った仕事を恒常的に期待していいこと、もし自分の不在中にウラジヴォストークに来るのであれば自分の事務所に居住し、仕事をするよう勧めている[7]。

もう一通は日付は不明だが、内容からして第一信からほど遠からぬ時期に書かれたものと思われる。これは次のような『極東の自然と人々』誌のプランを伝えたものである。

1）極東諸国の歴史、民族学、日常生活に関わる論文。
2）極東の国家・社会・その他の活動家たちの伝記。
3）これらの国々の旅行記。
4）学術と芸術のニュース。
5）短編小説とルポルタージュと詩。
6）雑報欄。
7）編集局の回答。
8）広告。
9）本文への挿絵。
年間予約購読料　送料別で8ルーブル、送料込みで9ルーブル（4646、t. 2：55）

これら2通の手紙から、マトヴェーエフとピウスツキが親密な関係にあり、前者が後者に援助の手を差しのべていたこと、マトヴェーエフが雑誌発刊前からピウスツキを執筆陣の一員として念頭に置いていたことが分かる。一通目の手紙がきっかけになったのであろ

う、1906年1月初頭、ピウスツキがウラジヴォストークから再度来日した時はマトヴェーエフと一緒だった[8]。

II

雑誌『極東の自然と人々［東洋週報］』は1906年1月29日[9]に創刊号が発行された。「極東」とは、本雑誌の定義によれば中国、日本、朝鮮、満州、アムール河中・下流域を意味する[10]。本誌は毎週コンスタントに出続けるが、同年7月30日発行の第27号でストップする。この雑誌の全体的概観と発行停止の事由については別稿に譲る。

マトヴェーエフがピウスツキに事前に手紙で依頼したことは実現した。『極東の自然と人々』には後者の記事がいくつか見受けられる。連載ものとしては「日本人支配下の南サハリン」（第4－5号、2月19日、26日発行）と「日本より」（第4－5、7－10、14－15、20－21、23－24号）、その他に「モンゴルの覚醒」（第21号、6月18日）、またこれは筆者不明だが「異民族のなかのБ. О. ピウスツキ」（第24号、7月9日）という記事もある。署名はおおむね「Б. П.」もしくは「Б.」となっている。但し「日本より」の第4号と第23号は無署名だが、いずれもピウスツキの手になるものとみなしておく。なお第5号の「日本より」は神戸で発行されていた週刊露文新聞『日本とロシア』からの転載記事であり、第15号の署名「Б. Р.」は「Б. П.」の誤植だろう[11]。その他に第1号所載の「日本の原住民たちーアイヌ」と題した写真や、第2号所載の「アムール河中・下流域地方の原住民たちーイマン川のゴリド人たち」という写真は、ピウスツキが撮影したものかもしれない。

「日本人支配下の南サハリン」は文字どおり、ポーツマス条約によって日本領となった南サハリンのその後の状態を伝えたものである。ロシアが北サハリンを流刑地としていることに日本が危惧を抱いていること、サハリンに派遣された移住・植民問題の専門家・熊谷（くまがい）氏［樺太民政署長官・熊谷喜一郎］とその視察団に加わった鈴木［於兎平］氏の東京帰還が待たれること、もう一人のサハリンの専門家でコルサコフ哨所の最後の副領事だった野村［基信（もとのぶ）］氏が東京に戻ったこと、サハリンの漁区借用の入札に多くの素人の日本人が集まり、借用料を大幅に釣り上げたこと、娼家や芸者をおいた茶屋も出現したこと、地名の多くが変更になったことが述べられている。

「モンゴルの覚醒」では、現在東京の中国人向けの特殊学校「振武学堂」でモンゴルの王のひとりトルハト王が学んでいること、最近「華人青年会」が王歓迎の集会を開いたこと、まもなく王妃も東京に到着し、日本実践女学校に入学の予定であること、内蒙古カラチンの宮廷で2年間王の子供たちの教師を務めていた河原［操子］女史が3人のモンゴルの少女を連れて帰国し、少女たちは現在下田歌子女史の学校で学んでいること、河原女史の代わりに3月に鳥居きみ［君子］女史が出かけたこと、彼女の夫は千島アイヌの研究で有名な若い学者で、モンゴル語とモンゴルの風俗、習慣を学ぶべく2ヵ月後に同じくモンゴルに出発したことが記されている。

君子の夫・鳥居龍蔵は当時東京帝国大学理科大学人類学教室の講師であり、ピウスツキは彼と交わりを結んだ。鳥居はピウスツキを東京西ヶ原貝塚に案内し、また1911年には彼の「樺太島に於ける先住民」をドイツ語版から訳出した。この論文には鳥居の著書『千島

アイヌ』(1903)からの引用が見られる。ピウスツキは君子とも親交を結び、3月5日に彼女が東京を発つ時に見送ってやった(4646、t.2：5−6)。後に君子が出発の情景を回想しつつ、「勇ましき諸声して『鳥居夫人萬歳』と呼ばるゝもうれしく覚束なき日本語もて『サヨナラオクサン』と帽子捧げて呼ぶ露西亜人も亦愛らしく、」[12] と書いた「露西亜人」とはピウスツキのことである。

「異民族のなかのБ.O.ピウスツキ」は、「ギリヤーク人の村でギリヤーク人の民話と歌謡を記録するピウスツキ」と題する写真を添えて彼のサハリンでの異民族調査活動を紹介した短い記事で、「現在Б.O.は日本にいて、自分の研究を整理中である」[13] と結ばれている。

III

次に「日本より」の内容をかいつまんで紹介しよう。第4号は日露戦争の帰還兵士を凱旋門を作って歓迎する様子が、凱旋門の挿絵2枚を添えて語られている。

第5号は前述のように『日本とロシア』紙からの転載で、1906年1月15日に銀行家倶楽部が東京で盛大な宴会を催し、伊藤［博文］侯と大隈［重信］伯、阪谷［芳郎］大臣が出席したこと、伊藤侯が日本に広く門戸を開いた外国資本に飛び付くことの危険性を警告し、大隈伯も伊藤侯の意見を支持して、「経済的世界共通」なるフレーズにのぼせ上がらぬよう忠告したこと、大隈伯が『東京経済雑誌』の最新号で政府閣僚にも産業界にも見受けられる保護貿易主義への熱中に反対して貿易の自由を擁護したことが、大隈伯の写真入りで紹介されている。この記事が『日本とロシア』の第何号から転載されたのかは不明である。

第7−8号(3月12日、19日)ではまず約2,000人の日本人俘虜の帰国、そして日本人にとって俘虜となるのは極めて恥ずべきであることが述べられる。次に歌会始に話題が移る。今年のテーマは「新年河(しんねんのかは)」であること、国内国外から18,766首もの句が送られてきたこと、第一等を獲得したのは宮内省御歌所録事の妻・遠山稲子女史の「なみならぬ年をむかへて河の瀬のかみしもとなくいはふけふ哉」という歌であること、最も優れた「撰歌」として天皇の前で披露される7首のうちに［在奉天］第六師団第一野戦病院詰［陸軍］看護卒・林清房の句「家にある父はことしもたに河のなかれをくみてとしむかふらむ」や、東京の警視庁巡査の娘・長尾布美子の句「河口はにきはひにけりあらたまのとしの初荷やいまつきぬらむ」が入ったことが紹介される。次いで今年の新年の御進講はエジプトの保護統治に関するものだったこと[14]、伊藤侯が韓国統監府へ出発したこと、その後若干省略して、話題は地震に移り、まもなく大地震がくるというデマが流れて、ピウスツキは知り合いの日本人からすぐさま公園に逃げるよう、またその後荷物をまとめて逃げる用意をしておくよう言われたこと、『東京二六新聞』夕刊に大地震は起こらないから心配する必要はないという大森教授の論説が掲載されたこと、そして片山潜が最近帰国したことが伝えられている。

ピウスツキの記述には若干不正確な点があり、この年1月16日の『東京二六新聞』に載ったのは東京帝国大学教授今村博士の「大地震襲来説」であって、それを否定する大森房吉氏寄稿「大地震襲来の浮説に就て（一）（二）」が2月1日と5日の『時事新報』紙に掲載されたのである。またピウスツキは2月6日の夜、神田三崎町の吉田屋で開かれた片山潜

の歓迎会に出席し、演説した。

第9－10号（3月26日、4月2日）では砕氷船［大礼丸］が2月9日に青森からサハリンへ出発したものの、厚い氷に帰路を阻まれて3月6日にようやく小樽に帰着したこと、樺太民政署長官・熊谷氏が東京に到着してかの地の情報をもたらしたこと、東京地方裁判所で前年9月の日比谷焼き打ち事件の審理が行われていること、その際幾人かの検察側の証人が警察に買収されていたのが判明したこと、本年3月15日に同じ日比谷公園で東京市電値上げ反対の市民大会が開かれたこと、3月25日には社会党党員の発起にかかる集会が開かれ、それが暴動に発展して、自分もそれを見に日比谷公園へ駆け付けたのだが、自分たちが到着するまでの有様を尋ねた相手が実は私服警官だったこと、翌日に7人の社会主義者が逮捕され、そのなかには社会主義者の機関紙『光』の3人の編集員全員が含まれていたこと、3月16日に鉄道国有法案が衆議院を通過し、それに抗議して加藤高明外相が辞職したこと、西園寺内閣は政府の法案を通すために買収という日本の議会では珍しくない手段をいとわなかったこと、それによって逆に国民の信頼を失い、新内閣への期待が裏切られたのは誰の目にも明らかなことが伝えられている。

1905年10月に平民社が解散し、石川三四郎、木下尚江らキリスト教派の社会主義者が『新紀元』、幸徳秋水、堺利彦らが『光』と分裂してそれぞれ新聞を出すことになった。ピウスツキは双方のグループと交際した。ここでもピウスツキの記述に不正確な点があり、電車賃値上げ反対の市民大会が日比谷公園で開かれたのは3月11日と15日であり、日本社会党党員が逮捕されたのは3月15日のことである[15]。

第14－15号（4月30日、5月7日）では現在東京で学んでいる清国留学生は6500人、そのうち女子学生は約200人であること、日清両国の学生による最初の集会が今年2月に開かれ、大隈伯と青木［周蔵］子爵が開会の辞を述べたこと、清国の青年は民主主義の理想を抱懐しているばかりでなく、その四分の三は革命的ですらあること、彼らのリーダーは最近清国を脱出してきた孫逸仙（孫文）であること、東京で昨年から清国人の機関誌『民報』が発行されていること、昨年に彼らの雑誌『二十世紀之支那』の創刊号だけが出たことが述べられている。前述のように、ピウスツキはこれら在日中国人とも交わりを持った。

第20号（6月11日）ではゴーリキイの来訪が日本で待ち望まれていること、ゴーリキイのみならずロシア文学全般の最も優れた翻訳者は長谷川［辰之助。二葉亭四迷の本名］氏であること、メーデーに阪神電鉄の乗務員たちが労働時間短縮と公平な賞与金配当を求めてストライキを起こしたこと、だがロシアと違って日本の官憲は暴力に訴えてこれを鎮圧しようとはしなかったことを述べ、本事件の情報源である『光』紙から、「此同盟罷工は直接見るに足るべき利益を得ざる如しと雖も、資本家をして反省する所あらしめ、労働者は団結の必要を悟るべき点に於て間接の利益は決して少なからざるべし」[16]と引用している。ピウスツキが二葉亭四迷と極めて親密な間柄となって、彼から物心両面で様々な援助を受け、二人で「日本・ポーランド協会」を設立したことはよく知られている[17]。

第21号では1905年に国書刊行会が設立されたこと、その名誉パトロンは大隈伯であること、出版予定の図書は、

1）『古今要覧稿』全560巻

2）『続々群書類従』全5,000巻
3）藤原兼実『玉葉』全68巻
4）『新井白石全集』全400巻
5）『近藤正斎［近藤重蔵の号］全集』全400巻
6）『新群書類従』全3,000巻

であること、ロシアの東洋研究機関の図書館はこれらの図書を購入すべきであることを伝えている。

第23号（7月2日）では4月30日から5月5日まで東京で挙行された征露凱旋陸軍大観兵式の模様が伝えられている。ピウスツキは、「日本の兵士は貴国の女学生ですよ」というロシア通の日本の知人の言葉を引用し、日本では国民と軍隊と最高権力の相互関係が実に牧歌的であって、他のすべての国々から見てこれは羨むべきことであると述べている。

第24号の「日本より」は「教育に関する大臣の訓令」という副題が添えられている。新たに文部大臣に任命された牧野［伸顕（のぶあき）］氏が6月初めに学生の思想、風紀の取締りについて訓令を発し、そこに初めて「社会主義防止」の語句が登場して少なからぬセンセーションを惹起したこと、保守的、日和見主義的な新聞『東京日日新聞』はこの訓令を支持したこと、『時事新報』は訓令に極めて辛辣な批判を加えたこと、最も保守的な新聞『日本』は、訓令が対象とするのは社会主義ではなく「極端なる社会主義」であるとしてこの訓令を擁護したこと、『光』は大臣にしかるべき逆ねじをくわしたことを伝えている。ピウスツキは『光』以外の新聞の反応を同紙所載の記事「牧野文相の訓令」から引いたものと思われるが、『東京日日新聞』は彼の紹介とは違ってこの訓令を批判している[18]。

以上12回にわたる「日本より」の連載記事は、テーマが実に多種多様にわたっている。民族学者であり、革命家であり、文学にも造詣の深かったピウスツキの広い目配りが遺憾なく発揮されており、1906年前半、というより日露戦争直後の日本の様々な側面が浮彫りにされているといってよい。記事の材料は、彼自身の個人的体験と『光』をはじめとする新聞記事の双方から成り立っている。まもなく大地震がくると家主に脅されて身の回りの品をまとめる箇所や、知人から聞いて日比谷公園の暴動を見に駆け付ける箇所は、ピウスツキの日本での暮らしの一面と彼の旺盛な好奇心を彷彿とさせておもしろい。新聞記事は二葉亭もしくは後述の上田あたりが、彼のために翻訳してやったのだろう。

Ⅳ

前に省略した第8号所載の「日本より」の中程の部分を、若干長くなるが引用する。

> 凶作に打ちのめされ飢餓に苦しむ東北地方からの悲しい知らせが絶えず届き続けており、日本のみならず外国でも寄付金の募集を呼び起こしている。
>
> イギリスとアメリカから数千人が被害者に援助の手を差し延べている。日本では義捐金の募集が行われている。最も購読者の多い新聞の一つ『萬（よろず）朝報』は米の寄付を受け付けている。不幸な人々に援助の手を差し延べたいと願うすべての人々にわざわざ

縫った小袋が配付され、本新聞の編集局はそのような袋を毎日数百個受け付けては、寄付者の指示に従ってその後村々へ送り出している。

東京では飢餓で苦しむ人々のために一連の演奏会が催された。被害を受けた県の出身者である若い学生たちのイニシアチブで催された音楽学校でのある演奏会で、大隈伯が演説を行った。この日本で最もリベラルな内閣の元首相で議会の進歩党の党首は、あらゆる社会事業や進歩的な企図に常に理解を示す。この人物は官僚制機構を敵とし、熱のこもった演説のなかで高齢にもかかわらず（大隈伯は80歳を超えている）両のこぶしを振り回しながら、官僚と、国の広大な地域における凶作という深刻な問題に対する彼らの無関心な態度を激しく非難した。大隈伯の意見はとどのつまり、政府がタイミングよくこの問題に手を打っていたら、飢饉は回避できただろうというものだった。「政府に統治されている人々がその政府のもとで飢饉に苦しんでいる、そういう政府は今自己の無力さと無用さを証明しているのであります。」拍手の嵐が、若々しい魂を持った尊敬すべき長老のこの演説に対する返答だった。

この演奏会に行って、日本人が日本の民族音楽とは全く異なるわがヨーロッパの音楽を理解する資質を備えており、またそれを伝える能力があることを私は確信した。橘女史は優雅に心をこめてショパンの「バラード」をピアノで演奏した。藤井女史はバッハとフランツとブレチ[19]のロマンスを数曲歌った際に、見事に響く快い声 —— ソプラノの力と優しさのすべてを発揮した。もし彼女がヨーロッパ行きを承諾すれば、彼女はかの地で自分の歌によって人気を博し、世間から広く認められるだろうにと私は確信する[20]。

ピウスツキが書いているように、1905年の東北地方は冷害による大凶作に見舞われた。とりわけ大きな被害を受けたのが宮城、福島、岩手の三県だった。宮城県の米の収穫は平年に比べて1割2分の出来高、福島県は2割4分、岩手県は3割3分の出来高だった[21]。1906年初頭の各新聞は凶作関係の記事が目につき、義捐金に関する情報が紙面をにぎわしている。ピウスツキが伝えたように、『萬朝報』は「同情袋」に白米を詰めて東北地方へ送ることを呼び掛け、それに応えて白米や見舞金が続々と集まる様子を「同情袋に対する同情」という欄で連日報道している。

ピウスツキが訪れた演奏会とは、宮城・福島・岩手県出身の早稲田大学の学生が組織した東北凶作地救済会が、1906年2月11日午後1時より上野の東京音楽学校（現東京芸術大学）で開催した慈善音楽会のことである。慈善音楽会はとりわけこの月に多く、9日から18日頃までほとんど毎晩開かれ、いずれも大入りだった[22]。なかでも11日の音楽会は豪華な顔ぶれで、「入場券も頗る売行好く且つ各国外交官等も多大の同情を寄せ臨席するもの多しと云ふ」[23]。諸新聞の記事を総合すると、当日のプログラムは次のとおりである。

「第1部」（1）開会の辞（2）常盤津、常盤松島（文字太夫、三登勢太夫、岸澤文字兵衛、岸澤八百八）（3）長唄、「甲」大薩摩、鞍馬山（芳村伊十郎、杵屋六左衛門）「乙」楠公（芳村伊十郎、杵屋六左衛門、岡安喜代八、杵屋勘五郎）（4）演説（大隈伯）

「第2部」(1)ピアノ独奏、バラード(橘糸重)(2)独唱、アリアフロムフリジョーフ(藤井環)(3)ヴアイオリン独奏、ローマンツエ、ガヴオツテ(プロフエツソル、ユンケル)(4)独唱、甲、ウイルストドウダインヘルツ、バツハ作、乙、エスハツトデイローゼー、フランツ作(藤井環)(5)ヴアイオリン、ピアノ合奏、ソナタインジーマイノル(ユンケル、フオンケーベル)[24]

当時は慈善音楽会のように聴衆を多く集めるためには洋楽だけでは収入に見込みがないため、邦楽を組み合わせた和洋折衷のプログラムにした[25]。入場料は一等2円、二等1円、三等50銭で、その収入はすべて救済に充てられた[26]。当日は、「聴衆頗る多く殊に高輪なる内親王殿下の御賁臨ありたるは誠に光栄のことなりし。〈中略〉全く終りたるは四時半なりき」[27]。

早稲田大学の東北凶作地救済会の会長をつとめた大隈重信の演説も、当日の呼び物のひとつだった。先に見たように、「日本より」のなかで大隈の名が繰り返し言及されていた。ここでも「この日本で最もリベラルな内閣の元首相で議会の進歩党の党首は、あらゆる社会事業や進歩的な企図に常に理解を示す。この人物は官僚制機構を敵とし、〈中略〉若々しい魂を持った尊敬すべき長老」と評されており、ピウスツキは日本の政治家のなかで大隈を最も高く評価していたと考えていい。なお大隈が批判した「政府」とは、この年の1月7日に成立したばかりの西園寺公望内閣を指す。

V

日本人の演奏に関するピウスツキのコメントは、高度な音楽理解の自信に裏打ちされている。井上紘一氏は彼の子供時代を叙述しつつ、こう書いている。

また父親は折りにふれて趣味のピアノを家族に弾いて聞かせたと言う。ブロニスワ

「前列右端が藤井環(『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』1、1987)」

フが後にサハリンで立証した「耳の良さ」も父のピアノのお蔭ではないかと思われる[28]。

ピウスツキが称賛した二人の女流音楽家のうちまず「藤井女史」とは、当時東京音楽学校研究科声楽2年に籍をおき、同時に「唱歌」の授業補助をつとめていた藤井環(たまき)のことである[29]。あるいは後に欧米各地で20年間に「蝶々夫人」の2,000回公演を成し遂げた三浦環（1884－1946）の若き日の姿と言った方がいいかもしれない。旧姓・柴田環は1900年に東京音楽学校予科に入学し、外国人教師ユンケルに声楽を学んだ。英国製の真っ赤な自転車で海老茶の袴に大きな蝶結びのリボンを風になびかせながら通学して、「自転車美人」と評判になった。当時若い女性が自転車に乗るなどは破天荒なことだったのだ。同年、陸軍三等軍医の藤井善一と内祝言を挙げる。在学中の1903年、日本最初のオペラ公演、グルックの歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」にエウリディーチェ役で出演し、オペラ歌手として認められた。翌年に本科を卒業。1907年に声楽科の助教授となるが、1909年に離婚して、音楽学校を辞職。1911年に開場した帝国劇場歌劇部専属の主席歌手となった。1913年、東京帝国大学医学部助手の三浦政太郎と再婚し、翌年夫とともにドイツへ留学するが、第一次世界大戦が勃発。1915年にロンドン・オペラハウスでプッチーニ作曲の「蝶々夫人」を演じて大成功を収めた。これ以来日本最初の国際的プリマドンナとして世界を舞台に活躍した。

わが国では1872年に学制が発布されて近代教育制度が発足した。1879年に教育令が布告され、同年本郷の文部省内に音楽取調掛が設置された。1885年2月にそれが音楽取調所と改称され、上野公園内に移転。同年12月には再び音楽取調掛となり、1887年に東京音楽学校となった。1893年に高等師範の付属音楽学校に格下げとなり、その後再び独立したのは1899年のことである。

ピウスツキが環の独唱を聞いた東京音楽学校の奏楽堂は1890年に落成した。ホールは梁行16メートル、桁行26メートルで、客席は最初は長椅子、後には380席の固定席、小規模だが近代的な音響効果がその設計によって得られた。歌の上手、下手がはっきり表れるので、歌い手にとっては厳しい演奏会場だったという[30]。環の歌った曲のうち「アリアフロムフリジヨーフ」は、マックス・ワルダウ作詞、フランツ作曲の「ある墓地(Ein Friedhof)」のことか。「ウイルストドウダインヘルツ、バツハ作」は、J・S・バッハまたはその子W・F・バッハ作曲の「ジョヴァンニのアリア『汝が心われにあたえずや』(Aria di Giovanni "Willst du dein Herz mir schenken")」である。また「エスハツトデイローゼー」は、アゼルバイジャンの詩人ミルザ・シャフィ作詞、ボーデンシュテット訳、フランツ作曲の「ばらは嘆いた（Es hat die Rose sich beklagt)」のことである。この時環は21歳。「もし彼女がヨーロッパ行きを承諾すれば、彼女はかの地で自分の歌によって人気を博し、世間から広く認められるだろうに」というピウスツキの評言は、現実とは逆のことを仮定する条件法の構文で表現されている。環がこの9年後にヨーロッパで華々しいデビューを飾るなどとは、ピウスツキには思いもよらなかっただろうが、結果としてこの言葉は彼女の将来を見事に予言したことになる。ヨーロッパ放浪の途次、彼が日本の歌姫の噂を耳にしたかどうか、あるいは再度彼女と会ったかどうかは不明である。

VI

ピウスツキが感銘を受けたもう一人の女性演奏家、「橘女史」とは、当時東京音楽学校のピアノの教授だった橘糸重(いとえ)(1873－1939)のことである。糸重は1888年に東京音楽学校予科に入学し、ピアノを専攻。1892年に本科専修部を卒業後同校で教鞭をとった、ケーベル門下のピアニストである。「明治三十年前後の音楽会では、幸田女史［幸田露伴の妹・幸田幸(さち)］のヴアイオリンと相並んで、橘女史のピヤノが演奏の花形だった。」[31] ケーベルが東京音楽学校で嘱託講師としてピアノと音楽史を教えたのは、1898年から1909年までである。後にケーベルのギリシア古典方面の門弟・久保勉(まさる)は二人の師弟の交わりをこう書き残している。

> 橘さんが例のボーイの鈴木に案内されていとも静かに先生の部屋へ這入つて来、すこやかな先生の顔を見ると、いかにも嬉しそうににこ〳〵しながら先生と握手する場面を今なほあり〳〵と想ひ浮べることができる。〈中略〉こんな風で且つ共通の話題もさう多くはなかつたので、別に話がはずむといふ程でもなかつたに拘らず、主客の間には少い言葉と言葉との間に潜む互の心持が単に一緒にゐるといふことから以心伝心で充分に組取られる、と言ふよりも寧ろおのづからにして相通ずるといふ風であつた[32]。

糸重は音楽方面でケーベルに一番近しい弟子で、博士は自分の楽譜、音楽書、作曲草稿は彼女に譲ると遺言した。

また糸重は佐々木弘綱・信綱親子に師事し、雑誌『心の花』に短歌を寄せる歌人でもあった。島崎藤村研究家・伊東一夫氏は彼女の短歌をこう評している。

> 特に前近代的思想の流れをひく日本の多くの歌人のなかにあって、自我が鋭く追及され、存在の危機をひたむきに告白していることは、藤村の小説「破戒」と同じく、著しい近代性を示している。これらの歌が、自我または生のありかたを通して、人生の深淵にふれ、そこに生れる、孤独・寂寥・絶望などの実存的自覚の悲劇を、伝統的詩形において、素朴な、しかし沈痛な詠嘆として形象されていることは十分注意されなければならない。〈中略〉このようなきびしい自己否定の表現は、明治期には珍しく、罪の自覚におけるキリスト教的実存の陰影に濃く染めなされているのである[33]。

糸重が残した400首近くの句のうち一句紹介しておこう。

つまれけりすてられにけりふまれけり
　　すくせつたなき名もあらぬ花[34]

演奏会当日、佐々木信綱は糸重に次の二首を贈った。

人の世にいく年(とせ)ひめし真玉緒琴(またまをごと)
　　世にひゞくてふ飢人(うえびと)のため
み雪ふる陸奥山(みちのくやま)のうゑ人が
　　胸にひゞかむ清き調べの[35]

1898年、東京音楽学校選科下級ピアノ科に島崎藤村が入学した。糸重が彼にピアノを教えた縁で、二人の間に親交が生まれ、恋愛感情の存在も指摘されている。藤村の詩集『落梅集』には糸重の存在が影を落としており、小説『水彩画家』のバイオリニスト柳沢清乃と、『家』のピアニスト曽根千代のモデルは彼女とされている[36]。糸重は生涯独身を通した。1937年には佐々木信綱とともに第一回の帝国芸術院会員に任ぜられた。

Ⅶ

雑誌『音楽』の1906年4月号に「露国人類学者ピルドウスキー」と題する次のような記事が掲載されている。

> 目下来遊中の露国人類学者ピルドウスキー氏は流石に本場育ちとて音楽の嗜みも浅からざる由なるが去る紀元節の上野音楽学校慈善音楽会に赴きての評と云ふを聞くに彼は幾多の楽人中橘糸重女史を以て歌人にも勝れたる名手なりと感心し其餘りにや近々中同女史に書状を以て交際を求めんと欲する旨語りつゝありき[37]

これをピウスツキは実行に移した。彼に宛てた糸重の返信が2通、前記「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に含まれていたのである。次にそれを紹介しよう。

1．1906年2月20日付の書簡

［封筒　表］　京橋区尾張町
　　箱館屋方
　　ブロニラウ、ピルスドスキー様
［封筒　裏］　［東ー破れてこの字なし］京音楽学校ニテ
　　橘糸重
［消　　印］　2月21日

御禮との御手紙たまはりありがたく
拝見仕候
去十一日の演奏会に私のはかなき
すさび御きゝ下され候よし　われながら
心にみたぬふしのみにて作曲者に
對しても罪浅からずと心苦しく

ぞむじ居候を過分の御ほめにあづかり
何となく恐入候　いさゝかたりとも御心に
叶い候はまことに望外の喜びに
御座候　されども今は決して〳〵私の
功にてはなく全く曲そのものゝ美と
常にをしへをうけ居候ケーベル先生の
御恵による事とぞむじ候
猶又御祖国の御さま御父君の
御話など御きかせ下されありがたく志らぬ
とほきさかゐまでさま〳〵於もいやられ
まをしく
終りに御健康を祝し上候
まずは右御返事
まで
二月　　かしこ
二十日
雨の音を
きゝつゝ

橘　糸重
拝

ブロニラウ、ピルスドスキー先生
御まへに（4648：2－3、33）

この書簡から、ピウスツキが糸重に礼状を送り、その演奏をほめたたえたことが分かる。彼女の演目は「ショパンの『バラード』」だった。それは恐らく「バラード第一番ト短調」だろう。彼女はショパンとブラームスを得意にし、好みでもあった[38]。書簡4行目の「われながら」から13行目の「ぞむじ候」まではまるで女学生の文面のようだが、当時糸重は32歳で教授の地位を占めていた。だがこのセリフは多少の謙遜を差し引いても、彼女の性格と厳しい音楽観が言わしめた本音と解すべきである。生き方の苦悩がにじむ彼女の歌を一句引用しておく。

なりはひはかなしかりけりあやまちて
ピアノ人（ママ）となりしいくとせ[39]

「常にをしへをうけ居候ケーベル先生の御恵」に糸重が言及していることも確認しておきたい。この音楽会にはケーベル自身も出演し、ユンケルのバイオリンと「ソナタインジーマイノル」[40]を合奏した。ケーベルは東京音楽学校以外の普通の演奏会には出なかったが、

報酬をとらない慈善音楽会にだけは出演した[41]。この文面からして、ピウスツキはケーベルなる人物についてある程度の知識を備えていたと考えてよい。この時ケーベルは東京帝国大学と東京音楽学校以外に東京外国語学校でも教鞭を執っていた。これは日露戦争によってロシア人講師がいなくなったための代役だった。東京外国語学校の「外国教師」就任期間は1904年9月から1906年9月までの2年間のみである[42]。後にピウスツキはザコパネから二葉亭にこう書きよこしている。

> 幾度か日本について考えました。当時私に幾つも申し入れられた、学校で教える仕事をなにゆえ引き受けなかったのかと、今悔んでおります[43]。

この音楽会の7ヵ月後に講師をやめたことからして、ケーベルには外国語学校で教鞭を執り続ける意思はなかったものと推察される。恐らくピウスツキに外語講師就任の要請があったのだろう。

「御祖国の御さま御父君の御話など御きかせ下され」という一節もおもしろい。糸重が演奏したショパンは言うまでもなくポーランド人であり、「御祖国の御さま」は多分二人の間にその話題が出たことを物語っている。また前述のように、ピウスツキの幼年時代に父親が折りにふれて趣味のピアノを家族に弾いて聞かせた。「御父君の御話」はそれに関わることだろう。

封筒の「箱館屋」は1874年開業の、氷と牛乳と洋酒類を扱う日本のバーの元祖ともいうべき店である[44]。店の主人は信大蔵（しんたいぞう）という人物。もと尾張藩江戸詰の武士で、榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し、銃弾を6発受けたという前歴を持つ。ウラジヴォストーク方面のロシア人と取り引きがあり、亡命外国人や旧幕臣が常にたむろしていた[45]。ピウスツキは東京滞在中この店の2階に居をすえていた。木下尚江は二葉亭との会見をこう回想している。

> 何時も銀座の箱館屋と云ふ店の二階で会つた。薄暗い、まるで地下室か巌窟かのやうな閑かな一室[46]。

Ⅷ

2．1906年2月27日付の書簡

［封筒　表］　牛込区市谷加賀町一の一五
　　上田　将様にて
　　［ブロー破れてこの2字なし］ニラウ　ビルスドスキ様
［封筒　裏］　橋糸重
　　拝
［消　　印］　読み取り不能

ふたゝび御状かたじけなく拝し上候
御作の於もむき何とも恐入候　折角の
御言葉に御こたへいたす筈には候へど
わたくしなどの写真あまりいかゞはしく
且はたゞいま手元に一葉もなく　これより
作らせ候にては御帰国の御間にもあふ
まじくぞむじ候まゝ学校の人々と
ともに写し候ものさし下し申べき
やとぞむじ候へど御思召いかゞにや
うかゞい上候

かしこ

二十七日

橘　糸重

拝

ビルストスキ様

御許（4648：4、34）

この書簡からは、ピウスツキが即座に第二信を糸重に送ったこと、そこで彼女の写真を要求したことが分かる。これは糸重にとっては気の重い要求だったにちがいない。彼女の写真嫌いは、『心の花』の同人や東京音楽学校の教え子がことごとく口をそろえる有名な事実である。例えば、

「橘糸重（『東京芸術大学百年史　演奏会篇』1、1990）」

橘さんは写真を撮るのが一番嫌であつた。会の記念写真などには、いつも最後の列に加はつてゐて、パッとシャッターを切つた時には、すつとしやがんで了ふ。偶々少数で前の方に居なければならぬ時は、見事にうつ向いて了ふ。その時刻を観ることのうまさ。斯くて正面をきつたのがありとすれば、立派に国宝的存在といつて宜い位のものだ[47]。

筆者は糸重の写っている写真を全部で11葉見たが、そのうちカメラを見つめている「国宝的存在」のものは2葉のみだった。「学校の人々とともに写し候もの」は、卒業写真かなにかだろう。ピウスツキの遺品中に糸重の写真は見当たらず、彼女が最終的に彼の依頼に応えたかどうかは不明で

ある。もっともピウスツキは他の日本女性に対しても同じ要求をしていたようで、そのような写真が1葉残っている（4648：51-52）。

「これより作らせ候にては御帰国の御間にもあふまじくぞむじ候まゝ」というくだりも見逃せない。ピウスツキはこの後長崎へ行き、同地で汽船「ダコタ」号に乗り込んで横浜を出港するのはこの年の8月3日のことだが、比較的長期にわたる日本滞在が当初からの予定ではなかったことが分かる。同年2月8日の『東京朝日新聞』に「露国人類学者」と題してピウスツキに関する記事が掲載されているが、その後半部にも次のような記述が見られる。

> 尚同氏［ピウスツキ氏］は本月中を日本の研究に費し一度故郷の波蘭に帰り夫より再び樺太に渡りて引続き人種学上の研究に従ふ筈なりと

封筒の「上田将」は日本ハリストス正教会の神学校でロシア語を学び、正教会の出版社「愛々社」の翻訳員となって数多くの教書などを訳出した人物である[48]。『日露実用会話』（1903）、在日ロシア人俘虜のための『日露会話捷徑』（1905）のような著書もある。当時は『東京日日新聞』の記者で、ロシア人革命家が長崎で出していたロシア語の新聞『ヴォーリャ』の東京での予約購読と広告の受け付けをしていた。1906年11月の、孫文と革命的社会主義者党の創設者ゲルシューニの会談の通訳をつとめたのも彼だろう[49]。上田はピウスツキの論文「樺太アイヌの状態」を日本語に訳して、雑誌『世界』に掲載した[50]。

「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に上田がピウスツキに宛てた手紙と葉書が一通ずつ残っている。手紙は1906年7月19日付のもので、自分は長崎に行けないこと、『モンゴルとモンゴル人』の翻訳を頼まれたこと[51]、現在ニコライ主教が正教会の司祭と伝教者を東京に集めており、湊氏が色丹島から到着したこと、ガルフィルド氏が今朝横浜から長崎に向かったこと、自分はよく箱館屋に寄ってピウスツキのうわさをしていたこと、横浜に停泊したら電報を打ってほしいこと、『世界』誌は既にピウスツキに発送済みであり、『世界』次号用の他の鉛版が出来上がった時点で鉛版を送るつもりであることを伝えている（4646、t. 1：81-82）。

葉書の方は1907年7月1日付で、ピウスツキから手紙を受け取ったこと、ポドパーフが家族と東京にいて、ロシアの諸新聞のために特派員通信を書いており、日本の新聞からの翻訳を自分が手伝ってやっていること、『ジャパン・タイムズ』と社会主義者の雑誌の近刊をピウスツキに送ったこと、最近神保［アイヌ研究家の神保小虎か］氏に会い、彼がピウスツキの手紙を受け取ったと言っていたことを伝えている（4646：80）。なお葉書の方の署名は「M・ウエダ」になっているが、筆跡からしてこれは明らかに同一人物であって、「M」は上田の洗礼名「マトフェイ」を指すのだろう[52]。

「ピウスツキ・マニュスクリプト」には宛先が上田になっている手紙がもう一通残っている。それは早稲田大学で西洋史を講じていた煙山専太郎の、1906年2月25日付の手紙である。これは上田とピウスツキの面会申し込みに対する返事で、2月28日の水曜日午後1時に早稲田大学で会おうという趣旨のものである（4648：8）。

これらの上田宛書簡からして、ピウスツキの東京滞在中上田が彼を色々な場所に案内し、

様々な人々に引き合わせていたことが推測される。上田はピウスツキ宛の葉書で、ポドパーフのために日本の新聞の翻訳を手伝っていると書いていたが、ピウスツキが『極東の自然と人々』に「日本より」を連載する際にも同様の援助がなされたのかもしれない。従来ピウスツキに対する二葉亭の物心両面にわたる援助ということが指摘されてきた。それはその通りだが、ピウスツキの日本滞在において上田が果たした役割をもっと高く評価すべきである。

ピウスツキは既にサハリン時代に日本語に接する機会があった。著書『樺太アイヌの言語とフォークロアについての研究資料』の序文で彼はこう書いている。

> 日本語については全く素養のない身でありながら、私は露日ポケット辞典を使うことを余儀なくされ、コルサコフ〈大泊〉に住む日本人紳士たちに協力を乞うことも少なくなかった[53]。

また鳥居君子がピウスツキに書いた手紙が、フランス語混じりのローマ字表記の日本語であるのもおもしろい(4648：7、47；4648：28；4646、t.2：5-6)。これらの事実からしてピウスツキは少しは日本語を解したようだが、達筆で認められた糸重の2通の手紙は上田がロシア語に訳出してやったのだろう。

Ⅸ

ピウスツキが交友を求めた日本女性は橘糸重と鳥居君子だけではない。1906年3月20日の『北海タイムス』紙に「外人の日本婦人研究」と題する記事が載っている。それによると、ピウスツキの東京滞在の目的は日本婦人の研究であって、彼は「朝野の才媛貴女」を訪問しては次のような質問を試み、いずれ一冊の本にまとめる予定だという。

> ▲日本婦人が政府に向かつて参政権を要求するに至りし真意▲世界各国の婦人に比して日本婦人の優美なる理由▲日本婦人の結婚思想▲日本婦人の職業問題に於ける意見▲一般婦人の穢多又は非人に対する感情及び所為▲非人又は穢多社会の婦人の現状▲現今日本婦人の教育程度に関しての意見
>
> 其他交戦中の日本婦人活動の実況、婦人界一般に流行する俗謡等……

第二の質問、「世界各国の婦人に比して日本婦人の優美なる理由」はおもしろい。ピウスツキがどの程度本気でそう考えていたのか定かでないが、後にクラクフから二葉亭に宛てた手紙にはこう書いている。

> しかし、もしもエネルギッシュで（日本女性ならむろんみなかわいくて善良でしょう)、自身こちらへやって来てもし失望したら帰国できるだけの資力をもった婦人がみつかれば、私はしばらく待って、あなたの選択眼を信じて陽の昇る国の婦人を伴侶に選び、われらの未来の永遠の友情を実質的に強めるでしょうに[54]。

同年3月9日の『報知新聞』にも「日本婦人の研究（波蘭人ピルスドスキー氏）」と題する記事が掲載されている。内容は上の記事とほぼ重複するが、質問事項として上記以外に看護婦になる婦人の目的、青年女性の愛読書が挙がっている。

当時、女性の苦しんでいる様々な問題の根本的な解決は社会主義以外にはありえないことを訴え、婦人層を結集しようとする運動がわが国で展開されていた。ピウスツキはこのような婦人運動家とも交際を持った。例えば福田英子、今井歌子、遠藤清（きよ）。福田はキリスト教派の社会主義者。今井は月刊誌『二十世紀の婦人』の事務を引き受け、やがて社会主義者と交渉を持つようになって、婦人に政治上独立の人格を認めない治安警察法第五条改正の請願運動を、福田と共に展開した人物である。この運動を支えたのが遠藤で、後の『青踏』同人である。日本婦人論を一本にまとめるというピウスツキの目論見は実現しなかったが、彼はガリチアに戻った後市民大学で日本婦人について公開講演を行った(55)。

ケーベルは日本婦人について次のように述べている。

> 日本婦人は――私の知れる限りでは――西洋婦人に比して幾多の長所をもっている。その最大なるものは、即ち彼らがいわゆる『淑女（ダーメン）』でなくして、女（ワイバー）または婦人（フラウエン）――男に対する自分たちの自然的ならびに社会的位置を意識しており、かつその他の何ものであろうとも欲しない（少くとも現在では！）ところの――であるということである。――尤も日本においても既に時折は『新しい女』を説くのを聴き、私もこの『理想』の二三の実例を見たことはある。が、しかしその背後にはなんら真面目なるものが潜んでいない。それはむしろかの日本においてきわめて喜ばるゝ『近代的なるもの』との遊戯三昧の一つと見るべきである。即ち彼らには、何であっても、たゞ『近代的』でさえあればよいのである！〈中略〉
>
> 私の知れる、善良、賢明にして、教養を求めておりかつこれに堪える日本婦人は、『婦人問題』をば自分では既に解決している。それも、私の考えるところでは、それがヨーロッパにおいてのみならずまた一般にも解かれうる唯一の正しき仕方において、即ち騒を起すことなく、その落著いた、何びとの厄介にもならない、謙譲な、一つの有用な活動をもって充されたる生活によって。〈中略〉
>
> 私にしてもし今四十ばかり若くかつ結婚をするという考を抱いていたならば、私はひとりドイツ婦人かしからざれば日本婦人を選ぶであろう。無論後者は『西洋婦人』を気取ってはならない。彼女の教養とまた自身の娯楽とのためにする音楽［こゝにいう音楽はいうまでもなく西洋音楽を指す］は彼女に許されるであろう、しかしながら『専門演奏家』として公に出演することは全然禁ぜられるであろう(56)。

ケーベルの発言の前半部は、「近代的」を装う「新しき女」たちに対する明らかな批判である。また最後の部分、自分の配偶者は「専門演奏家」であってはならないというくだりは、間接的に三浦環の生き方への批判となりうる。事実彼はその後の環とは没交渉だった。では橘糸重はどうか。久保勉はこう書いている。

> 先生［ケーベル］が『小品集』の中で、『私の知れる、善良、賢明にして、教養を求

めて居り且つこれに堪へる日本婦人』とか、『騒を起すことなく、その落著いた、何人の厄介にもならない、謙虚な活動を以て充された生活をする日本婦人』とか書いた時、先づ第一に念頭に浮んでゐたのは恐らく橘さんであつたに違ひない[57]。

ピウスツキは日本の婦人をどのように観ていたか。この問いに対する彼の直接の回答は見当たらないが、ケーベルとはかなり異なるものだったことは間違いない。ケーベルが手厳しく批判した「新しき女」、即ち女性社会運動家たちにピウスツキは積極的にアプローチした。そしてその質問事項からして、ピウスツキが彼女らの運動を肯定的に捉えていたことも確かである。彼はガリチアに戻って事実上の夫婦となったマリアを、ケーベルの嫌う「専門演奏家」にしたいと考えていた[58]。

ではピウスツキの観た橘糸重はどうか。本稿で紹介した彼女の第一信は、恐らくピウスツキにとって意外なものだっただろう。優れたピアニストであるばかりでなく、「歌人にも勝れたる名手なりと感心し」て彼は手紙を書いたわけで、全く別個の女性像を脳裏に描いていたはずだが、返ってきた返事は予想外の、徹頭徹尾謙遜の念のこもった内容のものだった。仮にこれが藤井環であれば、このような返事は決して書かなかっただろう。だが逆にピウスツキは糸重との文通によって、日本女性の異なった側面に触れることができた。日本に短期間滞在した者としては、むしろ社会に突出した女性、「近代性」を標榜する「新しき女性」に接する機会は多くても、保守的、伝統的思考法の女性、まして徹底的な自己否定の女性と接する機会は少なかったのではないか。その意味で糸重との文通は、この実に好奇心旺盛なポーランド人の興味を引き、彼にとって日本婦人研究の貴重な材料となったにちがいない。

本稿執筆に際し、サハリン州立郷土博物館（ユジュノ・サハリンスク）のB・M・ラティシェフ、アムール地方研究協会（ウラジヴォストーク）のA・A・ヒサムヂーノフ、秋月孝子、石垣香津、井上紘一、小松美沙子、沢田梢、島尻政長、清水恵、長縄光男、中村喜和、浜野アーラ、宮本立江、矢崎正夫の各氏と、日本近代音楽館、早稲田大学大学史編集所より貴重なご教示と資料を賜った。またアムール地方研究協会図書館、国立国会図書館、埼玉大学図書館、一橋大学図書館、北海道大学スラブ研究センター、早稲田大学現代政治経済研究所、早稲田大学図書館で資料の収集を行った。記して感謝の意を表する。

— 注 —

1　日付は特記しない限り新暦で統一した。

2　ピウスツキの生涯とその日本滞在については、拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と明治日本」『ポロニカ』4、1994年、20-37頁、を参照のこと。

3　マトヴェーエフについては、檜山真一「親日亡命ロシア人ニコライ・マトヴェーエフ」原暉之・外川継男編『講座スラブの世界⑧　スラブと日本』弘文堂、1995年、187-213頁、を参照のこと。

4　Л. Я. Иващенко, *Послесловие к изданию:Николай Петрович Матвеев — кто*

он?.., Владивосток, 1991, стр. 9, 14.

5 А. А. Хисамутдинов (сост.), *"...С полным забвением и любовью..." К 125-летию со дня рождения Бронислава Осиповича Пилсудского*, Владивосток, 1991.

6 この日付は旧暦で、新暦では11月26日になる。

7 北海道大学スラブ研究センター所蔵マイクロフィルム Piłsudski Manuscript. ポーランド科学アカデミー図書館（クラクフ）の整理番号 Rękopis sygn. 4646, t. 2, p. 55. 以下、本「マニュスクリプト」からの引用は本文中の括弧内に整理番号を記す。

8 『馬関毎日新聞』1906年1月10日、第2面。『北海タイムス』1906年1月10日、第1面。

9 以下、『極東の自然と人々』の発行日は旧暦によっており、新暦に直すには13日を加算すればよい。

10 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 2, 5 февраля 1906 г., стр. 16.

11 ラティシェフ氏は「日本より」の掲載号数として第7－10、14－15、21、23－24号を挙げている。第4－5号についてはさておき、第20号は明らかに氏の見落としである。また「モンゴルの覚醒」については言及がない。Бронислав Пилсудский, "Поэзия гиляков." Предисловие В. М. Латышева, *Краеведческий бюллетень*, Сахалинский областной краеведческий музей, 1990, No. 1 стр. 110.

12 鳥居きみ子「蒙古行　道すがら（其一）」『読売新聞』1906年3月8日、第3面。

13 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 24, 9 июля 1906 г., стр. 3-4.

14 1月15日に細川潤次郎文事秘書官長の「埃及（えじぷと）と英国との関係」、三島毅東宮侍講の「詩経大雅蕩之什江漢篇」、猪熊夏樹の「日本書記神武天皇四年二月之條」の三つの進講があった。『毎日新聞』1906年1月16日、第2面。『読売新聞』1906年1月16日、第1面。

15 『光』1－9、1906年3月20日、第5、7面。

16 『光』1－13、1906年5月20日、第2面。

17 安井亮平「二葉亭四迷のロシヤ人・ポーランド人との交渉」『文学』34－8、1966年8月、22－25頁。安井亮平翻刻・訳「二葉亭四迷宛ピウスツキ書簡」『二葉亭四迷全集』別巻、筑摩書房、1993年、114-164頁、を参照のこと。

18 『光』1－15、1906年6月20日、第2面。

19 「フランツ」はドイツの作曲家にして教会オルガン奏者、指揮者のロベルト・フランツ（Robert Franz, 1815-1892）。「ブレチ」（Брэч）は不明。あるいはドイツの作曲家にして指揮者のマックス・ブルッフ（Max Bruch, 1838-1920）のことか。

20 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 8, 19 марта 1906 г., стр. 5-6.

21 小野武夫『現代日本文明史　第九巻　農村史』東洋経済新報社、1941年、544-545頁。

22 幽弦郎「楽壇雑観　慈善音楽会」『音楽新報』3－2、1906年3月、33頁。

23 『報知新聞』1906年2月11日、第2面。

24 『東京朝日新聞』1906年2月7日、第4面。『東京二六新聞』1906年2月7日、第3面。『読売新聞』1906年2月7日、第1面。『萬朝報』1906年2月7日、第3面。『東京日日新聞』1906年2月11日、第4面。
25 田辺久之『考証　三浦環』近代文藝社、1995年、66-67頁。
26 例えば、『東京二六新聞』1906年2月7日、第3面。
27 『早稲田学報』130、1906年3月、72頁。
28 井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」『国立民族学博物館研究報告別冊』5、1987年、46頁。
29 『東京音楽学校一覧　従明治三十八年至明治三十九年』1906年、68、69頁。
30 田辺、前掲書、45、82頁。
31 小花清泉「橘糸重女史を懐ふ」『心の花』43-10、1939年10月、5頁。
32 久保勉『ケーベル先生とともに』岩波書店、1951年、135-136頁。
33 伊東一夫『島崎藤村研究－近代文学研究方法の諸問題－』明治書院、1969年、360-361頁。
34 藤田福夫『近代歌人の研究－歌風・風土・結社－』笠間書院、1983年、295頁。
35 『東京二六新聞』1906年2月11日、第1面。
36 例えば、伊東、前掲書、346-365頁、藤田、前掲書、290-312頁、安田保雄「比較文学ノート（五）－藤村詩と橘糸重－」『成蹊国文』19、1986年、1-15頁、を参照のこと。
37 『音楽』9－6、1906年4月、42頁。
38 多賀谷千賀「亡き先生」『心の花』43－10、11頁。
39 藤田、前掲書、299頁。
40 バイオリン "Sonata in G Minor（ト短調）"のことだろう。作曲者は不明。
41 久保勉「ケーベル先生を語る」『図書』263、1971年7月、32頁。
42 『東京外国語学校一覧　従明治卅七年至明治卅八年』1904年、19頁。『東京外国語学校一覧　従明治卅八年至明治卅九年』1905年、19頁。
43 1907年10月24日（新暦11月6日）付、『二葉亭四迷全集』別巻、147頁。
44 小島津満江「銀座年表－書誌を中心に－明治編－」『銀座文化研究』1、1986年、50頁。銀座文化史学会編　石川幸恵担当「明治35年　銀座の住人その4」『銀座文化研究』4、1989年、95頁。箱館屋は現在の中央区銀座6丁目9－8の婦人服店「銀座マギー」のある所にあった。
45 野口孝一「ピウスツキと銀座の函館屋」『北海道新聞』夕刊、1985年12月12日、第7面。
46 木下尚江「長谷川二葉亭君」『神・人間・自由』中央公論社、1934年、244頁。
47 石榑千亦「橘糸重さん」『心の花』43－10、4頁。
48 山川令子「うえだすすみ　上田将」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、162頁。ちなみに「将」を「スゝム」と読む説もある。堀川柳人編『帝政ロシア邦文書目』非売品、1939年、14頁。
49 和田春樹『ニコライ・ラッセル　国境を越えるナロードニキ』下、中央公論社、1973年、114、156-157、206頁。

50 露国ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」(上)・(下)『世界』26、1906年7月、57-66頁。27、1906年8月、42-49頁。

51 後に、ポズドネェフ原著、東亜同文会編纂局翻訳『蒙古及蒙古人』東亜同文会、1908年、として出た翻訳のことだろう。同書、「凡例」2頁、堀川柳人編、前掲書、14頁、を参照。

52 中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男編『宣教師ニコライの日記』北海道大学図書刊行会、1994年、139頁。

53 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料＜1＞」『創造の世界』46、1983年5月、106頁。

54 1906年11月21日（新暦12月4日）付、『二葉亭四迷全集』別巻、123-124頁。

55 1907年5月10日(新暦5月23日)付のピウスツキの二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、133頁。

56 久保勉訳編『ケーベル博士随筆集』岩波書店、1928年、107-109頁。

57 久保勉『ケーベル先生とともに』、137頁。

58 1907年10月5日（新暦10月18日）付のピウスツキの二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、142頁。

ЗНАКОМСТВО БРОНИСЛАВА ПИЛСУДСКОГО С МУЗЫКАНТКАМИ ТОКИЙСКОГО МУЗЫКАЛЬНОГО УЧИЛИЩА

В сентябре 1994 года в Институте истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН проходил 2-й Российско-японский симпозиум "История российско-японских отношений: прошлое и настоящее", на котором я выступил с докладом "Бронислав Пилсудский в Японии". В основе доклада следующие факты: с начала октября 1905 до начала августа 1906 года1 за исключением полуторамесячного возвращения на российсий Дальний Восток польский революционер и этнограф Бронислав Пилсудский (1866-1918) провел в Японии, побывал в городах Кобэ, Хакодатэ, Токио и Нагасаки и познакомился с разными людьми, среди которых были русские и китайские революционеры, известный японский писатель Фтабатэй Симэй2, журналист Ёкояма Гэнносукэ, главные лица японского политического, журналистского и педагогического мира, социалисты, этнографы и исследователи народа айну.3

В предлагаемой статье как дополнение к предыдущей я хочу рассказать о знакомстве Пилсудского с музыкантками Токийского музыкального училища.

I

В "Рукописях Б.Пилсудского", хранящихся в Кракове в библиотеке Польской Академии наук, есть два письма Н.П.Матвеева к Пилсудскому. Одно из них написано 13-го ноября 1905 года (по старому стилю), дата другого неизвестна, но близка по времени к дате первого. Из этих писем видно, что Матвеев был близок с Пилсудским и оказывал ему помощь, и более того, приступая к изданию своего ежемесячного журнала "Природа и люди Дальнего Востока", Матвеев рассчитывал на Пилсудского как на члена редакционной коллегии журнала.4

Расчеты оправдались, и в журнале было опубликовано несколько статей Пилсудского: "Южный Сахалин под властью японцев" (№ 4-5), серия репортажей под общим заголовком "Из Японии" (№ 4-5, 7-10, 14-15, 20-21, 23-24) и "Пробуждение Монголии" (№ 21). Также там была помещена статья "Б.О.Пилсудский среди инородцев" (№ 24), автор которой неизвестен.

В серии заметок "Из Японии" Пилсудский обращается к самым разнообразным темам, включая политику, социологию, литературу и др., в жизни Японии, сразу после Русско-японской войны, что позволяет говорить о широте его интересов как этнографа, революционера и знатока литературы.

II

Цитирую среднюю часть статьи "Из Японии" в восьмом номере журнала "Природа и люди Дальнего Востока" за 19-е марта 1906 года (по старому стилю):

"Печальные вести из пораженных неурожаем и голодающих северных провинций о. Нипона продолжают приходить беспрестанно и вызывают сборы пожертвований не только в Японии, но и вне ее.

<.....>

В Токио целый ряд концертов был устроен в пользу голодающих. На одном концерте в музыкальной школе устроенном по инициативе(sic) учащейся молодежи, уроженцев пострадавших провинций, говорил речь граф Окума. Этот бывший премьер самого либерального министерства в Японии, глава партии прогресистов(sic) в парламенте, всегда отзывчиво относится ко всякому общественному предприятию и прогрессивной затее. Он враг бюрократического режима и в своей речи, полной жара, не смотря(sic) на свои преклонные годы (Граф(sic) Окума не менее 80 л.) он потрясая кулаками громил бюрократов и их равнодушное отношение к такому серьезному вопросу, как неурожай на громадном пространстве страны. Мнение графа Окума сводилось к тому, что голода можно было бы избегнуть, если бы своевременно правительство было озабочено этим вопросам. "В наше время правительство, при котором есть голодающие люди, им управляемые, доказывает свою полную несостоятельность и непригодность." Гром рукоплесканий был ответом на эту речь заслуженного старца с молодою душою.

Присутствуя на этом концерте, я убедился, что японцы могут понять и умеют передать нашу европейскую музыку, совершенно отличную от Японской национальной. Г-жа Тачибана изящно и с душою исполнила на рояли "Балладу" Шопена. Г-жа Фуджии при исполнении некоторых романсов Баха, Франца и Брэча5 показала всю силу и нежность своего замечательно звучного и приятного голоса - сопрано. Если бы она согласилась поехать в Европу, то я уверен, что она приобрела бы там своим пением популярность и всеобщее признание."6

Как пишет Пилсудский, 1905 год был неурожайным из-за необычно холодного лета в северо-восточной части острова Хонсю. А "концерт", который он посетил, - благотворительный концерт, устроенный 11-го февраля 1906 года в Токийском музыкальном училище (ныне Токийском художественном университете) по инициативе студентов Университета Васэда - уроженцев пострадавших трех префектур. Программа концерта состояла из двух отделений: в первом - японская

музыка, а во втором – европейская.7 В то время в Японии только европейская музыка не могла привлечь значительную аудиторию, и потому программа благотворительного концерта должна была отвечать как традиционным, так и новым вкусам публики.

Украшением программы была поставленная в конце первого отделения речь Окума Сигэнобу, политика и основателя Университета Васэда. В серии "Из Японии" Пилсудский неоднократно упоминает имя Окума8, а его деятельность неизменно высоко оценивает, что дает основания предположить, что автор считал Окума одним из выдающихся политиков новой Японии.

III

В замечаниях Пилсудского о японских исполнителях слышна уверенностью в собственном глубоком понимании музыки, к чему были основания. В детстве Бронислава отец играл в семье на рояле, и Пилсудский, вероятно, получил домашнее музыкальное образование. Отцовской же "школе" обязан он хорошим слухом, впоследствии доказанным на Сахалине.

Из двух японских музыкантов, отмеченных Пилсудским, "г–жа Фуджии", – это Фуджии Тамаки (1884–1946), которая в то время училась на высших курсах по классу вокала и одновременно преподавала пение в качестве ассистентки.9 Или, может быть, лучше сказать, что это будущая Миура Тамаки, 2000 раз в течение 20–ти лет исполнявшая партию героини в опере Пуччини "Мадам Баттерфляй" на Западе. В 1900 году Тамаки поступила в Токийское музыкальное училище и изучала пение. В том же году она вышла замуж за военного врача Фуджии Дзэнъитиро. В 1903 году, когда Тамаки была еще студенткой, она исполнила партию Эвридики в опере Глюка " Орфей и Эвридика". Это была вообще первая оперная постановка в Японии, и тогда Тамаки была признана как оперная певица. В следующем году она окончила училище, а в 1907 году заняла там же должность доцента. В 1909 году Тамаки рассталась с мужем и оставила преподавание в училище. В 1911 году в Токио был создан театр Тэйкоку (Имперский театр), в оперной труппе которого Тамаки стала примой. В 1913 году она вышла замуж за ассистента медицинского факультета Токийского имперского университета Миура Масатаро и в следующем году вместе с мужем поехала в Германию на учебу. В 1915 году в оперном театре в Лондоне Тамаки блестяще исполнила партию "Мадам Баттерфляй". С тех пор она, всемирно известная примадонна Японии, выступает на сцене многих театров мира.

На благотворительном концерте Тамаки пела романсы "Ein Friedhof" (слова Вальдау, музыка Франца),"Aria di Giovanni "Willst du dein Herz mir schenken"" (музыка Баха) и "Es hat die Rose sich beklagt" (слова Мирзы–Шафи, перевод

Боденштедта, музыка Франца).10 В то время Тамаки был 21 год. Конечно, Пилсудский никак не мог знать, что через 9 лет она с успехом будет дебютировать на европейских сценах. Однако его слова прекрасно предсказали блестящее будущее певицы.

IV

Другой исполнительницей, "г-жой Тачибана", растрогавшей Пилсудского, была Тачибана Итоэ (1873–1939), профессор по классу фортепиано в Токийском музыкальном училище. В 1888 году Итоэ поступила по классу фортепиано и в 1892 году окончила училище, а потом стала преподавать в своей альма-матер. Ее учитель – русский немец Р.Кебер, который читал лекции по филисофии в Токийском имперском университете, а в Токийском музыкальном училище вел класс фортепиано и истории музыки.11 Кроме того, Итоэ писала стихи. Ее "танка" (краткое стихотворение размером в 5–7–5–7–7 слогов) проникнуты ощущением кризиса бытия и самоотрицанием. В 1937 году на впервые состоявшихся выборах в Имперскую Академию художеств Итоэ была избрана ее членом. Она прожила всю жизнь незамужней.

В "Рукописях Б.Пилсудского" есть два письма Итоэ к Пилсудскому, которые переведу с японского языка на русский:

1. Письмо от 20-го февраля 1906 года

С признательностью прочитала Ваше благодарственное письмо и узнала, что Вы послушали мое неискушенное исполнение на концерте, устроенном 11-го числа [этого месяца]. Я недовольна своей игрой и чувствую себя виноватой перед композитором, и потому мне неловко от Ваших похвал. Но если Вам хоть немного понравилось, то это для меня неожиданная радость. Хотя думаю, что это никак не моя заслуга – все обязано красоте самой музыки и преподавателю Кеберу, у которого я всегда занимаюсь. Также благодарю Вас за рассказ о Вашей родине и Вашем отце. Я по-разному воображала неизвестный мне далекий край.

В заключение желаю Вам здоровья.

На этом заканчиваю мой ответ.

С поклоном.

20-е февраля

Слышен звук дождя.

Тачибана Итоэ

Профессору Брониславу Пилсудскому.12

Из этого письма становится ясно, что Пилсудский послал Итоэ благодарственное письмо и похвалил ее исполнение. По-видимому, она играла "Балладу № 1" Шопена. Предельно скромное, особенно в средней части письмо как будто написано гимназисткой, однако в то время Итоэ было 32 года. Надо сказать, что это была ее истинная скромность: скромность характера и строгость во взглядах на музыку.

Итоэ упоминает о "преподавателе Кебере, у которого я всегда занимаюсь". Кебер тоже выступал на этом концерте – аккомпанировал другому иностранному преподавателю Токийского музыкального училища в сонате для скрипки и фортепиано.13 В то время Кебер кроме Токийского имперского университета и Токийского музыкального училища преподавал русский язык в Токийском институте иностранных языков, поскольку все русские преподаватели вернулись в Россию в связи с началом Русско-японской войны. Кебер преподавал в институте только два года, с сентября 1904 года по сентябрь 1906 года.14 Впоследствии Пилсудский из Закопане пишет Фтабатэю:

"Неоднократно я уже помышлял о Японии и жалел, почему не согласился взять предлагаемые мне когда(sic) те уроки в училищах."15

Через 7 месяцев после этого концерта Кебер ушел с должности преподавателя в институте. Вероятно, он уже в то время решил оставить преподавание в институте, и эту должность предложили Пилсудскому, но тот отказался.

Фраза "рассказ о Вашей родине и Вашем отце" тоже заслуживает внимания. Ведь Пилсудский был соотечественником Шопена, музыка которого, несомненно, навеяла воспоминания и о Польше, и об отце, который, как было выше указано, любил домашнее музицирование. По всей вероятности, "рассказ о Вашем отце" мог быть построен именно на этом.

Письмо адресовано в "Хакодатэя" – магазин "Хакодатэ", который был открыт в 1874 году в центре Токио. Там продавали природный лед из Хакодатэ и молоко, а позже мороженое и иностранные вина. Впоследствии магазин превратился в первый в Японии бар. Хозяин магазина как самурай старого сёгунского правительства принял участие в возникшем в Хакодатэ сражении с новым правительством Мэйдзи. Магазин имел торговые отношения с русскими во Владивостоке. В нем всегда собирались эмигранты и бывшие вассалы сёгуната.16 Во время пребывания в Токио Пилсудский проживал на втором этаже магазина.

V

2. Письмо от 27-го февраля 1906 года

С благодарностью прочитала Ваше второе письмо. Я очень смущена Вашей

просьбой, которую мне стоило бы выполнить. Но моя фотография, – это вещь неприличная, да к тому же теперь у меня и нет под рукой ни одной моей фотографии. Боюсь, что если сейчас закажу ее, то не успею к Вашему отъезду на родину. И потому мне хотелось бы подарить Вам фотографию, где я сфотографирована вместе с коллегами и учениками училища. Вопрос в том, подойдет ли она Вам?

С поклоном.

27-е [февраля]

Тачибана Итоэ

Господину Пилсудскому.17

Очевидно, Пилсудский вслед за первым послал Итоэ второе письмо с просьбой о фотографии. Это была, должно быть, не совсем приятная просьба для Итоэ, которая не любила фотографироваться, о чем свидетельствуют почти все члены ее группы " танка" и ее ученики в Токийском музыкальном училище. "Фотография, где я сфотографирована вместе с коллегами и учениками училища", – это, вероятно, фотография, сделанная на выпускной церемонии. В архиве Пилсудского фотография Итоэ не обнаружена, и неизвестно, исполнила ли она в конце концов его просьбу.

Также надо обратить внимание на строку "Боюсь, что если сейчас закажу ее, то не успею к Вашему отъезду на родину". Письмо написано 27-го февраля 1906 года, а спустя почти 4 месяца Пилсудский поедет в Нагасаки, а в конце июля сядет там на американский пароход и 3-го августа того же 1906 года через Ёкохаму отплывет в Америку в Сиэтл.18 Т.е. из этой строки ясно, что Пилсудский по первоначальному плану намерен был оставить Японию раньше.

Письмо адресовано "Уэда Сусуми (или Сусуму)". Уэда изучал русский язык в Православной духовной семинарии в Токио и переводил на японский язык множество документов православной церкви. В то время он работал журналистом и принимал в Токио подписку на русскую газету "Воля", издававшуюся русскими революционерами в Нагасаки, а также заявки на размещение в газете рекламы.19 Уэда опубликовал японский перевод статьи Пилсудского "Состояние сахалинских айнов" в журнале " Сэкай (Мир)".20

В "Рукописях Б.Пилсудского" есть письмо и открытка Уэда к Пилсудскому, а также письмо японского преподавателя всемирной истории в Университете Васэда, адресованное Уэда.21 По этим письмам и открытке можно предположить, что во время пребывания Пилсудского в Японии Уэда сопровождал его в разные места и познакомил с разными людьми. Когда Пилсудский писал серию репортажей "Из Японии" для журнала "Природа и люди Дальнего Востока", Уэда, по всей вероятности, переводил для него статьи из японских газет. Пилсудский немного

понимал по-японски, но, по-видимому, Уэда перевел на русский язык и оба письма Итоэ.

VI

В газете "Хоккай таймусу (Североморское время)" за 20-е марта 1906 года была опубликована статья "Изучение иностранцем японских женщин". В статье написано, что целью пребывания Пилсудского в Токио является изучение японских женщин, что он обращается к разным женщинам с разными вопросами и хочет написать когда-нибудь монографию на эту тему.

В то время в Японии формировалось женское движение. Его программа основана на том, что коренное решение всевозможных женских вопросов невозможно без социализма. Пилсудский познакомился с молодыми активистками женского движения. Монография на тему о японских женщинах осталась не написанной, но по возвращении в Галицию Пилсудский читал открытую лекцию о положении женщин в Японии.22

Кебер относился к японским "новым женщинам" с современными взглядами резко отрицательно и прожил всю свою жизнь холостяком. Он думал, что супруга не должна быть профессиональной музыканткой.23

А как смотрел на японских женщин Пилсудский? Ответ мы можем лишь предположить, однако несомненно, что взгляд Пилсудского на японских женщин значительно отличался от взгляда Кебера. Кебер беспощадно критиковал "новых женщин", т.е. активисток женского движения, с которыми Пилсудский неоднократно встречался и положительно оценивал их деятельность. По возвращении в Галицию Пилсудский вступил в гражданский брак с подругой своего детства Марией Жарновской. В отличие от Кебера он хотел, чтобы жена стала профессиональной музыканткой.24

А как смотрел Пилсудский на Тачибана Итоэ? Она была не только замечательная пианистка, но и выдающаяся поэтесса. Вероятно, разносторонняя одаренность Итоэ рисовала Пилсудскому совсем другую женщину, и потому крайне скромное содержание ее ответных писем было для него неожиданным. Если бы это была Фуджии Тамаки, она никогда не написала бы таких слов. Однако заочное знакомство с Итоэ позволило Пилсудскому узнать совсем другую сторону японской женщины: у него, хотя и недолгого жителя Японии, было немало встреч с "новыми женщинами", выступающими на поприще общественной деятельности под лозунгом современности, но знакомства с женщинами традиционного склада мыслей и консервативного поведения, вплоть до самоотрицания, были редки. Поэтому можно сказать, что

переписка с Итоэ заинтересовала зоркого поляка и послужила ему драгоценным материалом для понимания японских женщин.

Приносим благодарность преподавателю Университета Сайтама Алле Викторовне Хамано

ПРИМЕЧАНИЯ

1. Все даты, кроме специально оговоренных, приводятся по новому стилю.
2. В настоящей статье принят японский порядок написания имен и фамилий японцев, т.е. на первом месте – фамилия, на втором – имя.
3. См. К. Савада. Бронислав Пилсудский в Японии. Japanese Slavic and East European Studies, vol.15, Kyoto, 1994, pp. 107 - 119.
4. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, t. 2, p. 55.
5. К сожалению, это имя нам осталось неизвестно.
6. "Природа и люди Дальнего Востока [Восточная неделя]", № 8, 19–е марта 1906 г. (по старому стилю), с. 5 – 6. В цитате сохранена орфография оригинала.
7. Газета "Токио асахи", 7–е февраля 1906 г., с. 4; газета "Токио нироку", 7–е февраля 1906 г., с. 3; газета "Ёмиури", Токио, 7–е февраля 1906 г., с. 1; газета " Ёродзу тёхо", Токио, 7–е февраля 1906 г., с. 3; газета "Токио нитинити", 11–е февраля 1906 г., с. 4.
8. "Природа и люди Дальнего Востока [Восточная неделя]", № 5, 26–е февраля 1906 г., с. 7; № 15, 7–е мая 1906 г., с. 13; № 21, 18–е июня 1906 г., с. 5.
9. Общий обзор Токийского музыкального училища за 1905 – 1906 гг. 1906, с. 68, 69.
10. Газета "Ёмиури", 7–е февраля 1906 г., с. 1; газета "Токио асахи", 7–е февраля 1906 г., с. 4.
11. О Кеберс см. Иванова Г.Д. Русские в Японии XIX – начала XX в. М., "Восточная литература", 1993, с. 130 – 142.
12. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4648, pp. 2 - 3, 33.
13. К сожалению, имя композитора нам осталось неизвестно.
14. Общий обзор Токийского института иностранных языков за 1904 – 1905 гг. 1904, с. 19; Общий обзор Токийского института иностранных языков за 1905 – 1906 гг. 1905, с. 19.
15. Письмо Пилсудского к Фтабатэю от 24–го октября 1907 г. (по старому стилю). Фтабатэй Симэй. Полн. собр. соч., т. VIII (специальный), Токио, "Тикума сёбо", 1993, с. 145.
16. Ногути Коити. Пилсудский и Хакодатэя на Гиндзе (главная улица Токио). Вечерний выпуск газеты "Хоккайдо", 12–е декабря 1985 г., с. 7.
17. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4648, pp. 4, 34.
18. Выезд русских революционеров. Газета "Тоё хинодэ", Нагасаки, 31–е июля 1906 г.
19. Вада Харуки. Народник Н.К.Руссель. Токио, "Тюокоронша", т.II, 1973, с. 156 –

157, 206.

20. "Сэкай", № 26, Токио, июль 1906 г., с. 57 – 66; № 27, август 1906 г., с. 42 – 49.

21. Письмо Уэда к Пилсудскому от 19–го июля 1906 г.; открытка Уэда к Пилсудскому от 1–го июля 1907 г.; письмо Кэмуяма Сэнтаро к Пилсудскому от 25–го февраля 1906 г. Piłsudski Manuscript. Rękopis sygn. 4646, t. 1, pp. 81 - 82; 4646, p. 80; 4648, p. 8.

22. Письмо Пилсудского к Фтабатэю от 10–го мая 1907 г. (по старому стилю). Фтабатэй. Полн. собр. соч., т. VIII (специальный), с. 130.

23. Кубо Масару (пер. и сост.). Сборник эссе доктора Кебера. Токио, "Иванами сётэн", 1928, с. 107 – 109.

24. Письмо Пилсудского к Фтабатэю от 5–го октября 1907 г. (по старому стилю). Фтабатэй. Полн. собр. соч., т. VIII (специальный), с. 138.

第4章　環日本海交流

近代日露関係史のなかの越後人

日本の中で新潟県はその位置からいってとりわけロシアに近く、古来数多くの本県出身者がロシア、ソ連と関わってきた。その顔ぶれはまことに多彩であり、関わり方も実に様々である。本稿では日露関係史の流れを概観しつつ、直接ロシアと関わりをもった越後人を、紙幅の制限上その活動時期を明治時代末までに限定して取り上げてみたい。

北方の脅威　−−　江戸時代

1　初期の出会い

ロシアに足跡をしるした、名前の判明している最初の日本人は、17世紀末、五代将軍・徳川綱吉の時代にかの地に漂着した大坂の伝兵衛である。伝兵衛はピョートル大帝から日本語を教えるよう命ぜられ、ロシアの土となった。ピョートルには日本への航路を探し出し、通商を開こうとする意図が既にあったのである。

歴史に名をとどめる越後人のうち、最初にロシアに関心を払った人物は、本多利明（としあき、1730−1820）である。利明は蒲原郡村上藩領（現在の新潟県内−以下同様）で生まれ、江戸に出て関孝和流算学と天文・暦学を学んだ。算学者の利明が経世的関心を持つにいたったのは、北方におけるロシアの脅威と天明の大飢饉ゆえである。1771（明和８）年、流刑地カムチャトカから脱出したハンガリー人ベニョフスキが、大島から長崎のオランダ商館長に手紙を送り、それは日本側に渡されたが、そのうち一通がロシアの脅威を警告するものだった。ロシア国家に恨みを持つ彼がでっちあげた偽情報だが、これを契機として日本人はロシアの情報を蘭書を通して学び始めたのである。利明は渡海、運送、交易を第一義とし、その著『経世秘策補遺』においてロシアの南進や蝦夷地での密貿易について述べ、蝦夷地の鉱産開発とロシアとの公の貿易関係樹立を説いた。原住民に対しては松前藩在来の非同化策を非難し、保護主義、同化政策、開発方針をもち、撫育すべしと論じた。また『経世秘策後篇』ではベニョフスキの警告や、蘭書『ロシア誌』①からロシア女帝エカテリーナ二世の治世記事を好意的に紹介している。利明のいま一つの著『西域物語』上巻ではオランダ、イギリス、ロシアなど列強の国情国策を考察し、中巻ではロシアの南進やイギリスの植民地拡大を述べて、蝦夷、樺太など北方への発展を我が国の国策として提唱した。このような主張は当時の日本全体に大きな影響を及ぼした。1785（天明５）年の幕吏蝦夷地視察に加わることを許されたが、病気のため門弟の最上徳内を代わりに行かせ、徳内はエトロフ島とウルップ島に渡航した。

ロシアへの漂流民として最も有名なのは、伊勢国白子の船頭・大黒屋光太夫（だいこくやこうだゆう）だろう。1782年にアレウト列島の一つ、アムチトカ島へ漂着した光太夫は、ペテルブルグでエカテリーナ女帝に拝謁し、帰国を許可された。そして苦節10年の後に、第１回の遣日使節アダム・ラクスマンによって根室に送還された。

1804（文化元）年に第２回の遣日使節レザーノフが長崎に来航し、交易を申し出たが、幕府はにべもなく拒絶して、上陸すら許可しなかった。レザーノフは報復措置として、部下の海軍士官ダヴィードフとフヴォストーフに樺太やエトロフ島を襲撃させた。この事件を機に幕府は、それまでの東蝦夷地に次いで西蝦夷地をも直轄地とし、北方の防御を強化した。

北辺の探検調査に功績があったのは松田伝十郎（1769－1843）である。彼は、頸城（くびき）郡鉢崎（はつさき）村（現・柏崎市米山町）の問屋出入りの馬指・浅貝源右衛門の長男に生まれた。伝十郎（幼名・幸太郎）少年は米山峠の普請奉行・大西栄八郎に見込まれて、その供をして江戸へ向かった。大西の友人に御小人目付（おこびとめつけ）の旗本・松田伝十郎がおり、この人物は本多利明とも交わっていたが、幸太郎は松田家の養子となり、「伝十郎」を襲名した。

田沼時代の政治の積極策に蝦夷地開発計画があり、伝十郎は危険を恐れずに蝦夷地勤務を志願した。1799年から1822年まで８度にわたって蝦夷地、樺太勤務を命じられたが、なかでも1808年の、間宮林蔵を伴った樺太奥地探検がとりわけ重要である。当時樺太はまだ島であることが確認されていなかった。伝十郎による西海岸隊と林蔵による東海岸隊と二手に分かれてシラヌシを出発。伝十郎はラッカ岬に到達し、ここで地図を作成し、樺太が島であることを初めて見定めて、「日本国境」の標柱を打ち立てた。ラッカ岬から引き返す海上で林蔵に出会う。林蔵はシレトコ岬まで到達、以後は東岸を北上できず西岸に抜けて、伝十郎の後を追ってきたのだった。林蔵はその後樺太東岸未見分の再探検を命じられ、沿海州に渡って黒龍江下流地方を調査し、海峡を再確認した。しかるにシーボルトが、林蔵の探検によって樺太は島であることが判明したと世界に紹介し、大陸との間の海峡が「間宮海峡」と命名されたことは周知のとおりである。ちなみにロシア側が樺太が島であることを確認したのは、この40年後、ネヴェリスコーイ海軍少佐による。

1811年、千島列島南部調査の命を受けたディアーナ号の艦長ゴロヴニーン海軍少佐らが、クナシリ島で日本人に捕縛された。ダヴィードフ・フヴォストーフ事件に対する日本側の報復である。伝十郎は松前でゴロヴニーンらの警護に当たり、1813年箱館②まで彼らを護送した。この年、ディアーナ号の副艦長リコルドと商人・高田屋嘉兵衛の努力によって、ゴロヴニーンは釈放された。彼は帰国後『日本幽囚記』を公刊したが、この手記はただちに数カ国語に翻訳され、西欧の日本理解を増進するのに功績があった。1821年に全蝦夷地が幕府から松前藩に返還され、その知らせは伝十郎のもとにも届いた。24年間の彼の

努力が水泡に帰したと言っても過言ではない。この折りの心境を、彼は次のように詠んでいる。「骨折し二四年のあわ餅をきなこくるめて鷹に取らるゝ」。③伝十郎は異国に対する祖国防衛の資料に、これまでの自らの蝦夷地経営の記録をとりまとめた。これが『北夷談』全7巻である。

2　漂流民

大黒屋光太夫のような漂流民は越後にもいた。

1806年、フヴォストーフらが樺太の松前藩クシュンコタン番屋を襲撃し、源七ら4人の番人をカムチャトカのペトロパヴロフスク港に捕虜として連行した。源七は刈羽（かりわ）郡宮川村（現・柏崎市宮川）の農民で、当時34歳。7年ほど前から蝦夷へ出稼ぎに来ていての災難だった。ひと冬をカムチャトカで過ごし、8カ月後に、通商を求めるフヴォストーフの松前奉行宛の書簡を携えて稚内で釈放された。この書簡の片かな書き和訳は、源七の仕事である。

1832（天保3）年、岩船郡早川村（現・村上市早川町）の北前船「五社丸」が江差から江戸に向け出帆したが、大風のため漂流。ハワイのオアフ島で広東商人に助けられて、ホノルルへ行った。五社丸の水主・伝吉（または伝助）は岩船郡柏尾（かしお）村（現・村上市柏尾）出身の23歳。8人のうち他に岩船郡中村（現・山北（さんぼく）町北中）の戸三郎（長三郎または庄三郎）、岩船郡粟島（現・粟島浦村）の久太郎（忠次郎）、左兵衛（出身地不明）の3人の水主の命が助かった。伝吉らはアメリカからアラスカのシトカを経て3年後にオホーツクへ向かった。ここで左兵衛が死亡。1836年、通商を求めるロシア船ウナラスカ号に乗せられ厚岸（あつけし）へ上陸を試みたが、日本側の砲撃を受け退去した。11年前に幕府は諸大名に異国船打ち払いを命じていたのである。結局3人はエトロフ島フレベツで釈放された。伝吉は露米会社支配人の幕府宛書簡を携えていた。伝吉らの帰国当時、国論は水戸藩主・徳川斉昭（なりあき）の唱える攘夷論の全盛期で、日本の鎖国の防壁は高く、彼らは江戸で勘定奉行の約1年にわたる厳しい詮議を受けた後、遅くとも1838年春には帰藩を許されたらしい。越中の「長者丸」の漂流民が同様の経路で帰国したが、彼らは五社丸漂民のシトカでの評判をこう報告している。「偏屈で何を考えているのかよくわからないような人柄だった。きれいな衣服や帽子をやってもみな箱のなかにしまいこみ、いつも日本の着物にげたをはいて街路を歩きまわるので、町中の笑いものになっていた。」他方、露米会社支配人の手紙には、「四人の者、至極篤実なる人柄にて私ども一同感心仕り候」とあり、オホーツク長官の書簡も、「四人の者ども皆発明にてよくよく言語も通じ候」と越後人船頭を誉めたたえている。

係争の地・樺太　――　幕　末

1　樺太開拓

1853年（嘉永６）年、アメリカのペリー提督が浦賀に来航した１月後に、第３回遣日使節プチャーチン提督が長崎に来航し、通商と国境画定を要求したが、日本側の延引策に遭って交渉は進展しなかった。次いで下田での交渉の結果、1855年に日魯通好条約が締結され、エトロフ島以南を日本領、ウルップ島以北をロシア領とし、樺太は両国の共同領有、日本はロシアに箱館、下田、長崎の３港を開くことが決まった。以後樺太が両国の小ぜりあいの場となる。

1855（安政２）年、南蒲原郡井栗村（現・三条市）の大庄屋・松川弁之助（1802－1876）は大庄屋役を息子に譲って蝦夷地開発を願い出、許可された。この年、危機感を強めた幕府は、再び蝦夷地全体の直接統治に乗り出していた。翌年、弁之助は箱館に渡り、未開地の開拓や弁天岬砲台の構築、五稜郭の塁と濠の大工事を請け負った。

同年に弁之助は出雲崎の義弟・鳥居権之助（ごんのすけ）を樺太に派遣し、漁場開発が可能かどうかを調査させた。当時北樺太にはロシア人が居住しており、ロシア人と対峙しての漁業開発で、これによって多数の日本人を居住させようという幕府の北方経営方針だったのである。権之助は樺太中央部の東西両岸を調査し、漁業適地として15箇所を挙げた。1857年、権之助や南蒲原郡東新潟村（現・見附市）の佐藤広右衛門率いる船団が出帆した。弁之助は代人として三条一之木戸の小林森之助を派遣した。幕府は弁之助を北蝦夷地（樺太）御直捌所（おんじきさばきどころ）差配人元締役とし、苗字帯刀を許し３人扶持を与えて、漁場開設、移民導入、国防を任せた。樺太では翌年の漁猟に備えて漁師ら45人を越冬させたが、その結果は24人が死亡するという悲惨な状況となった。差配人たちはこれにもめげず、翌春も樺太へ船を送ったが、漁獲状況は振るわず、この度も越冬者の中から死者が続出した。翌1859年には漁民の漁業継続意欲の喪失などで続行は困難となり、弁之助は漁場を撤収して箱館に帰港、その３年後に故郷へ帰った。幕府に対する負債は１万６千両に及び、松川家の田畑、山林はほとんど散じてしまったという。松田伝十郎と同じく、日露の緊張関係の最前線に立たされた越後人の健闘とその悲劇的結末といえよう。

かくしてこの時期蝦夷地がが然脚光をあび、産業開発が活発化した。老中・阿部正弘は1856、1857年の二度にわたって家臣を蝦夷地探検に派遣したが、長岡藩主・牧野忠雅もこれにならって自藩の藩士、森一馬と高井佐藤太を蝦夷地に派遣した。森と高井は1857年４月１日に出立。森のものした『罕有（かんゆう）日記』④という浩瀚な日誌が残っているので、これに基づいて旅のあらましをたどってみよう。一行は５月７日に箱館に到着。松前、そしてここから海岸線沿いに北上して、宗谷に達したのが閏（うるう）５月13日のこ

とである。翌日樺太に渡り、15日にシラヌシに到着。その後クシュンナイ、ホロコタン、マアヌイから東海岸へと、樺太南部を巡検した。7月3日に宗谷に戻り、網走から斜里に向かって、東・南西海岸を探り、9月1日まで箱館に滞在。その後奥州街道を経て、同月末日に江戸の中屋敷に到着。そこで報告を済ませた後、11月27日に長岡に帰着した。長期にわたる野菜抜きの強行軍で森は壊血病にかかり、瀕死の重体にまで陥った。

当時老中だった村上藩主・内藤信親も同じ年に3人の藩士、鳥井存九郎、水谷栄之丞、窪田潜龍を樺太に派遣した。窪田が『安政四年蝦夷紀行』という記録を残しており、これによって紀行の概要を見てみよう。一行は4月13日に村上を出発し、出羽街道を経て、5月8日箱館に入港。西海岸沿いに北上して閏5月13日に宗谷に到着した。翌日樺太の西ノトロ岬に渡り、そこから西岸を北上して、29日に北緯50度から少し北のホロコタンに到達した。ここで帰路につき、6月23日にようやくシラヌシに着いた。7月3日宗谷に向けて出航するものの、船が難破し、やっとの思いで上陸を果たす。その後蝦夷地の東海岸を回り、8月20日箱館に到着。そこから往路と同じ道をたどって、9月13日村上に帰着した。

蝦夷地に渡ってからの旅が予想をはるかに超えた、苦難に満ちたものだったことが、紀行文からひしひしと感じられる。また樺太で一行は何度かロシア船に遭遇しており、最前線にいる緊張感が日記に漂っている。アイヌ人とギリヤーク人の民族学的記述も貴重である。

2 開　国

新潟に来港した最初の黒船はロシア船だった。ペリーが浦賀に来航した6年後のことである。1858年、日本は米・蘭・英・仏とともにロシアとも修好通商条約を締結し、箱館にロシア領事館を設置、新潟、神奈川、長崎、箱館、兵庫の5港が開港予定地に指定された。だが当時の新潟港は水深5、6尺⑤から8、9尺、時節によっては2、3尺にすぎず、大船の入港は困難だった。

1859年4月22日午後4時頃、1隻の白帆が新潟港の西北1里半の沖合に停泊した。支配定役と同並役が出張して問いただしたところ、ロシアの汽船で船名は「ジキ」［ジギート］、船長25間（約46メートル）、3本マスト、乗組員100 余名、うち士官10名、船長「マイデル」、箱館駐在初代ロシア領事ゴシケーヴィチの命を受け、港口視察のため来港した旨を告げた。軍艦ジギート号はロシア領事館の用船である。ロシア人は23日に新潟で鶏、卵、ねぎ、山の芋、梨などの食料品を求め、市中を一巡しようとボート2艘に乗り込み、港口から7、8町⑥さかのぼって信濃川の水深を測量し、流作場（りゅうさくば）新田、山ノ下方面に上陸し付近を散策した。また別のボート1艘で洲崎番所の上手より上陸し、浜通り、本町通り、大川前通りを遊歩し、正午頃本船に帰った。そして午後4時頃に

ジギート号は出港した。

新発田（しばた）の人・木津幸吉（1830－1895）は1859年頃に足袋職人として箱館に渡った。そして弁天町の㋮酒屋和左衛門という古着と箱館焼（瀬戸物）を商う家で仕立屋を始めた。ある日ゴシケーヴィチが訪ねて来て、持参のラシャを取り出して洋服の仕立てを頼んだ。幸吉は洋服を仕立てたことがなかったので、領事の古洋服を借りて、それを見本に仕上げた。これが箱館最初の洋服である。⑦

その後幸吉は久しぶりに故郷を訪ねようと船に乗り、そこで外国人が写真機を持っているのを偶然目にして、それを是非にと懇望した。箱館に戻っても依然として写真機に没頭していたが、ぼんやりとした映像以上のものは得られなかった。そんな時ゴシケーヴィチが訪ねて来て、撮影方法を教えてくれた。領事はロシア艦から写真機を譲り受けて、撮影をしていたのである。またロシア領事館の医師ゼレンスケ（ゼレーンスキイ）も現像の仕方を教えてくれたので、まもなく見事な写真が写るようになった。さらに横浜の下岡連杖のもとで写真術を学んだ横山松三郎からも、印画法を教わった。そこで幸吉は1866（慶応２）年頃に写真場を開いた。これが北海道の写真屋の元祖と呼ばれるゆえんである。1869（明治２）年に清水谷公孝（きむなり）府知事が箱館に来た際、幸吉はその知遇を得、府知事上京の折りに随行した。そして下谷地区で写真場を開業し、晩年には「着色写真」を大流行させた。

対立と憧憬と　－－　明治時代

1　北洋漁業

新潟港は1869年１月１日（陰暦明治元年11月19日）に開港したが、水深が浅く、経済的諸条件が不備のために港勢は振るわなかった。しかるに1879年秋、三菱系の新潟物産会社が豊島丸に米、麦、みかん、酒、醤油などを積んで、新潟からヴラヂヴォストークへ輸出を試みた。これが新潟港の国外への直航貿易の初めである。新潟物産会社は、小千谷出身の西脇悌次郎が社長となって同年に創立され、東京への米穀の移出と委託売買に従事していた。ロシアと清国の国交が険悪化し、ロシアが日本に物資の輸送を申し入れたのがことの起こりだが、ロシア側が求めていたのは食糧ではなく馬糧だったこと、また露清間の国交がまもなく正常に復して戦争の危機が遠のいたことが、この貿易の以後の発展を阻んだ。この貿易を差配したのが伏見半七（1852－1893）である。彼は中蒲原郡（現・新潟市）沼垂（ぬったり）町の出身で、回漕店で手代をしてきた交易業の経験者だった。貿易は失敗したが、半七は沿海州の鮭・鱒漁業を調査して帰り、その有望なことを説いた。

半七の協力者、後継者として活躍したのが関矢儀八郎（1858－1924）である。彼は刈羽

郡枇杷島村大字剣野（現・柏崎市剣野）の庄屋の長男に生まれ、1886年に新潟に出て北越学館の漢文教師となった。北越学館は新潟初のキリスト教主義による男子校で、儀八郎が教鞭を執っていた時の教頭は内村鑑三である。儀八郎はその後同地の自由党系の新聞『東北日報』の助筆として、北日本の大計は対岸露領との通商と漁業にあると主張した。1889年に県会議員となり、２年後に自由党が分裂すると『自由新報』紙を創設し、政友会所属の県会議員として県政に尽くした。さらに1902年以後、衆議院議員に３度当選した。

半七の説に共感したのは新潟に出て程ない頃で、沿海州への出漁貿易については新潟、石川、富山の３県の後援のもとに協力して推進し、北陸地方発展の礎とすべしと主張した。半七もこれに賛成して３県当局に呼び掛け、対岸貿易と漁業振興の協議会を合同で開くことになった。これに対し石川、富山両県は勧業課員を新潟市に出張させたが、新潟県はこの要請を無視して誰も出席させなかった。そこで儀八郎は知事と書記官宛の公開状でその短見と不誠実を鳴らし、絶交を宣言した。かくして新潟県からは何の協力も得られず、地元では適当な船舶が入手できなかったので、金沢郊外の金石（かないわ）港で中古の加能丸を手に入れて魁（さきがけ）丸と名付け、1889年に半七や儀八郎搭乗の第１回の貿易・出漁船を沿海州に出した。そしてスチャーン付近の漁場で鮭・鱒漁に従事し、初回としては大成功を収めて帰港した。

魁丸のもたらした鮭・鱒は新潟人士の刺激となり、翌年から1899年まで毎年沿海州方面へ出漁が行われた。儀八郎は翌年にも有志と五月丸でヴラヂヴォストークへ行き、陸路ニコーリスク（現ウスリースク）方面を視察した。1891年にも半七は視察の人々と「冒険起業の志士」を乗せてヴラヂヴォストークに行った。その翌年にも五月丸が新潟・ヴラヂヴォストーク間を数回往復した。明治20年代の新潟と沿海州間の貿易の主な輸出品は白米、醤油、野菜、梨、果実、塩、漁網漁具類、莚縄類、輸入品は塩鮭、塩魚、乾魚、筋子、絞粕である。当時の沿海州漁場では、ヴラヂヴォストーク、スチャーン、オリガ、ヴラヂーミル湾、インペラートル湾、デカストリ湾などが錨地に利用された。漁場は25区に区画され、一区画内の漁業者一人に漁業が許可された。沿海州の漁業開発をめざす漁業家たちは皆、新潟港から出漁した。1904年に儀八郎は共同経営下に樺太のオリガ付近に出漁、また米領アラスカにも遠洋漁業を試み、翌年には英領カナダに鮭漁を試みた。儀八郎は多獲方式に反対し、製造加工の改良と上質の外国一等塩の使用を主唱した。最後は産をなすことなく、窮乏に近い生活のうちに生涯を閉じたという。⑧

港不振の明治・大正時代を、新潟港は北洋漁業の基地として辛うじて生きることとなる。沿海州出漁船の主力が樺太方面に転じたのは明治30年前後からで、その後さらに有利なカムチャトカ、オホーツク海方面へと進出する者が増加していった。1902年にロシア側は漁業仮規則を設けて、露領水域の漁場はロシア人にのみ使用させることとしたので、日本人漁業者は大打撃を受けた。だが抜け道もあって、ロシア人の名義で出願したり、ロシ

ア人に操業させて魚を入手したり、買魚方式、手っ取り早くは密漁という手もあった。日露戦争後、1907年に日露漁業協約が成立し、日本人の露領水域での漁業権が認められた。これによって北洋漁業が本格化したため、1908年に露領水産組合が成立し、翌年にその新潟支部が設立された。支部長は関矢儀八郎。明治から大正にかけて新潟の北洋漁業家のベスト・シックスは、田代三吉、片桐寅吉、東洋物産株式会社、浅井惣十郎、鈴木佐平、堤清六である。

堤清六（1880－1931）は三条町（現・三条市）に生まれ、日露戦争中兵舎の酒保商人となって、中蒲原郡村松町の歩兵第30連隊に従って満州（中国東北地方）、樺太に渡った。戦後、ニコラエフスクで買魚に従事していた福本万作と平塚常次郎に出会って、買魚業の有望なことを説かれた。堤と平塚のカムチャトカへの初出漁は1907年のことである。この出漁は成功し、堤は北洋の鮭・鱒漁業に従事する決心を固めた。1919（大正８）年には北洋の独占形態を確立し、２年後に三社合同後の「日魯漁業」の取締役会長となった。海外輸出を意識して、従来の鮭の塩漬け加工よりも缶詰生産に主力をおいたことによって、業績は飛躍的に伸びた。

２　対岸航路

1893年、新潟市に日露汽船合資会社が設立され、太平丸が新潟・ヴラヂヴォストーク間を数航海したが、経営は好転せず、４年後に解散した。政府は裏日本海運振興のために1896年、新潟・ヴラヂヴォストーク間に政府助成の郵便定期航路を開設し、大阪府の大家商船合資会社が愛国丸を就航させた。しかしこの航路はわずか年４回のうえ、函館、小樽、樺太のコルサコフと寄港地が多く、航行も緩慢だったため、あまり利用がなかった。その上補助期限４年半の成績が勘案され、1901年からは出港基地が敦賀に移されて、新潟は単なる寄港地となってしまった。

県では新潟港振興のために1907年から越佐汽船株式会社に補助金を出して、初め年４回、後に年６回の新潟・ヴラヂヴォストーク間の定期直行航路を開設した。この年に県内のヴラヂヴォストーク・樺太実業視察団が同航路で出発したが、この３週間の行程には『新潟新聞』の記者・小林存（ながろう）が同行し、その興味深いルポルタージュを「鵬程日乗」⑨と題して同紙に連載した。しかるに1913年に越佐汽船への補助が廃止されたため本航路は中止となり、新潟からの直行便は1926年までとだえた。

３　日露戦争

江戸時代から持ち越した日露の国境画定の問題は、1875年に駐露公使・榎本武揚（たけ

あき）が千島・樺太交換条約を締結して一応の決着をみた。日清戦争後ロシアは三国干渉を行って日本に遼東半島を返還させ、また日本の朝鮮支配を阻止しようとした。ここにロシアを敵視する機運が決定的に高まり、日本は日英同盟を締結。その２年後の1904年に日露戦争が始まった。新潟県内の兵士は第２師団管下の歩兵第16連隊（新発田）、歩兵第30連隊（村松）、後備歩兵第16連隊に編成されて出征した。二〇三高地陥落までの３度にわたる旅順総攻撃での日本軍の死傷率は46パーセントだったが、県出身者のそれは実に55パーセントに上ったという。戦争は日本の勝利に終わり、翌年ポーツマスで講和条約が調印された。ロシアが主要勢力を温存しながら講和に踏み切ったのは、1905年の第一次革命で大規模な政治ストや水兵の反乱など、体制の根幹をゆるがす事態が生じたからである。日本側にとっては、武器、弾薬を使い果たし、財政的にも破綻寸前の勝利だった。

騎兵第９連隊の建川美次（よしつぐ）中尉（1880－1945、新潟市出身）は、1905年１月、５名の騎兵を率いて、沙河をはさんで対陣するロシア軍の後方深く潜入、23日間、160 キロにわたって決死の偵察活動を行った。そしてロシア軍が退却せず、奉天（現・瀋陽（しんよう））から日本軍に対し一大決戦を敢行するという情報をもたらして、奉天の大会戦で日本側を勝利に導いた。この実話をもとにした山中峯太郎の小説『敵中横断三百里』⑩はベストセラーとなり、日本中の少年を熱狂させた。

川上俊彦（としつね、1862－1935）は岩船郡村上本町の村上藩家老の嫡男に生まれた。1884年に東京外国語学校魯語科を卒業して外務省に入り、ヴラヂヴォストーク貿易事務館⑪などに勤務した。1892年に公使館書記生としてペテルブルグに赴任。同年に出版した『浦潮斯徳』は、本邦初のロシア沿海州紹介の書である。1900年にヴラヂヴォストーク駐在貿易事務官⑫となる。この折りシベリア事情を外務省に報告し、これは単行本『西伯利及満州』（1904）として出版された。日露開戦に際しては約４千名の居留民引き揚げについて一糸乱れぬ指揮をとり、居留民を無事収容して帰朝した。1905年、旅順開城に際して近郊の水師営で行われた第三軍司令官・乃木大将と関東州要塞地区司令官ステッセル中将の会見の通訳の任に当たり、乃木将軍の武士道精神を遺憾なくステッセルに伝えた。

戦後ハルビン総領事に任ぜられ、1909年、伊藤博文がハルビン駅頭で朝鮮人・安重根に襲われた時、案内役だった川上も肩に弾丸を受けて重傷を負った。1912年モスクワ総領事に転じ、翌年に官を辞して南満州鉄道株式会社理事となる。1920年ポーランド駐在特命全権公使に任ぜられ、その間国家元首ピウスツキと日ポ通商条約を締結した。1923年には、後藤新平が招いたソ連外務大臣ヨッフェと日露新条約の基本折衝を粘り強く重ねた。1926年、北樺太鉱業株式会社取締役会長に就任。1929（昭和４）年には日魯漁業株式会社社長に就任し、1935年についに日露漁業を大同団結させた。

４　ロシア文学の受容

日露戦争後、二葉亭四迷らによるロシア文学の翻訳と紹介が一層盛んになり、日本の知識人全般に大きな影響を与えた。後進国の近代化の波の中でロシア人としてのアイデンティティの確立に苦しみ、虐げられた民衆との精神的一体化を求めるロシア文学の主人公のなかに、日本人はおのれの姿を発見したのである。とりわけトルストイの人気が高かった。またロシア正教の布教に来日したニコライ司祭も、ロシア文化を日本にもたらした。

相馬御風（本名・昌治、1883－1950）は西頸城郡糸魚川町（現・糸魚川市）の、旧家の一人息子として生まれた。1906年に早稲田大学英文科を卒業すると、再刊された『早稲田文学』誌の編集に従事し、その第二次から第三次にかけて活躍、評論界で自然主義運動にまい進した。また25歳の時、早稲田大学創立25周年に校歌「都の西北」を作詞し、1911年から母校でヨーロッパ近代文学思潮などを講義した。

御風はツルゲーネフ、トルストイ、ゴーリキイ、アンドレーエフなど多くのロシア文学作品を英訳から翻訳し、またこれらの作家についての評論も発表した。御風の仕事は、ロシア文学、とりわけツルゲーネフを明治40年代中心に広く浸透させるにあずかって力があった。彼はやがてトルストイの人道主義へと傾倒してゆく。

御風は恩師・島村抱月が創設した芸術座に参加し、1914年にトルストイの『復活』が我が国で初めて上演された。ヒロインを演じた松井須磨子の歌う「カチューシャの唄」（抱月・御風作詞、中山晋平作曲）が一世を風靡したことは、あまりにも有名である。しかし1916年に『還元録』を発表すると、御風は33歳で突如郷里の糸魚川に戻り、後半生の34年間をそこで送った。『還元録』にトルストイの回心の書『我が懺悔』の影響があることは疑いない。

その他の越後人

以上のほかに、ロシアと関わりをもった、次のような人々がいる。即ち、民間レベルで日ソ交流に尽くした思想家・ジャーナリストの内藤民治（たみじ、三条町）、トルストイ、ゴンチャローフを英語から翻訳し、チェーホフ的な抒情とヒューマニズム漂う短編を書いた相馬泰三（中蒲原郡庄瀬村－現・白根市）、十月革命の３年後にソ連に乗り込み、日本人では初めてレーニンに会って、その会見記をいちはやく日本に伝えた布施勝治（高田）、『大トルストイ全集』全22巻の個人訳をはじめ数多くのロシア文学の翻訳を行った原久一郎（北蒲原郡水原町）、ドストエフスキイに傾倒した坂口安吾（新潟市）、グリボエードフの戯曲を翻訳し、石川啄木をロシア語に訳した小川亮作（岩船郡金屋村－現・荒川町）等々。だがこれらの人々は、その主たる活動時期が大正以降になるため割愛した。

注

① 《Beschrijving van Rusland》, 1744.

② 「箱館」が「函館」と改められたのは、1869（明治２）年９月30日のことである。

③ 鷹は松前藩の紋所である。

④ 「罕有」は「稀な」の意。

⑤ １尺は約30・３センチメートル。

⑥ １町は約109 メートル。

⑦ 北海道最初の洋服としては、この約半世紀前、松前でゴロヴニーンたちのために縫われたものがある。

⑧ 以上の点について詳しくは、拙稿「対岸貿易と北洋漁業の先駆者　伏見半七について」（平成３年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書『共同研究　ロシアと日本』第３集、1992年）を参照されたい。

⑨ 「遠路日記」の意。

⑩ 1930年『少年倶楽部』誌に連載、翌年単行本。

⑪ 要塞地帯内に設置された特殊な外国公館。

⑫ 領事に比べて権限が狭く、暗号電報の発信と受信もできなかった。

ロシア帝国外交政策文書
「箱館領事館」フォンド、目録番号　572 ／1
1859年、文書番号　2

第８丁　ロシア領事館勤務のナジーモフ海軍大尉が箱館ロシア領事、６等文官にして勲章所持者ゴシケーヴィチに提出した、日本の本州北西岸に位置する新潟港の調査報告書

５月12／24日午後６時、新潟の街が視界に入り、河口の岸辺に砕け波を認めたので、距離２マイル［約３・２キロメートル］、深度７・５サージェン［約15・８メートル］の地点に投錨した。砂州とそこに至る水路を測量するため、ただちに快速ボートを派遣。日本人は海岸から軍用ボートが河口に接近してくるのを見ると、出迎えのため４隻の小舟を派遣した。うち１隻には、自分たちの停泊地に来航した軍艦に歓迎の辞を述べるために派遣された奉行配下の役人たちが乗っていた。まさしくこれらの小舟が、わが快速ボートが小川へと入る水路を遮断したが、セレ［ル］ゲーエフ少尉補は引き返せという彼らの合図と命令を無視して、自己の任務を遂行し続けた。砂州に到着するとその深度が６フィート［約１・８メートル］であることを確認し、砂州を通過すると深度は増し始めた。速やかに短時間で測量を行った。セレ［ル］ゲーエフはクリッパー船に戻った。クリッパー船とともに入港しようとする試みは不可能なことが判明したので、翌日川とこの地域をより詳しく検分するため沖合で停泊した。

５月13／25日午後６時（ママ）に水路の測量と天体観測のため２隻の手漕ぎボートが派遣された。測量を行った結果、本報告書添付の地図によって判明するように、砂州の最高深度は７フィート［約２・１メートル］、砂州を越えて川に入ると深度は次第に増していき、４サージェン［約８・４メートル］に達することが分かった。この４サージェンという深度は川床に沿って続き、川床は右岸沿いに存在する。淡水の流れは砂州を越えて深度６サージェン［約12・６メートル］の地点にまで達し、深度５サージェン［約10・５メートル］の地点で水の味は小川と同じであることが確認された。この状況からして、錨地に仮停泊したまま水をふんだんに汲み上げることが可能である。

川の測量のために派遣された手漕ぎボートは日本人の側からの抵抗には出会わなかったが、砂州をわずかに通過したところで小舟が小川へ入る水路を遮断していた。だが我々はこれを気にとめず、仕事を続行した。河口から約２マイル［３・２キロメートル］のところで小川の測量を終えると、天体観測のために港の入り口の右岸の突端部へと戻った。そこで我々は随員を連れた一人の日本人役人に出会った。この男は岸壁で我々を引きとめ、それより先に進むのを禁じようとした。通訳がいなかったので我々は彼らの言うことが理

解できず、身振りによる合図には注意を払わなかった。道具を持ち、観測のために便利な場所を選んだ。コ［カ］ズナコーフ海軍大尉とセレ［ル］ゲーエフ少尉補が行った観測によって、新潟の緯度は37度58分50、経度は133 度10分00であることが判明した。観測を終えると、川上にある新潟の街を検分するため川の左岸に渡った。岸壁で日本の役人たちが我々を出迎えた。彼らは我々が街へ行こうとしているのを見て取ると、言葉と合図の双方で我々を引きとめようとした。しかし我々を止めることはできず、我々は進み続けた。抵抗していた日本人たちは付添い人と化し、我々の行く手に群れをなして集まった民衆を追い払った。従ってこの場合には日本の兵士たちは役に立ったが、他方彼らは散策の目的を妨害し、家や店を閉めるよう命じた。我々の街中散策の折りに日本人は、我々には彼らに害もなんの侮辱も加える意図はないことを確信した。いやそれどころか我々は彼らにとても愛想よく接したので、帰路に目抜き通りを行く時には店が開いているのに気づいたが、日本人は我々に品物を購入しないよう頼んだ。店に置いてある商品をざっと見まわした限りでは、大量の陶磁器と乾魚が目についた。これら二つの産物が量の点で他のすべての商品を凌駕している。

街の周囲には果樹園があり、この地は日本の本州北西岸の商業界において主要な果物の発送地であると考えなければならない。

主要な稲作田は川の右岸にあり、左岸には街の近くに小規模な稲作田がある。右岸が低地になっており、この地方を潤す小さな川が沢山あるために、稲作田があちこちに広がっている。

多数の貨物輸送用の小舟は、この街の商業が大規模なものであることを物語っている。

短時間の新潟検分から、この街について以下のような総体的な結論を導きだすことができる。

１．この地方の内陸部から流れ出し、従って便利な水上交通手段を持っている川沿いに位置する人口の多い街として、ヨーロッパ人とのあらゆる分野の日本の産物の交易を発展させる地となりうる。

２．海運の点では、ヨーロッパの船舶にとって閉ざされた安全な停泊地のない港として不便である。とりわけ日本海に常に吹き荒れる北風のため、冬期の帆船には不便である。

３．夏期は船舶の新潟港逗留は安全である。なぜならこの季節に吹くのは微風、主に南風だからで、従って夏期はこの港は利用可能である。

４．商品の陸揚げと積込みは、穏やかな天候時に小舟の助けを借りて楽に行うことができる。

５．蒸気船は一年のいかなる時期でも停泊地に入ることができる。

６．新潟の街は台風の襲来のない地帯に位置している。

７．停泊地の海底の地盤は良好である。

この際オランダの軍用コルベット艦バーリー号の艦長の意見をお伝えしておくのもむだではなかろう。新潟調査の後抜錨して、新潟の東方に位置する街、アオシマヤマ［粟生島（あおしま）のことか。現在の粟島（あわしま）］に接近すると、明らかに不便なことに入江の入り口に砂州があり、街が完全に開けっぴろげの状態になっているのを認めた。ここから本州の北西岸沿いに新潟の南西の方向へと針路をとった。

富山港まで我々が調査した90マイル［約144 キロメートル］にわたる沿岸で、海岸沿いに大きな村落を九つ認めた。それぞれの村落は小さな入江にあるか、あるいは河口にある。入江はことごとく小さなもので、それは砕け波と黄色い水の色で分かった。河口はすべて砂州でさえぎられていた。

最後に調査を行った富山港は、その上部にあたるところに大河が流れ込んでおり、河口に三つの大きな村落がある。河口には小さな砂州があり、河に入ることはできないので、船舶の富山港寄港は危険を伴う。強風と潮流と入江自体の狭小さが、この入江を出る際の障害となっている。

1859年６月２／14日　箱館、ナジーモフ

新潟とロシア（1900－1945年）

はじめに

日本の中で新潟県はその位置からいってとりわけロシアに近く、古来数多くの本県出身者がロシア、ソ連と関わってきた。江戸時代から明治時代の中頃までを概観すると、ロシアの国情を好意的に紹介し、蝦夷地の鉱産開発とロシアとの公の貿易関係樹立を説いた本多利明（としあき）、1806年にカムチャトカのペトロパヴロフスク港に連行された源七ら４人の農民、1808年に樺太が島であることを初めて確認した松田伝十郎、1832年に漂流してオホーツクなどに行った水主・伝吉（または伝助）ら３人、1856－1859年に樺太の漁場開発と移民導入を試みた大庄屋・松川弁之助、1857年にそれぞれ北海道と南樺太の探検を行った長岡藩士、森一馬、高井佐藤太と、村上藩士、鳥井存九郎、水谷栄之丞、窪田潜龍を挙げることができる。また1859年に新潟に来航した最初の黒船は、箱館駐在ロシア領事ゴシケーヴィチによって派遣されたロシア船だった。新発田（しばた）の人・木津幸吉は箱館でゴシケーヴィチから洋服の仕立て方と写真の撮影術を学び、北海道の写真屋の元祖となった。明治期では1879年に新潟からウラジヴォストークへ最初の輸出を試み、沿海州漁業の端緒をなした伏見半七、その後継者で北日本の大計は対岸露領との通商と漁業にあると主張した関矢儀八郎がいる。

本稿では1900年から1945年頃までの日露関係史の流れを概観しながら、新潟とロシアの関わりを取り上げてみたい。

第１節　北洋漁業の発展

港不振の明治・大正時代を、新潟港は北洋漁業の基地として生きることとなる。毎年沿海州方面へ出漁が行われたが、1900（明治33）年頃からその主力が樺太方面に転じ、その後さらにカムチャトカ、オホーツク海方面へと進出する者が増加していった。1902年にロシア側は漁業仮規則を設けて、露領水域の漁場はロシア人にのみ使用させることとしたので、日本人漁業者は大打撃を受けた。だが抜け道もあって、ロシア人の名義で出願したり、ロシア人に操業させて魚を入手したり、買魚方式、手っ取り早くは密漁という手もあった。日露戦争後、1907年に日露漁業協約が成立し、日本人の露領水域での漁業権が認められた。これによって北洋漁業が本格化したため、1908年に露領水産組合が成立し、翌年にその新潟支部が設立された。

堤　清六

堤清六（1880－1931）は三条町（現・三条市）に生まれ、日露戦争中兵舎の酒保商人となって、中蒲原郡村松町の歩兵第30連隊に従って満州（中国東北地方）、樺太に渡った。戦後、ニコラエフスクで買魚に従事していた福本万作と平塚常次郎に出会って、買魚業の有望なことを知った。堤と平塚のカムチャトカへの初出漁は1907年のことである。この出漁は成功し、堤は北洋の鮭・鱒漁業に従事する決心を固めた。1919（大正８）年には北洋の独占形態を確立し、２年後に三社合同後の「日魯漁業」の取締役会長となった。海外輸出を意識して、従来の鮭の塩漬け加工よりも缶詰生産に主力をおいたことによって、業績は飛躍的に伸びた。

「露西亜研究会」

1918年、新潟市内の露領水産組合新潟支部内に「露西亜研究会」が設立された。これは主として露領漁業の関係者よりなる団体で、会員の保護救済、紛議調停、露領水産業・貿易業の研究調査、会員のためのロシア語講習所の開設を目的としていた。1920年の時点で会員数は60名。新潟市内のほか県内、函館、東京、四国、ウラジヴォストークにも会員がいた。残された会の文書から、日本の漁業家がロシアの官憲の暴虐にいかに苦しんでいたか、ロシアの税関による積荷の検査がいかに厳重だったか、漁業家が日本の外務省の無力さにいかに憤っていたかが分かる。この研究会は1932（昭和７）年頃まで存続していた。

第２節　対岸航路の敷設

1893年と1896年に新潟・ウラジヴォストーク間に航路が開設されたが、いずれも振るわなかった。新潟県では新潟港振興のために1907年から越佐汽船株式会社に補助金を出して、初め年４回、後に年６回の新潟・ウラジヴォストーク間の定期直行航路を開設した。この年に県内のウラジヴォストーク・樺太実業視察団が同航路で出発したが、この３週間の行程には『新潟新聞』の記者・小林存（ながろう）が同行し、その興味深いルポルタージュを「鵬程日乗」（「遠路日記」の意）と題して同紙に連載した。しかるに1913年に越佐汽船への補助が廃止されたため本航路は中止となり、新潟からの直行便は1926年までとだえた。

向井栄子

前記視察団はウラジヴォストークで向井商店を訪問した。この商店の主人・向井栄子は、新潟市内で時計商を営んでいた夫と子供とともに1888年にウラジヴォストークに渡って時計商を始めたが、思わしくなかったので雑貨商に転じた。これが当たって商売が繁盛するが、その２年後に夫が死亡。向井はかの地に留まり、洋服の専門店を開いた。日清戦争の折も日本商人の大部分が帰国するなかで彼女だけは帰国せず、逆に商売を拡大していった。1901年の時点でウラジヴォストーク在留邦人中一等商店に属するのは３軒のみ、次いで主たる二等商店のひとつとして、目抜き通りスヴェトランスカヤ街にある向井商店の名が挙がっている。当時は三等までのランク付けがあった。向井商店は東京日本橋に本店を置き、朝鮮の仁川港にも支店を置いた。日露戦争時は一旦帰国したが、平和回復後は再度対岸に渡って、ウラジヴォストークと仁川港間を往来した。

ヴァスケーヴィチの新潟旅行

逆に対岸から新潟を訪れたロシア人もいた。1902年５月19日（新暦）から９月１日まで、ウラジヴォストークの東洋学院日本語科３年生パーヴェル・ヴァスケーヴィチが敦賀から入国して、福井、石川、富山、新潟の北陸四県を訪問したのである。東洋学院は、日本、中国、モンゴル、朝鮮の言語と事情の教育、研究を目的とする４年制専門学校として、1899年にウラジヴォストークに創設された。この年の時点で第一期生である第３学年は15名、うち日本語科は３名（１名は聴講生）、中国語科は４名（１名は聴講生）、モンゴル語科は３名、朝鮮語科は５名（２名は聴講生）である。もう一人の日本語科第一期生は函館、第二期生は東京と静岡へ派遣され、各地域の事情調査と資料収集を行った。

ヴァスケーヴィチはこの旅の模様を『東洋学院紀要』に連載し、それらをまとめて1904年に『日本旅行日誌　敦賀港から新潟港まで』を刊行した。彼の情報収集のエネルギーたるやすさまじいもので、各地域で必ず市役所や県庁、商工会議所、取引所、水上警察、銀行等に立ち寄っては資料を入手している。新潟県内では８月14日から18日まで直江津とその周辺、18日から27日まで新潟市とその周辺、27日に新津を訪れた。新潟県では特に石油の採取と精製について多くの頁を費やしている。新潟市内に張り巡らした堀は水が汚く、街のたたずまいは概して不潔な印象を彼に与えた。暑さには相当参ったようである。ヴァスケーヴィチは宝田石油取締役の倉田久三郎に夕食に招かれ、そこで芸者による饗応を受けた。その折の彼の感想は次のとおり。「私が何よりも感銘を受けたのは、美と嬌態の代表者たちである。一人目はもっとも厳格な美の鑑定者の目から見ても文句なく理想的な美人と認められたし、最後の女性はいかなるフランス女性にもひけをとらなかった。彼女らはすべてとても礼儀正しく可愛くふるまったので、私は彼女らにぞっこん参ってしまった。」

第３節　日露戦争

江戸時代から持ち越した日露の国境画定の問題は、1875年に駐露公使・榎本武揚（たけあき）が千島・樺太交換条約を締結して一応の決着をみた。日清戦争後ロシアは三国干渉を行って日本に遼東半島を返還させ、日本の朝鮮支配を阻止しようとした。ここにロシアを敵視する機運が決定的に高まり、日本は日英同盟を締結。その２年後の1904年に日露戦争が始まった。新潟県内の兵士は第２師団管下の歩兵第16連隊（新発田）、歩兵第30連隊（村松）、後備歩兵第16連隊に編成されて出征した。二〇三高地陥落までの三度にわたる旅順総攻撃での日本軍の死傷率は46パーセントだったが、県出身者のそれは実に55パーセントに上ったという。戦争は日本の勝利に終わり、翌年ポーツマスで講和条約が調印された。ロシアが主要勢力を温存しながら講和に踏み切ったのは、1905年の第一次革命で大規模な政治ストや水兵の反乱など、体制の根幹をゆるがす事態が生じたからである。日本側にとっては武器、弾薬を使い果たし、財政的にも破綻寸前の勝利だった。

建川美次

騎兵第９連隊の建川美次（よしつぐ）中尉（1880－1945、新潟市出身）は、1905年１月、５名の騎兵を率いて、沙河をはさんで対陣するロシア軍の後方深く潜入、23日間、160 キロにわたって決死の偵察活動を行った。そしてロシア軍が退却せず、奉天（現・瀋陽（しんよう））から日本軍に対し一大決戦を敢行するという情報をもたらして、奉天の大会戦で日本側を勝利に導いた。この実話をもとにした山中峯太郎の小説『敵中横断三百里』（1930）はベストセラーとなり、日本中の少年を熱狂させた。

川上俊彦

川上俊彦（としつね、1862－1935）は岩船郡村上本町の村上藩家老の嫡男に生まれた。1884年に東京外国語学校魯語科を卒業して外務省に入り、ウラジヴォストーク貿易事務館などに勤務した。1892年に公使館書記生としてペテルブルグに赴任。同年に出版した『浦潮斯徳』は、本邦初のロシア沿海州紹介の書である。1900年にウラジヴォストーク駐在貿易事務官となる。この折シベリア事情を外務省に報告し、これは単行本『西伯利及満州』（1904）として出版された。日露開戦に際しては約４千名の居留民引き揚げについて一糸乱れぬ指揮を取り、居留民を無事収容して帰朝した。1905年、旅順開城の際に近郊の水師営で行われた第３軍司令官・乃木大将と関東州要塞地区司令官ステッセル中将の会見の通

訳の任に当たり、乃木将軍の武士道精神を遺憾なくステッセルに伝えた。

戦後ハルビン総領事に任ぜられ、1909年、伊藤博文がハルビン駅頭で朝鮮人・安重根に襲われた時、案内役だった川上も肩に弾丸を受けて重傷を負った。1912年モスクワ総領事に転じ、翌年に官を辞して南満州鉄道株式会社理事となる。1920年ポーランド駐在特命全権公使に任ぜられ、その間国家元首ピウスツキと日ポ通商条約を締結した。1923年にはソ連外務大臣ヨッフェと日露新条約の基本折衝を粘り強く重ねた。1926年、北樺太鉱業株式会社取締役会長に就任。1929年には日魯漁業株式会社社長に就任し、1935年についに日露漁業を大同団結させた。

第4節　ロシア文学の受容

日露戦争後、二葉亭四迷らによるロシア文学の翻訳と紹介が一層盛んになり、日本の知識人全般に大きな影響を与えた。後進国の近代化の波の中でロシア人としてのアイデンティティの確立に苦しみ、虐げられた民衆との精神的一体化を求めるロシア文学の主人公のなかに、日本人はおのれの姿を発見したのである。とりわけトルストイの人気が高かった。

相馬御風

相馬御風（本名・昌治、1883－1950）は西頸城郡糸魚川町（現・糸魚川市）の、旧家の一人息子として生まれた。1906年に早稲田大学英文科を卒業すると、再刊された『早稲田文学』誌の編集に従事し、その第二次から第三次にかけて活躍、評論界で自然主義運動にまい進した。25歳の時、早稲田大学創立25周年に校歌「都の西北」を作詞し、1911年から母校でヨーロッパ近代文学思潮などを講義した。

御風はツルゲーネフ、トルストイ、ゴーリキイ、アンドレーエフなど多くのロシア文学作品を英訳から翻訳し、またこれらの作家についての評論も発表した。御風の仕事は、ロシア文学、とりわけツルゲーネフを明治40年代を中心に広く浸透させるにあずかって力があった。彼はやがてトルストイの人道主義へと傾倒してゆく。

御風は恩師・島村抱月が創設した芸術座に参加し、1914年にトルストイの『復活』が我が国で初めて上演された。ヒロインを演じた松井須磨子の歌う「カチューシャの唄」（抱月・御風作詞、中山晋平作曲）が一世を風靡したことは、あまりにも有名である。しかし1916年に『還元録』を発表すると、御風は33歳で突如郷里の糸魚川に戻り、後半生の34年間をそこで送った。『還元録』にトルストイの回心の書『我が懺悔』の影響があることは疑いない。

相馬泰三

相馬泰三（本名・退蔵、1885－1952）は中蒲原郡菱潟村（現・白根市）に生まれた。1906年に早稲田大学英文科を退学。1912年に広津和郎、葛西善蔵らと雑誌『奇蹟』を創刊したが、この雑誌にはアルツィバーシェフ、ブーニン、ソログープ、メレシュコフスキー、チェーホフなどのロシア作家の翻訳が掲載された。トルストイの『アンナ・カレーニナ』、『復活』を英訳から相馬御風と共訳、またゴンチャローフの『オブローモフ』も英語から訳出した。泰三はチェーホフの冷静な情熱を愛し、その幾編かの短編小説にはチェーホフ的な抒情とヒューマニズムがみなぎっている。泰三はショーロホフの『開かれた処女地』とパンフョーロフの『あるコンミューンの悲劇』を、農民文学として高く評価した。彼は二葉亭四迷に私淑し、『浮雲』にならった大河農民小説『信濃川』を書くという構想を抱いていたが、それは実現しなかった。

原　久一郎

原久一郎（ひさいちろう、1890－1971）は北蒲原郡水原（すいばら）町に生まれ、新発田中学（現・新発田高校）に進学した。ここで英語教師から英訳の『復活』とチェーホフの短編『コーラスガール』を教わって、ロシア文学への目を開かれた。1910年、早稲田大学高等予科に入学。原は英訳『アンナ・カレーニナ』などのロシア文学の作品を耽読した。英文科を卒業後は日比谷図書館に勤務しながら、アルツィバーシェフを原語で読むために夜は東京外国語学校ロシア語選科に通ってロシア語をマスターした。1920年に早稲田大学露文科が設置されると、講師として教鞭を執った。その後ビリュコーフの『大トルストイ伝』の翻訳に取り組み、自宅に「トルストイ普及会」を設置した。1940年に『大トルストイ全集』全22巻の個人訳を成し遂げ、1955年には改訂版『トルストイ全集』全47巻を刊行した。その翌年に日ソ国交回復後最初の文化使節団団長として訪ソした。他にドストエフスキー、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ショーロホフなど数多くの作品を訳出した。水原町立図書館に「原久一郎文庫」があり、「白鳥の湖」として名高い瓢湖の湖畔に「光あるうち光の中を歩め」と刻んだ「原久一郎記念文学碑」が立っている。

小川亮作

小川亮作（1910－1951）は岩船郡金屋村（現・荒川町）の農家に生まれた。ハルビン学院で３年間ロシア語を学んだ後、外務省の留学生試験に合格。小川はモスクワでロシア語

の勉強をしたかったが、ソ連行きを志望する友人に譲って、自分はイランの首都テヘランに赴いた。そこで11－12世紀のペルシャの詩人・哲学者・科学者オマール・ハイヤームの詩集『ルバイヤート』に出会う。1935年に帰国。この頃小川は石川啄木の短歌と詩をロシア語に訳したが、これは未刊に終わった。第二次大戦後は外務省勤務のかたわら文学の翻訳に専念し、1949年に『ルバイヤート』を上梓した。これはペルシャ語の原典からの最初の日本語訳である。同年にロシアの作家グリボエードフの喜劇『智慧の悲しみ』を刊行。これも原典の脚韻を念頭に置いた翻訳で、巻末の解説は69頁に及び、著者の生涯、思想と本作品について詳細な検討がなされている。今日にいたるもこれがわが国で最も詳しいグリボエードフ論である。

第５節　新生ソ連との交流、報道

1917年にロシア革命が起こり、史上初の社会主義国家が成立した。この新生国家との交流、報道に情熱を燃やした人々がいた。

内藤民治

内藤民治（たみじ、1885－1965）は南蒲原郡法成寺村（現・三条市）の農家に生まれた。1906年に渡米して８年間滞在、プリンストン大学で学び、後に大統領となるウィルソン総長から多大の影響を受けた。1913年に『ニューヨーク・ヘラルド』紙の特派員となって世界52カ国を歴訪、帝政末期のロシアには半年滞在した。1917年に帰国後、月刊誌『中外（ちゅうがい）』（「国内と国外と」の意。英訳 ”The International”）の主幹として活躍した。この雑誌の特徴として、軍国主義否定の立場、第一次世界大戦の終結とロシア革命に関する独特の主張、社会主義者に執筆の場を提供したことが挙げられる。同郷の堤清六が本誌のスポンサーだった。後に内藤は1019頁の大冊『堤清六の生涯』（1937）を書き上げることとなる。1919年に「日露相扶会」（後の社団法人「日ソ相扶会」）を組織し、ソ連邦承認運動に働いた。1923年にはソ連極東代表ヨッフェを日本に招くお膳立てをし、後藤新平、川上俊彦ポーランド公使との会談を実現させて、その後の日ソ国交回復への道を開いた。

同年末に内藤は国賓としてソ連に招かれて１年半滞在し、トロツキー、スターリン、チチェーリン、ルナチャルスキー、カリーニンら名立たる政治家と意見交換を行った。この折スターリン、トロツキーと３人で撮った写真が残っている。片山潜とはニューヨークとモスクワで親しく交わった。片山の死後日本で公刊された彼の遺稿「革命的社会主義への道」は、内藤がモスクワで彼から受け取ったものである。1924年に北京で行われた駐華公

使・芳沢謙吉とカラハンの交渉の裏面工作を進めたのも内藤であり、この結果翌年に日ソ通商条約が締結された。1931年に尾崎行雄を会長として発足した「国際日本協会」の実質的中心は彼だった。内藤は社会主義者ではなかったが、民間外交の先駆者だといえる。新劇の女優・伊沢蘭奢（らんじゃ）の自由恋愛の相手としても有名である。

布施勝治

布施勝治（かつじ、1886－1953）は頸城郡手島村（現・上越市）の庄屋の家に生まれた。東京外国語学校露語科を卒業後、『大阪毎日新聞』に入社。1912年に特派員としてペテルブルグへ派遣され、そこで『ノーヴォエ・ヴレーミャ（新時代）』紙の主筆エゴーロフと名ジャーナリストのメーンシコフを師として記者修業を積んだ。同年秋に始まったバルカン戦争に従軍。その折同じく従軍していたモスクワの『ルースコエ・スローヴォ（ロシアの言葉）』紙の記者ネミローヴィチ＝ダンチェンコからも多くを学んだ。翌春ペテルブルグに戻ってペテルブルグ大学に入学。同期生にカラハンがいた。1917年の革命はペトログラード（1914－1924年の間「ペテルブルグ」はこう改名された）で身をもって体験した。「ボリシェヴィキ」を「過激派」と訳したのは布施である。翌1918年、ドイツ軍の接近にともない彼は一旦帰国した。

同年、再度ソ連に入るべく、布施はまずウラジヴォストークへ行って７カ月間待機するが果たせず、翌年フィンランドへ向かった。そこで入国許可を待つこと１年、1920年４月７日についにモスクワ入りを果たした。そして６月４日クレムリンで『大阪朝日新聞』の中平（なかひら）亮特派員とともにレーニンの共同インタビューに成功した。中平より３日早く東京へ打電された布施の記事は、６月10日付の『東京日日新聞』のトップを飾って大きな反響を引き起こした。彼は都合９回ロシアを訪れ、トロツキー、スターリン、チチェーリン、ブハーリン、カリーニンらと会見した。『労農露国より帰りて』（1921）ほか多くの著書がある。

第６節　シベリア出兵

ロシア革命の翌1918年、日本は極東に軍隊を派遣した。この干渉戦争に14カ国が出兵したが、そのうち最大規模のものは日本軍だった。1920年に連合軍はすべて撤兵したが、日本軍のみはニコラエフスクで起きた日本人居留民虐殺事件、いわゆる「尼港事件」をきっかけとして北樺太を占領した。日本軍が最終的に撤兵したのは1925年のことで、出兵期間は６年８カ月の永きに及んだ。

新潟県からは高田第13師団に属する新発田歩兵第16連隊、村松歩兵第30連隊、小千谷工

兵第13大隊が、1919年10月にウラジヴォストークに上陸した。新発田歩兵第16連隊はニコーリスク市、次いでスパースコエ市、村松歩兵第30連隊はハバロフスク市、小千谷工兵第13大隊はアムール州に入った。翌年１月には高田第13師団の残り全部が出動した。1921年に帰還したが、第13師団全体の戦死者は200 名を超えた。

おわりに

以上のほかにロシアと関わりをもった人物として、自然主義勃興期の先駆的な文芸評論家・長谷川天渓、国家主義運動の理論的指導者・北一輝、ドストエフスキーを愛読した坂口安吾、事象としては満蒙開拓団などを挙げることができるが、これらは紙幅の都合で割愛した。

第5章　　来日白系ロシア人